



# 親と子

この予期せぬ人間関係

伊藤友宣著

# 親と子

—この予期せぬ人間関係—

伊藤友宣著



## まえがき

親とか子については、ふつう別にとりたててどうこう言うべきことはないものだ。特にじぶんの親子関係についてとなると、それがたとえ親の立場にしろ、子の立場にしろ、ことさらに触れたくもなし、ごく曖昧なまま、いわばどうしようもないものだ位に決めこんでいることが多い。

しかし、世の中のさまざまな人生を見聞してみると、親子の関係ほど意外性に富んだ人間関係はないように思われてきます。「親子」というものの中に、わたし達がまだまだ摺み切れていないなにかがある。この本に出て来るのはどれもみな、いわば特殊な環境における特殊な人と子どもとの関係です。ところが、それらを他人事として眺めていくうちに、意外と身につまされて思い当ることが多く、どきんとして自分の場合をふりかえってみる。親として、子として考えてみれば、だれにとっても「親と子」はまさに予期せぬ人間関係だと気づくでしょう。

ふつう世間ではあまりにも、親子の関係を、特に生まれたての頃の関係を、「育児の技術」という形でとらえずぎます。しかも、一方では「人間同士のつき合い」としての親子関係を、いわば自然主義的というか、あまりにも無作為に放置しすぎていると思えてならない。そこ

をおろそかにしていたら、人間個人の主体性なんて成立するわけがないのに、みごとにそこを軽視したり無視しています。そのくせ漫然と子どもの将来に安心や期待を抱きがちです。

教育というもの、あるいは人生そのものだって、幼い頃の親子の関係によっていわば内側から培われた土台、その土台の上に構築されるのです。土台のありようによって、教育の効果も、また人生そのものの姿も、千差万別の違った形になります。生まれたての子どもと親の、人間同士としてのつき合い方。それが、子どもの人生の方向づけの基本的要因となっているところを、わたしなりににはっきりと確かめたいと、考えつづけてきました。

さて、これはもともと大阪の月刊雑誌「大阪人」に、「親と子を考える」と題して昭和四十九年の夏から二年にわたって連載させてもらっている、その前半の部分をまとめたものです。あちこちに手を入れなおし、一冊としてのまとまりを考えて、連載には無かったこの本としての終章をつけ加えました。最初、子育ての手引風の連載をするつもりで、気が負いが過ぎてペンが走り、具体例を出そうとつとめた結果、わたし自身の試行錯誤のなりゆきを語る筋道におちてしまいました。同誌編集部はなにも言わずに、書きたいことを書きたいだけ書かせてくださったのです。ありがたいことです。またとない反省の機会を与えてくれました。

ここには、わたしが二十歳代後半に中学生のためのカウンセリング訪問を始めた頃から、三十歳代の始めに家庭養護促進協会という里親運動の民間団体に事務局長として参加するに至る

までの、くどくどしいような迷いごとが述べられています。その期間の紆余曲折が、わたしの子育て論のおぼつかないながらの基本となつていたので、そこを書きました。

とはいっても、自分のしてきたことをさも大変らしく、ああしたこうしたとこまかく述べたてるのは、いかにも見苦しいものだと気づかぬわけでもないのです。こんな本を書くなんて、なんと滑稽なことをしてしまったのだろう、とも思います。内側のなんだか恥ずかしいようなことでも平気で書く人だなあと、思われるに違いありません。

それに、概して赤裸な語り口というものには、これみよがしの露悪や、巧妙な偽善とかが織りまぜられていない筈がない。わたしの表現も、その例外ではない。やり場のない恥ずかしさに胸ふさがりながら、敢えてこれを書いたのは、自分の感じていることを、多くの人に手触りの感覚でじかに受けとってもらいたくて、それならばどうするかというと、現実の場面に即して、自分のしたこと考えたことを、具体的に書く以外に方法が思いつかなかったからです。

ところで、わたしは、この本の中に登場するのはみんな、実際の人物ではないように努めました。何人かについての事例がひとつになっていたりします。すべてそのままが実在する姿なのではありません。その意味で架空の存在だとみなして下さい。

去年（昭和五十年）の春に前記の促進協会を退き、小さな自分の仕事場に「神戸心療親子研

究室」という表札をかけた、一般家庭の相談のしごとをはじめました。すると、里親運動といういわば特例と言え言えなくもない範囲に限られたことではなくて、世間のなにげない人々の暮らし全体が、いまは決して人間個人を強くする方向にむいてはいない。これは大変だ大変だと、日ごとに痛感するようになりました。その思いの中で、これをまとめたのです。自分でもはがゆい位、表現の未熟なところや舌足らずのところが目立ちます。自分の未熟さを自分の書いたもので目の当りに確認するのは辛いことです。現実のひずんで傾いてゆく全体状況の中でこれを書くのだという意識が、自分のくじけがちな気持を支えたのだと思います。

福祉や教育が、公的な行政化されたものとしてますます強大となり、人々は全体傾向になだれ込んでそれに依存するしかない。全体の流れに目をうばわれると、自分の内心がみつめられなくなります。そして、置き忘れられた個々人の「心」を、なにやら、いつかはびこったような神秘主義が侵蝕しはじめています。

ほそぼそとながらも自分のしごとと人生を大事にしよう。そう心から願いながら、この本をいま頁を開いてくださったあなたに捧げるのです。

昭和五十一年四月

伊藤友宣

目次

まえがき ..... 1

序章 とらわれず、あなどらず ..... 9

育児はやりなおせない 一貫しない育児態度 わたし自身の  
立場 子どもになじむ訓練も おとなの優越的態度 自然  
な母親のすがた 育児の意味の重さ

第一章 失われた信頼関係 ..... 29

ある中学生との出会い 自信のない淋しい少年だ 疑ぐり深  
いおばあちゃんや おばあちゃんの人生 苦労して育てた子  
どもが… みんな共犯者なのに やっぱりダメなのか

第二章 肩書きのない人間同士の関係 ..... 51

被疑者の目の色 前向きになってきたのに いまが大事な時  
だ 誰のための熱心さか やっぱりダメらしい

第三章 答は長い年月のあとで ..... 70

別々の泥沼でもがく 教条だけではダメである 逆にひきずり落とされて オレもお前もバカなんや 共犯を確認すること

第四章 家出して来た中学生 ..... 89

四歳児の拒否の目つき 無関心になりあう事も大事 不本意な暮しが背景に 学校へ行くようになったが つながりが深まってくると 一年ここへ置いてほしい

第五章 気負いすぎた青年の失敗 ..... 113

いま彼らになにが必要か 受け入れるよりも説教ばかり 無為無策の生活の態度 明確な自己主張と共に 限らない敗北感が…… 赤ちゃんをみてやれや

第六章 子を生み育てる “重さ” ..... 136

生まれながらの不平等 セイイチのこの悲しみ 部屋は空っぽ心も空虚 生む前からの親子関係

第七章 0歳児の “親子関係” ..... 153



## 第八章

厳しくするか、甘やかすか

.....

172

すべての基本が0歳の間に 知情意の基礎としての《情緒》  
生理に支えられた情緒 　　ひずみの基本もまた0歳で

一人びとりの付和雷同性

直輸入アメリカ式育児

どこもか

しかも人間不在

受容と拒否の二律背反

基本の情緒を共有

し得るか否か

## 第九章

「よく育つ」ということの意味

.....

193

どのように育ってほしいか

十項目は一つにつながって

「完全」がよいのではない

だれともうまくやっていたいける条件

## 終章

生きづらい、誰もみな.....

.....

214

自己規制して、狭くかたい子育て

親と子の予期し得ぬ人間関

係 親子関係が自然に醸造される土壌

ひとの子もわれも自

然につつまれて

たじろがないで見つめ続けられないか

《自己に問いつづける

人間の福祉》

青木茂夫

.....

238

## 序章 とらわれず、あなどらず

育児はやりなせない

子どもがどんな風に育ってほしいか。願いはそれぞれ人によって違う。

あなたはどうか。

……いったいどう育ってくれたらいいのか。ほんとうはよく分らない。正直なところそう言わざるを得ない、という人が意外と多い。とりあえずいまはミルクを……と、あたふた、赤ちゃんを育て、とりあえず入学が、とりあえず進学が……。それ以外なんにも頭にはなくて、やがてとりあえず就職を、とりあえず結婚を……と夢中になってやっていったら、あつという間に、いつか子どもの方が、いまはとりあえず親の老後を……という事で懸命にやってくれる。それで一生が過ぎる。過ぎてみれば人生なんてあつという間の出来事です。

すんなりそれでうまくいくのなら、それでなんということはない。すんなりうまくいかない場合が、しかし、世間にはよくあるもので、だから、なんとなく親は潜在的に不安なものです。

誰にとっても、人生のこれから先きは、はじめて通る道であり、わが子と自分の親子関係もいまから先きどうなっていくか予知出来ない。だいたいこう行くだろうと、めどを立てていて、そのめどから大きくはずれたら、予想外の事態に、どう対処するか。そんなことを考えると、親はいつでもどこかしら不安なものです。

学校からの調書に、親の養育方針を書く欄があって、つまり、どんな子どもに育てたいかを書く欄があって、どう書いていいかわからない。体裁を考えて、まあ、そのときの思いつきを書いておく。書いて子どもに持たせてやっから、ほんとうはどうかしら、と思う。考えたってわからないわ、と茶碗でも洗いながらつぶやいたら、もうあとは頭がない。そういう人も潜在的に、不安です。

さて、わたしはこの本に、子どもが育っていくことの難しさと、親は子育てというものをどう考えるべきかということについて、自分の体験の道筋をたどりながら書こうとしています。一般的ではないかも知れない事例を読んでもらっているうちに、自分のことについても思いあたる。そんな読み方をしてもらえたらと願います。わたしの考えが果たして正しいのかどうかそれはわたし自身には断言出来ないことです。読み手のほうでいろいろに判断していただくほかない、と思います。

キーキー叱ったり、えらい気をつかって気げんをとってみたりしながら、いつも心の底で、うちの子どもはこれでいいのかしらと気になっている親が、まずひとつのおち入りやすい落し

穴は、自分ひとりだけがこんな不安にさいなまれていて、よその親はなにひとつ不安をもっているようには見えない。わたしだけだ、わたしだけだ、と神経質に思い悩んでしまうことです。

不安はみなあります。よそ目に見えないようなのは、単にそう見えるだけです。わたしはいろいろな家に入り込み、時にいろいろな人の心のうちに入り込み、そこで感じて来たことは、人と自分を比較して、これは他人事ではない、自分のことだ、と思わずにおれなかったし、逆に、またしても自分だけじゃない他人もそうなんだな、と思わないわけにいかないのでした。

子どもを育てるといふ作業は、一生ごとだから大変です。いまオーブンで焼けつ、あるケーキが、うまく焼けたか失敗か、という不安は、あと10分もしてオーブンから出して見たときに結果は判明する。もし失敗したら、子どもや主人にごめんねと謝まって、どうにかこうにか食べられるものなら無理にも口に押し込んでもらったらカタはつく。あしたもう一度挑戦して、もう少しうまく出来れば、それで名誉バン回です。

ところが、子どもをどう扱うかという問題は、きょうやってみたことが、きょうだけでかたがつかない。あす新たにやってみて、あす成功したらそれで解決というわけにいかず、きょうやったことの上に、あすやったことが上乗せされるという感じである。つまり、きょうやったことが将来にひびく。うっかりしているうちに間違った扱いを続けて、子どもに困った性格が出来てしまったら、それと一生つき合っていかなねばならん。

「あなたが見る目がないから、夫のえらび方を間違えたのよ」

と、親が、恋愛結婚に破れた娘を罵倒し、娘は娘で、

「そんな見る目のない子どもを育てたのが親の間違いじゃない。いまだから言うわよ。こんなわたしに育ててしまったのは、いったい誰の責任?！」

と、叫ぶ。そういうところにまで尾をひきかねない。子どもを育てるのは大ごとです。

にもかかわらず、まだ小さい子どもを育てている親というものは、案外気楽に子どもの取り扱いをケキ作りと同じ位にいつでもやりなおしがきく、失敗したらやり方を変えたらいいと思いついでいるふしがある。

### 一貫しない育児態度

二十年後の成長した結果と、いまの子どもの生活とが、頭の中で結びつかないから、気楽にいつでも取り返しがきくつもりでいるのであって、そういう親は、こんな風に言う。

「こんな子でも、大きくなったらまあどうにかやってゆくようになるんですよ」

確かにだいたいそういうものだ。思うようにはならぬものだ。神経質に考えないことも大事だ。でも、そんなに気楽に言っていて、自分の子どもに限って不意に予期せぬ困難にめぐり会うこともある。そのときあわてふためいても手遅れである。こういう親の言い方は、親の謙遜でもあり、自分のしたことを過大評価しない謙虚さはいいが、まあ、無自覚な気楽さもあってそういうっておれるのだ。気楽さ自体は尊いのですが、無自覚がしまつに負えないのです。

子どもがおとなになるには、ある時期になにか天の配剤というか神秘的なものによって、飛躍的に成長させてくれるものだと考えるのか。まさかそう考えるわけでもないでしょうが、子どもの成長の時期時期のようすが、子どものまだ小さいうちからはなかなか予測出来ないもので、近所の好青年を見れば、うちの子もあんな風に育ってくれるかも知れないと胸をふくらませ、知人のむすこがぐれたのを聞けば、そんな風にうちの子もぐれてしまったら大変とばかりに、やたら不安にかられて大急ぎ家に帰ってにわか作りの説教話を、こんこんと聞かせる。

こんこんと、というのは親の方の気持であって、子どもはむしろきよときよと親の顔を眺め、心の中で、

(ハハア、かあさん、またどこかでなにか聞いてきたな)

ぐらいに、ちゃんと悟ってしまっていたりするわけです。

子どもはなかなか、親のああせえこうせえの命令についてくるものではなくて、少しも意のままにならない。親はすっかり自信を失い、結局、インスタント・ケーキのこつを教えてもらうみたいだ。

「先生先生、子どもはどうやってしつけるのがいいのでしょうか」

などと、もうどうしようもなくなっているから、あどけなく正答を求めようというわけです。

A先生に教えてもらったやり方でひとつやってみて、それでどうしてもうまくいかないとなれば、次はB先生の書いた本に忠実に従おうと努めてみる。つきつきあれやこれやとやってみ

る。いろいろ違った方法で、親の頭がいっぱいになってしまふわけです。

A先生もB先生も、それぞれおそらく大きな間違いがないかもしれませぬ。教えられたなりにやることは決して間違いではないでしょうが、A先生はA先生なりに正しく、B先生はB先生なりに正しくて、どちらも一貫性のあるものなのに、あれからこれへとやり方を変えたら、その変ること自体が大変な混乱を子どもに与えることになってしまいます。その混乱の責任はA先生にもB先生にもない。まさに親自身の責任なわけです。

それに気づかぬわけでもないが、あれもうまくいかない。これもうまくいかない。それではどうしても次はC先生のおっしゃるやり方で、ということになる。つまり、インスタントのホットケーキと同じように、きょううまく焼けなくても、あすうまくやろう、粉の銘柄を変えようか、フライパンが悪いのか、いっそホットケーキより、パン作りを試みよう、というように手を変え品を変え、前後の脈らくのつかないようなことになる。

インスタントものは、どうも好きにはなれない。いまどき、わたしのうちではまだ、ガスコンロの上に小型ながらあの重い木のフタのついた昔のカマでご飯をたいています。家にしても速成のプレハブ・デコラ、新建材住宅は、すみずみまで無駄がなくて合理的ですが、人工的に見ばえはキラキラしてこざれいで、中にいると自然な皮膚呼吸がとめられる感じがして、好きになれない。

古くて少々傾いて、ふすまのあけたてがうまくいかないが、土壁で夏の虫もやたらと入って

くるといった感じの方が、合理も不合理も、人間の生きざまをすべて呑み込んでくれるという感じで、気持ちになじんでくれるのです。親子関係もそうでしょう。親の生きざまが、年月の重なりと共に、自然にひとつの形を生み出してゆく。そういう親子関係こそが、無理のないものであるのに違いない。

自然にひとつの形を生み出してゆく一貫性。そして合理も不合理もすべて呑み込んでいく無理のなさ……。みんなの親子関係がそういう深まりへ進んでいくには、いったいどうすればいいか。古いものの自然さを見なおし、また一方で姑息を脱して新しく試みることの良さを見おとさず、それこそ、なにもかももう一度とらえなおしてみる。自分の目でとらえなおしてみる。それがつまり、自分のあすを創る出発点なのでしょう。これから生きていく道は、わたし達が自ら創る道ですが、親子関係も、先人のだれとも違う関係が現に出発してしまっているわけで、これから展開してゆく道は、これまでのすべてのひとびとの生きてきた知恵、それらをこそ、踏みしめる足元の大地として、踏みはずさぬようにしっかりと自分の足で立ってみなければならぬ。そして未知なる彼方を自分の目で見すえていかねばならぬ。

### わたし自身の立場

わたしはもちろん、子どもはこういう風に育つのが一番理想的なのですよと、まるで教壇の上から先生が子どもに教えさすようなことは出来ません。正しい解答を人前にためらいもな



くさし示すというようないそれたことが出来る程、偉くありません。

ただしかし、自分ではこう思うのだがなあと、つぶやき続けてきたのは確かです。けれどもそれが絶対正しいか、などと詰めよられたら、自分の考えの正当性を検証する立派な方法論をわたしはまだまだ持つに至っていないので、返事に窮してしまいます。そして、ええ……まあそう思うんですがねえ、と語尾を口の中にごしてしまふ。ことばをにごして頭をかいている以外にしようがない。

ただ次のようなことは言えるのだと思います。

誰でもなに程かの歳になったら、なにかひとつ位はとりえというものが出来るはずですが。わたしの場合、おもにこれまで親が育てられない子どものための「里親さがし」を仕事としてきました。

世間にはあまりない珍らしい仕事です。「里親さがし」といっても、素手であちこち駆けずりまわって里親になってくれる人はいませんか、と訊ねて歩くわけではありません。

大新聞が紙上で呼びかけてくれて、わたし達はその反響を待つのです。大阪と神戸で民間活動として、いまでも続けられています。(わたしは昭和50年の春に、その仕事を退職して、それ以後では、フリーのカウンセラーということになりましたが……)。神戸では神戸新聞が昭和37年から、大阪では毎日新聞の大阪地方版が、もうずっと今まで、毎週一回、あなたの愛の手を」と題するかこみ記事で、どなたかこの子の里親になってくれませんか、と呼びかけてくれてい

るわけです。

その子はわたしが育てましよう、兵庫県下及び大阪府下の人々から年間一千件以上の申し出を受ける。それを受けるのがわたし達の仕事で、そこから「里親さがし」の本番というわけです。

その中から適任者を選びだす、といったら語弊がありますが、子どもが親に育てられないのは、それだけのいろいろな事情があるのだから、育ててあげましようか、ハイ、お願いしますという風には、なかなかトントンと事が運べない。育ててくれる方に思いがけない事情があとから生じたり、子どもに思いがけない問題があったりして、いったん引き取ってみたいけれど、育てるのは無理だということになって、帰されてきたりすると、子どもひとりの一生にとってそれは一大事です。慎重にやらねばならない。この仕事の中でいろいろと考えました。

児童福祉の相談機関、つまり公立児童相談所が、親に育てられない子どもの福祉を保証するそのうちの一部の仕事として、市民有志に里親になってもらって子どもを育ててもらおうということ。そのことの正しい意味と実質の難しさゆえを、民間レベルで広げ深めようとして、この家庭養護促進協会が昭和三十六年から活動してきた。わたし自身は翌年の三十七年から、同協会にかかわってきました。

わたし自身、実はその年、つまり三十七年からしばらく、未熟な若さで実際に里親になって子どもと共に暮す体験を持ち、以後、この仕事にかかわりを持ってきたのですが、この本では

わたしが中学校教師になろうと考えた頃、つまり二十五、六才の頃から、里親をひろげる同協会の活動に、事務局長として参加するに至った三十一才の頃までの、いわば、人生における青年期の終りの紆余曲折について書きました。わたしの子育て論の基礎的体験の部分です。

### 子どもになじむ訓練も

子どもというものはどうかして、こう育ってほしい、というわたし自身の願いは年ごとにふくらみ、明確な輪廓をもっていくきます。わたしの心は、それこそ繰り返し繰り返し、毎日毎時間、なにをしても、なにを見聞きしても、なにごとを考えるにしても、つまるところはこの願いにつながってしまいます。よくよく子どもを育てる、子どもが育つ、ということについて、だけは考えてきました。子どもとつき合うこと、そのつき合い方などについても、よく考えてきたつもりです。

たとえば、始めて出会った子どもと、早くその場になじむには、どうすればいいか。その工夫が当面の仕事にまず必要な場合、それを一生懸命あかこうかと考えて来ざるを得なかったわけです。

その工夫の基本は、まずその子どもの性質とか、その時その場の気分とか、その気分を作っている背景の事情とか、そんなものを、いわば直感的にさっと把握することです。つまり、とっさの反応としてパーンとつかめる感じでないといけない。そういうことに気づくにも、年

月がかかりました。

子どもは動物的な感受性を、おとなよりも強くもっています。汚れていない新鮮な心は、ものを感じとるのが早い。しかも、ひとより不遇な状況にあって、他人のあずかり知らぬひとりだけの不安を体験してきた子どもは、特に、誰かとの出会いやこれからの自分のさきゆきの事に関して敏感です。

こちらが向うを見ぬくより先きに、あちらがこちらを診断してしまっている。ア、この大人はなじめるな、なじめないな。敵だな、味方だな。やさしいぞ、つめたいぞ。話せるな、話せないな。なんだか得体が知れないな。オレを無視しているな。口先きだけで子どもをバカにしているな。とてもいっしょにやっつけていけないな。

そういう子どもの判断は理づめではありません。ことばの説明を聞いてその筋道で納得するのではありません。子どもは、おとなの全体の感じで自分なりの察し方をしてしまいます。それが正しいかどうかは別問題です。客観的にみて正しい判断かどうかは別問題です。ただ即座に判断してしまふ。その速さが速いのです。

たとえば、母親がある人に好意を持ち、信頼し、相手もそれを受け入れているときとは子どももその人になつきやすいという事が、あります。子どもにとっては初対面なのに、母親の前で、さっとその人になつていくと、母親は満足して感に耐えぬように、こう言う。

「まあ、子どもの直感力は確かですね。いい人かどうかを、とっさのうちに見わけけるわ。こん

なに早く他人にうちとけはしない子なのに、この子は……。あなたの本質を、子どもは見事に天性の直感で見ぬくのですね」

実は、子どもが相手の人間の質を本当に洞察していたかどうかは、大いに疑問です。人の前では緊張がちなお母さんが、その人の前では例外的に安心してリラックスしていたから、子どもも知らず知らず安心して気楽にふるまったのかも知れない。子どもは直感力が確かだといっても、見せかけだけでごまかされてしまいもする。だからおとなよりも、子どもの方が誘拐されやすい。

### おとなの優越的態度

初対面の幼い子どもに接するときには、子どもの目をのぞき込むとうまくいかない。たくさんの子どもに接しているうちに、そんなことも気づいた。親切そうな目でのぞき込めば、のぞき込まれる不自然さに、ちょうどかたつむりがつのを隠すように、肩に力を入れてすくめ、体を硬くして、顔をうつむけたり、そむけたり、張りつめて動かない上目づかいの視線でこちらを盗み見たりします。

親切心いっぱいのおとなは、とまどって、もっと納得させねばと、一生懸命になり、ますます親切そうに顔面の筋肉をほころばして子どもをのぞき込みがちです。親切そうにふるまえばふるまう程、単純加算的に子どものかたくなさは増します。ついには大人のさし出した手を払い

のけ、おとなを体で突きつけ、憎しみや敵意に満ち満ちてきます。

それに大人がうろたえて、ますます放っておけずにかまいたてようとすると、もう、その両者の関係は、親切づくで優越的な大人と、それを払いのける子どもの防御の、作用に対する反作用という、はてしない悪循環を続けることになる。

わたしは、はじめて出会った子どもと、たちまちのうちに悪循環をおこす里親志望の人などの様子を見ながら、ふと、親と子の関係も、こんな悪循環が見られる、などと考えます。子どもが要求しないのに強引にさしでがましく親切を押しつける親の行為から出発して、世間の親子には、なんと根深い、これ以上の、風雪を積んだ悪循環が見られることでしょう。

子どもの態度は多くの場合、大人の態度の反映です。そのことに気づく余裕のない大人は、自分は棚に上げておいて、子どもの様子にむかむかと腹を立てます。これほど親切に心配してやっているのに、こっちの努力に気づかず、この子はすなおに応じて来ない。なんとひねくれた子どもだと。

「親切にしてやっているのに」と思うときの、「してやっている」という気持が問題です。

こっちがしてやっていることが、いくら一生懸命でも、相手がちっともしてほしいと思わない以上は、ありがたみいわくというものです。

子どもよ、そのきみの即座の判断こそ、間違っているのだよ。そういつて分らせるには、幼い子どもならば、まだあまりにも余裕がなく理解能力がない。余裕を持つのは、やはり、大人

の方でなければならぬ。

いっせ、こちらの方が一度あっさり視線をはずしてやってしまったらどうか、かまいつけることをやめて、こちらの体を横に向けてしまう。すると、緊張と反撥にかたまっていた子どもがオヤ、といぶかり、大人はなぜ横を向いたかな、ボクのことは気にならないのかな、と、大人の背中に視線を投げ、おそろおそろ、そして次第に大胆にこちらへまともに向いてくる。

こちらの背中を、射すような好奇心で眺めはじめ。その視線は本気で鋭いのです。それに気づいたこちらは、まるで予期せぬまばゆい光線をあびたとまどいのような態度に思わずなつて、しまうほど、こちらがやわらかな、しかもまじめな心を持っていなければならぬ。

子どもの視線は、そのときまるで無気味な物体を物色する目つきで、無遠慮にこちらに注がれます。子どもは実はずけずけしくこちらを仔細に観察し評価しはじめるのです。

つねに子どもに対しては優越的でなければならぬと信ずる大人にとっては、それは、年もいかぬ未熟なものが、敬うべき大人に対して決してしてはならぬ暴挙だと思われる。屈辱を感じてとても耐えられぬほどである。

が、そんなに気になるのでは、子どもとただちになじみあうことは出来ない。屈辱を感じない鈍感さが大事といっているのではありません。まさに屈辱を感じつつ、その屈辱をたちまち表に出してしまうのでなく、いわば上等のブランドーを舌の上でころがして愉しむように、屈辱という苦い酒を、愉しんで味わってやる、という余裕が大人の方にいるのです。

子どものずけずけしい観察を気にしない風でいて、まるで子どもの存在などこちらの頭には入っていないようである。その実、子どもの動きが呑み込んでいる。子どもの方へ特に働らきかけはしないが、子どもの存在が、こちらの心にしつかりときざみ込まれている。そして、その、こちらの子どもへの関心の自然さを、子どもにもそれとなくわからせていける態度。そういうこちらの心の気配というものが大切なのです。なんとなしの親和感、というようなものは天性からきた相性というものではなく、そういう努力によって作られるものです。そういうことを、わたしは長い間考え考え、やってきた。

### 自然な母親のすがた

たとえばどこかの部屋の中での、数人のひとが立ち合うあらかたまった場面でのこと。こういう場面は、里親さがしの仕事の中でしょう。中ありました。子どもとははじめて会って、どうしてもその場ですぐこちらになじんでもらわなければならない。そんなとき、出されたソフトドリンクを、自分の分を自分の手許へひきよせるその手で、つまりその一呼吸の間に、子どもの分も何気なく子どもの手前へ、置きやってやる。ちょうど、親が自分の子どものことはいつも自分のこと以上に自分の計算に入っているのと同じように、それをするわけです。おとな同士の会話はそのまま続けながらなので、子どもへのその配慮はまるで無意識的習性的自然さです。そういう態度の、ちょっとしたところにあふれる感じが、子どもにふと、親近感をおぼ



えさせます。子どもの感情を、

「なんだか、はじめていま会ったという気がしないな」

という気持へとさそい込んでいく。

大げさに言えば、小説などに出てくる表現、つまり「なんだかはじめてと思えない出会い、まるで前世に知り合っていたような親密さ」などという、あんな感じに似た思いを、子どもに抱かせる工夫というものが必要なわけです。

文章に書くと、なんだかもってまわった作為に思われる。書いている自分もわれながら浅ましい感じがしないでもない。しかし、実際の場面では、その子どもにも早くなじむ必要があるのだし、なじめるものだという十分な確信がない限り、なじめるものではないのです。また、そのことを一生懸命考へてのことであり、ほとんど無意識的な習性であることも事実なので、慣れれば自然にやれる。また自然にやれなければ困る。しかし、考へてみれば、わたしの行動はなんやかやの作為の積み重ねでなりたっている。はしたないといえばこんなはしたないこともないのである。

もともと、親が子に対する心がけというのが、ほとんど無意識的なもので、子どもにとって、それがいちばん気楽です。子どもに近づくには、それに近づいた行動をとれるのが一番だと思います。

よく母親が、近所の主婦と話を夢中になっている。たとえばこんなふうにな……。

「もう、それで困ってしまふんやで。うちのおかあさんだけやない。姑というものはどうしても嫁とはそんな風になりがちのものなんや。おまえだけが悪いのやない」主人はそう言っただぐさめてくれるのやけど、わたし、なんやもう情のうてねえ……」

などと、姑についての愚痴を続けながら、背中におぶさっている子どもを、一生懸命ゆすりあげ、首をねじて、ねんねこの襟元をのぞき込み、すぐに落としてしまうビスケットを、何度も何度ももたせなおす。こうしたやりにくい動作を繰り返しながら、なお姑の愚痴に熱中してとどまることがない。ああいう母子の情景で、母親とは、子どものことがいつもいつも無意識的に心の奥の領分を占めたものだと感じられるわけです。はじめての子どもとなじむことでもああいう親子のつながりの直截さを参考にしたらうまくいく。

### 育児の意味の重さ

子どもは母親がいくら話に夢中になっても、自分から心が離れていないことに安心し、その安心感から、ねんねこの中で自分ひとりの世界を作って心を遊ばせながら、母親の長い立ちばなしの終りを待つことが出来るのです。

そういう自然な大人と子どもの心のからまりというものの、意味と形を呑み込んでいないと知らない子どもと早くなじむということが出来にくい。

そんなことを、いつもいつも感じさせられ、考え込んできました。考え込んでいるうちに、

突然、思考は飛躍してしまって、世の中が良くなるということとは、結局人間同士の関係がよくなるということである。待てよ、なにかとてもすばらしいことが分りかけて来たぞ、といつか胸があつく燃えはじめ、日盛りの明るい舗道に、わたしの靴音が快的に高く鳴りはじめたりするのでした。

人間同士のつながりの原動力、あるいはその基礎のあり方というものは、子どものときにそのひとの気分というか、個性というか、が、どのように作られたか、という事と密接につながっています。

子どもの育ちを考えることは、わたしにとっては、すべて人間社会の出来事について考えるきっかけになります。また逆にすべての人間社会のことを考えることは、必ずすべての子どもの育ちを考えるきっかけになります。

いつもわたしは、個人の些細な事柄から、考えを社会全体のことへと飛躍させるくせがあった、もったいえば、地球全体人類全体へと飛び上ってしまっただうしようもない。具体的事象からすぐに観念の世界へとさまよい込んでしまい、本当の現実主義は、本当の理想主義と表裏一体、ひとつのもののだといたがる。わたしは一種の誇大妄想狂だと笑われても、実際そうなのだろうと思う。自分の持病で他人を傷つけたり迷惑をかけてはならぬと、それでも細心の努力はしているつもりなのです。が、とにかく、小さなことと大きなこと、表と裏、強さと弱さ、それぞれ相反するもの、次元の違うもの、範疇の異なるものなどを、一つに結びつけて考えごと

をめぐらすのは嬉しい。それはわたしにとってのひとつの生きるしるしとなる。

わたしが生きるためには仕事が必要です。仕事が生きるためには、わたしが生きなければならぬ。しくじりの連続でげんなりと、失意のどん底に落ち込んだ時のために、こことこはしっかりと書きしるしておこう。わたしが生きるならわたしの仕事も生きる。仕事が生きるならわたしも生きるのだと。こんなことばかり考えて生きてきたのです。残念ながら、そのほかには、なんの得手もない。子どもの育ちということについて考える以外は、自分に出来ることは、いまやなにもない。人はみんな、こうして30才、40才となって、もはやもと来た道は帰れない。きょうまで来た細い曲りくねりの道は、一本だけです。そのほかのどれでもない。

わたしには、世間のいろいろな商売のことなど、なんにもわからない。ものの生産のこと、流通機構のこと、投機や金融のこと、法律のこと、政治のこと、自然科学のあらゆる学問、その他もろもろのこの世の中を成り立たせている仕事や仕組み、すべての人間の営み、そういうものを、わたしはあまりにも知らない。知らないでいいとは思わない。けれども知らないのが現実です。

それぞれの道をいく人がそれぞれの道のことをよく知っているのが当然で、それ以外の人がよく知らないのは仕方がないのです。ひとつの仕事を選びとった以上、それも、自分の好みや性格に合うものをたずねまわって探しまわってやっとなら探して、自分の一生の仕事はこれと決めた以上、その一筋のことにばかり注意や関心が集中するのは止むを得ないことだと思いま

す。

だからこそ、せめて自分の仕事の領分で感じたことを人につたえずにはおけない。わたしは自分で気づいたこと感じたことを、つぶやきつぶやき、子どもの育ちという一事にのみ明け暮れています。

子どもの心の成り立ち、ひいては大人の心の構造の形成過程を、学者世界の認識としてではなく、一般共通の世間人の実感として深めていくためには、われわれひとりびとりの大変な努力が、この先きまだまだ必要なのである。

子どもがどんな風に育ってほしいか。願いはそれぞれ人によって違う。わたしは、わたし自身の願いが、どんな風な形をとるに至ったかを、この本に書きました。

育児、子育て、とは、だれにとっても一生ごとの課題です。とらわれず、あなどらず、もっともつと追求されるべきです。その意味の重さを、わたし達はまだまだ正しく実感してはいない。

## 第一章 失われた信頼関係

### ある中学生との出会い

だいたいわたしの書く文章は、論理のすじ道をたどらず、いわば情緒の流れに身をまかせてしまう。つきあっていただくのに骨が折れる、慣れていただくのが大変だ、と思います。わたし自身の気持ちのありようでもいうべきものを、感じとつてもらいたいのであって、論理の構造の確かさで納得してもらえるよりは、全体の、わたしという人間のはまり込んでしまっている立場なり、生き方の気分、というか情緒というか、それへの共感によって、了解してもらえないのではないか、と、思っているわけです。

論理というものは、「仮定」という足場の上に立てられます。ところが、その「仮定」そのものに疑いをかけたり、親近を覚えたりするのは、情緒の働きによります。親子関係などというものは、論理で納得のいきにくいもので、子どもから見たら、生まれた時から子の親は、親である。ひとつの仮定を立てるも立てないもなしに、この現実から逃がれようがない。親と子

の情緒のからみが、人生の出発点であつて、そのあたりのことに触れるのならば、論理の筋道  
はあまり役立たない。そもも思うのです。

極端にいつてしまえば、わたしは、だれにとつてもどんな場合でも正しい、間違つていない  
と、論理的に説明し、断言出来るようなことは、何ひとつ書けない。だから、万人に納得して  
もらうというだけだ。それだ。野望のもとに、自分の考えをのべるわけではありません。

極論すれば、この本を書くのは、これを読んで下さった方々のうち、どなたか、たった二、  
三人でも、ああ、ここに自分の知己がいる、と感じてくれはしないか。そんな願いが果たされ  
ることを目的としているのです。

さて、わたしは二十五才にもなつてから、教育心理学専攻の学生でありました。中学校の先  
生になる決心がとうとう出来たので、勉強しはじめたのです。でも、わたしの性分には、いわ  
ゆる大学のアカデミックな勉強がふさわしいものではありませんでした。主任教授にお願ひし  
て、実験校となつてゐるある中学の非行防止研究計画の一員に加えてもらいました。そして、  
その中学校へたびたび出かけるうち、中学校で、長期欠席や非行傾向の生徒の家庭訪問指導の  
活動を許可してもらふことになりました。昭和三十五年ごろのことです。その市には、まだ、  
家庭訪問指導の専任の先生というのは配置されていませんでした。どのクラスにも、いわゆる  
問題児とされる生徒がおりました。

そのうちのA少年は、長期欠席の生徒でした。わたしは手はじめに、A少年の家庭訪問をは

じめました。このA少年についてのことを書きはじめると、ちょっとやそつとでやめられない。だからここに書きません。A少年のお母さんが、次に、「わたしとこ以上に困っている人がいる。おばあさんが、孫をみてやっている、二人だけの家庭です。イトーさん、行ってやって下さい」といつて連れて行かれたのが、仮りにアキラとしておきましょう。古いうす暗い淋しい昔ながらの土間に、わたしは立ったのです。中学二年生のアキラと、六十才を過ぎたおばあさんの二人暮しです。

わたしは、アキラという少年が、家族との信頼関係を失ってどううろたえたか。そのうろたえにわたしはどうつきあったか。そして、このアキラのうろたえは、うろたえの質として、そう特殊なものではないが、ふつう、親子関係の中で、このよううろたえが解消できずに、当事者間のますます不本意な問題へと発展していく。どう喰い止めるべきか。そういうことを書いてみたいと思うのです。

もう中学二年という年令は、六十才をすぎたおばあちゃんの手にあまります。おばあちゃんにとつて、アキラ少年の出たらめは、とても許せるものではない。アキラとしては、年老いたおばあちゃんという自分にとって唯一の保護者が、頼りなくて口うるさくて、とても我慢がならない。

おばあちゃんは毎日毎晩アキラの顔を見ると、もう休みなしに、ああしろこうしろと、注意し、説諭し、監視し、疑い、とにかくアキラにまといつく。アキラは全く反発し続けで、おば



あちゃんの顔を見るとたてつく、がなりたてる、故意にウソをつく、心配させるようにさせるようにと、もつていく。

だんだんとアキラの日常生活は荒れる一方で、おばあちゃんはおろおろする一方でした。家は生計のために、二階をおばあちゃんの姪の家族に貸しているのですが、アキラは往々にして、その二階へ忍んであがって、二階のおばさんのサイフから数百円、数千円と盗み出し、友達と、夜遅くなっても帰って来ない、ときどき朝になつてから帰ってくる、というようになつていた。

街のゲームコーナーのゲームや、映画や、飲み喰いに、友達にも大ふるまいをして、夜更け、一文無しになつてそこの他人の自転車に乗って帰ってくる。空地へホイと自転車を乗り捨て、さて、それからどこで寝泊りしたのやら。

おばあちゃんは、いまに帰ってくるかと待ちぼうけて、眠れぬまま、夜が明ける。

学校をサボることも常時なので、学校から家へしよつちゆう連絡があり、保護者であるおばあちゃんは、その都度、学校へ出かけていって、担任や補導の先生の前で平身低頭。

おばあちゃんは、あけてもくられても、日がな一日、ヨロヨロと弱い足腰をたてなおすのもやつとの思いで、あつちへ、こつちへ、

「アキラ来てまへんか。うちのアキラ、見かけなはらんかったやろかなア」と、尋ね歩く。



Tom .9

## 自信のない淋しい少年だ

アキラの家へ、夜八時ごろ、はじめてA少年の母親に教えてもらった道をたどり、訪ねていきました。学校の方でも問題グループの一人と目されていて、わたしの訪問を承認してくれたのでした。それがわたしにとつての、おばあちゃんと初回の面接でした。アキラはその時、いなかった。

わたしは、来意をざっと説明しました。おばあちゃんはわたしの説明をのみ込んだのかどうか。おどろいて緊張していっばいにひろげた小さな目を、わたしは忘れません。おばあちゃんと言った。

「学校の方からも、イトーさんという人が近いうちに行く、よく相談にのってもらおうようにいわれています。Aさんにもあなたはんのこと、聞いてましてな。Aさんとこへも、わたしの間行きまして、どうぞしてうちにもイトーさんとやという人に来てもらうてほしいて、頼みに行つたんですがな。

が、なあ。アキラはもう、どういうてええんかしらん。ウソでかたまつた子どもや。なにもかも信用出来ん子です。世間の人は口先きで同情してくれても、かげ口たたいてるの、知ってます。けど、ほんまに、よききてくれなはつたなあ。

あなたはんが、もしもアキラのことを心配してくれなはるのやつたら、わたしやあなたはんを神さんのおつかいと思いまつせ。どうぞ、な。どうぞして、アキラをまともにもどしてやつ

てくれなはれ、な。ほんま、お願いします」

わたしは、腰を立てて顔を上げ、おろおろと繰り返すおばあちゃんの言葉を聞きながら、アキラという、中学二年生にかかわり合う準備が改めて心の中にととのつていくのを感じた。

これは、いまから十五年前です。アキラはだからいま三十歳になっています。

おばあちゃんは、そのわたしが訪問した第一夜、

「どうしても、今夜のうちにアキラに会ってやって下さい」

と、わたしに懇願しました。

「ちよつとここで待っていてくださらんか。アキラのいるところは、だいたいわかっていますのやで。すぐ帰って来ますからな。連れて帰って来ますからな」

と言ひ、言ひ、路地から明るい商店街へ、おばあちゃんはヨタヨタと出ていった。わたしはあわてておばあちゃんについていく。

その夜は、しかし、アキラがどこにも見当らなかつたのです。次の日を約しておいて、その日に行ったら、おばあちゃんは、アキラをどうなだめてひきとめたのか、少年は家にいたので。土間から開いた障子の、もうひとつ奥のふすまの内側から、立ってじつとこちらを眺めて動きませんでした。

おばあちゃんに強いられてこちらへ出て来たのを見ると、はじめて見ての印象は、それほど荒れた印象ではなかつた。どちらかといえばオットリ型。おばあちゃんの手ひとつで育てて

来たらしい、年寄りっ子的なおだやかさがあり、中学生の中では肥りぎみの方だろう。反応のあまり鋭くない感じであった。

わたしを見る目は不審に満ちていたけれど、好奇と期待もあきらかに現われています。

わたしはおばあちゃんにすすめられるまま、座敷へ上りました。よそよそしくない単刀直入なわたしの様子に、どうも拒絶出来ない、弱った弱った、という感じで、アキラは、わたしの話に応じます。腰を落ち着けて帰ろうとしない気配を、アキラは、不思議に思いながら受け入れていきます。なんとかうまく話を勉強の進み具合の方へ持って行って、いつのまにか勉強道具を持って来させて、いつの間にか、机の脇にわたしが坐って、その日の宿題の数学を解かせはじめたのを、おばあちゃんは、小さな目をいっぱいにかけて見つめていましたが、バタバタと外へ出かけていったと思うと、小皿に買って来たさくら餅とよもぎ餅を盛りあげ、

「さあ、なんにもないけど、おあがり下さい。まあなんと、アキラが勉強しはじめてますのやなあ。さあ、いっぺんどうか休んでな」

そわそわいそいそといったおばあちゃんの振舞いです。

問題は八分通りわたしが解いてしまうのですから、進むのは当り前です。

「なんだ。もつともつと出来んのやないかと思ってたら、したら出来そうや。これやったら楽やぞ。おいアキラくん。時々夜にオレが来て、一緒に勉強しよう。やつてもやつても進まないだら面白くないけど、やつて進んだら面白いぞ」

二時間も勉強の相手をしてしまいました。終わったとき、ほっと一息して、はじめて、わたしを見なおし、正面から顔を見合させた。少年がはじめてその時に、まともになたしを見た。わたしに通じて来たのは、これまでのこの少年の、淋しさ、自信のなさです。

### 疑ぐり深いおばあちゃんや

アキラはおばあちゃんに明らかに反撥しているし、おばあちゃんをバカにしている。しかもそれでいて、だれかを頼るわけにいかない。頼れるものはおばあちゃん以外にはかに誰もいないのです。

今になって考えてみると、このアキラとおばあちゃんの関係は、核家族の親子関係の、ともすればおち込みやすい型です。お年寄りだからおろおろするのも無理はない、とその頃思っていました。が、今の若いお母さんにもこのおろおろ型が多いのはどういうわけでしょうか。

おばあちゃんは、アキラという孫が、可愛いくてたまらない。けれど、思春期のはじまりの少年期の心のうつり変りがまるでつかめていません。

おばあちゃんは、夜遅くやって来て、ずかずか上り込んで、いつのまにやら家庭教師まがいの事をはじめ、アキラが意外とそれに従うのを見て、もう、すがるのは、イトーさん以外にない、という。

わたしは、その夜のうちに、アキラ自身のことばを一言でも二言でも確かめておきたいと思

いました。おばあちゃんの聞いているところではアキラはなにも話そうとしません。

「ちよつと外へ連れ出すよ。勉強のあととは少し外の空気を吸わんとあかんから。歩きながら少し話をしますよ」

というとき、おばあちゃんは、ああ、ああ、そうしてやってください。と、いそいそとわたしとアキラを夜の商店街へ送り出してくれました。

商店街は夏の終りの雑踏がまだまだ続いて、行く人どおしの肩がふれあう程で、そんな光りと影の間を、アキラとわたしはひとまわりしていくうちに、ぼつんぼつんと、アキラのことばをひきだした。

「悪いことばかりしてきたんや。なんでこうなったか、わからへんねや。やめようと思つてんねんけどな。おばあちゃんがうるさいのが、いやなんや。腹が立つんや」

その時、むこうからきて、バタンと肩ふれ合つて、あわてて去つていった小さな老婆がある。ハツと、その老婆はわたしの前から逃げたように思ったので、なにかおかしいなど、後姿を見た時、アキラが、

「おばあちゃんやノちえつノ疑り深いババクソ」

そういつて、ベツとつばを吐いた。

いそいそと送り出しながら安心出来ずに、わたし達のあとをつけてきていたのです。雑踏の中をあつちへ折れこつちへ折れていくわたし達をどこかの辻で見失つたのでしよう。違つた辻

を曲り曲り、わたし達のちようどむかいの側から、人ごみの中を探し探しやってきて、なんと夜目のきかぬおばあちゃんは、わたし達と不用意にもぶちあたってしまったのです。

もう小さな後姿は雑踏のどこかへかくれていました。その人ごみを眺めながら、おばあちゃん心の心の中にうずまいている緊張、不安、いらだち、疑い、そして一生懸命さを察すると、わたしは胸が痛んだ。心臓がきゅんとしまる思いがした。

そして、アキラの、けわしい、おばあちゃんを軽蔑し切った罵倒が、よりいっそうわたしの心臓をきゅんとひきしめたのです。

実は、このアキラの話はさつき書いたように十五年前の話ですが、今、わたしが小さな相談室で、つきつきと出会っている親ごさん達が、みんな似たところをもっています。育てるものと育てられる子どもの心と心のへだたりというものは、世間にどさつといっぱいあります。

心のへだたりを、うめるでだてがなくて、どんどん悪いへだたりへとつき進んでいくことほど悲しいことはありません。

### おばあちゃんの人生

アキラのおばあちゃんは、アキラはウソを平気で言うようになったから、それがもとで、次第に生活も荒れて、不良になってしまったのだと思っと思っています。正直でさえあつたならば、こんなことにならなかつたのだと思ひ込んでいます。



だからアキラに説教をするとき、ウソを言うな、ウソを言うな、と説教する。そして、ウソやろ、ウソやろ、本当を言いな、本当のことを言うのやで、と強要し、そう強要されることは、アキラにとつてみたら、はじめっから疑われているのやということになるのです。

二階で、またサイフのお金のごっそりたりない、という騒ぎが起りました。わたしが行きはじめて最初の紛失事件です。

きつとアキラや、アキラにきまつとる。おばあちゃんが甘いのか。どうするの。このままほつといたら、だいそれた大泥棒になつてしまうよ。おばあちゃんの責任や。

やいやい言われて、おばあちゃんは、アキラをつかまえて、おろおろと、胸をおどらせ、つもらせ、詰問します。

「また、また……。二階のおばちゃんのサイフ。こんどは七千円無いて。まあ、おまえ、どうするのや。アキラ、それほどまでに盗みをせんと、もうどうにもならんのか。ええ?! もうええ、もうおばあちゃんを殺して、さあ、包丁で、ひと思いにつきさして、死のう。殺しておくれえや。つきさしておくれや。ワーツ」

肺がまるごと出てくるかと思う程のおばあちゃんの動哭の途中をさえぎつて、アキラが叫びだすのです。

「やめんかいやノババア。オレがどうしたと言うねんや。おれがなに盗つた言うねん。おれが盗つたと、誰が証明出来るのや。自分の孫を泥棒にして、そいすむのんかいやノ」

わたしの目の前で、延々とこのドギツイわめきとののしりが展開したこともあった。アキラはしまいに家を飛び出す。

おばあちゃんほうめく。

「ああ、ここまで苦しんでいるわたしの気持ちを感じてもせずに、またウソを言い張ろうとしている。ああ、わたしや孫にまでこんな思いをさせられて。死んだ方がましや」

夫に早くから死にわかれ、女手ひとつで息子を育てたのです。その息子が孫をのこして家出をしてしまう。残った孫はこんなに、子どもの間から大悪人。わてがいったいなにをしたというのや。わての前世がどんなに悪いもんであったのかしらん。生き地獄とはこのことや。

わたしが数回夜に訪問するうちに、おばあちゃんはアキラによりも、自分の話し相手になつてくれと願うようになった。泊まっていけ、この淋しい淋しい二人暮しも、イトーさんが一晩でも泊まってくれたら、ちよつとは活気が出る。泊まってくれるんやったら、ビールも西瓜もひやしておく。魚安のさしみも買ってきておく。イトーさん、わての一生、どんなもんやったか、まあ一晩聞いてみておくれやす。

乞われるままに、一晩、明りも消し、蚊取り線香ばかり匂う残暑のむし暑さの中で、わたしはおばあちゃんの一生一代記に耳を傾けた。

野良で働きづめの四国山奥の娘時代のすえ、結婚も束の間、夫は応召して支那で戦死した。乳呑み子をかかえての女一人の孤軍奮闘。そして苦しさの中での愛児への溺愛。

苦勞して育てた子どもが：

あれほど自分を犠牲にして、二十代の半ばから母であることだけに賭けて来たわたしの願いをよそに一人息子は、わたしの反対する恋愛に走ってしまった。手堅い役所への就職も、わたしがかけずりまわって成功させたのに、まあ、勤め二年目にやめてしまって、結局パーティーとやらの水商売。そこで知りあったのが、アキラの母親です。

もともと、こんな堅い遊び知らずのわたしの息子が、大変な遊びぐせ。遊びぐせの結果が水商売で、この女とどうでもこうでも一緒になるといつて家出さえくり返した。結局、どうもこうもなく、その女と添わしてやることにしたんです。ところがアキラを生んだ頃には、この夫婦仲にヒビが入っていた。

アキラの両親、つまりおばあちゃんの息子夫婦は、アキラがまだ三つの時に離婚したのです。アキラは、不決断な父と母とおばあちゃんの間を幼児期、転々として育った。

ことの成り行きは、アキラの父も、そして母もそれぞれ、再婚する方向に進んだ。母は父との離婚後数年目に正式に再婚した。そしてその夫婦の間に子どもも出来ている。父は、ある女との同棲を続けている。

父も母も、どちらもアキラを引き取る余裕がないといひ張る。父が親権者となつての離婚であつたけれど、男手では育てられない、同棲では、ますます育てられないということになつて、おばあちゃんがアキラの六つの時からずっと面倒を見てきた。おばあちゃんは、アキラに口ぐ

せに言うのに、

「おまえのことでわたしが苦勞するのは、なにもかもおまえのふた親が、道に反した勝手放題をしたからや。おまえが自分のことを不幸やと思うのなら、親をうらめ、親をうらめ」

ところが、アキラはアキラで、両親が離婚のはめに落ち込んだのは、おばあちゃんがいけずをして、お母さんをいびり出してしまったんや。おばんの性悪がなんもかもの原因や。おばあちゃんがおばくを不幸にしてしまったのや、と思ひ込んでゐる。以前に父母から思ひ込まされてゐる。おばあちゃんとアキラは、しかし、そんな風なお互いの気持のズレに充分気づいていながらそれをどうしようということも考へていゝなかつた。いや、おばあちゃんは、そのズレに気づきながら決してそのズレを認めようとはしなかつた。

そのズレを認めようとはしないのは、おばあちゃんが不幸せな運命を、あまりにも一生懸命に乗り越へることに力を注いできたから、いまも力を注いでゐるからです。認めたらおしまいやと、無意識のうちに気持ちをかたくなに固めきつてゐるのです。

今なお、保険の集金人をして、自分とアキラの生活を立ててゐます。

生まれあわせのために、忙しすぎて心の余裕が持てず、子育てにしくじり、しかも姑の役割がうまく果たせず、息子も嫁も離反した。今は孫にもそむかれ、ひとりでおろおろするばかり。トラブルの渦中、そのトラブルの中心に自分がある。その不幸の意味を、おばあちゃんは客観視出来ない。しようとしなゐ。

自分を客観視する訓練というものは、ある年令を過ぎてからだ、まったく至難のことです。今のおばあちゃんに望むのは無理というものだ……。わたしはおばあちゃんの話聞きながら心でそうつぶやき、暗やみの中で、そつとため息をつきました。

### みんなが共犯者なのに

おばあちゃんは、アキラのことは一生懸命心を尽くして面倒を見てやったのに、と考えている。夫に先き立たれ、子にも、嫁にも、孫にもそむかれるのは、そむいていくみんなが悪いのだし、自分の不幸は前世からの因縁だと考えることであきらめをつけようと努めている。しかし、それはあきらめようにもあきらめられないのだ。

もつともつと、人間の心の動きというものを、大きなワクでとらえたらいいのに。わたしはそう思うけれど、おばあちゃんにそう気づいてもらうのは無理です。

まったく単純なことだけれど、問題の渦中にもまれ込んで育ち、もまれ込んで生きてきた。客観的に外から自分を眺めることを教えられたことがなく、眺めたためしもなく老いを迎えては、そうしろと要求する方が無理というものです。事態の正しい把握は、おばあちゃんには望めない。

アキラがウソを言うことからアキラの問題がはじまったのではなく、おばあちゃんが無理頑張りをせざるを得ぬような不幸なめぐりあわせが、少年をウソでかためたようなものへと仕立

てていく原因になっている。

そんな風なことをわたしが口にする、そんなバカな！わたしはなんにも間違つたことはない。一生懸命子を思い孫を思って生きてきた。わたし自身の楽しみなんか、なにもかも捨ててただ一途に、人生の苦勞をふりかぶってきた。と、おばあちゃんはいきま。

わてはまっ正直に生きてきた。それが、もしかしたらいかんというのですかいな。そんなアホな！悪いことをしなかつたわてだけがなんでこんな苦勞を背負わせられんならんのやろ、と肩をおとします。

あばあちゃんとかキラとの間の失われた信頼関係の背景は、こんな風でした。

誰が悪いとは言えない。いや、むしろ反対に、もともと誰も悪くはない。しかし誰もが共犯者なのです。家族の不幸の成り行きは、いつでも、まず、不幸のきつかけというようなものがある。それを乗り越えることが出来ないのは、乗り越え方がわからないからである。無理な乗り越え方をすると、とんでもない方角へそれていつてしまう。誰かが方向を間違つたことが、ほかの誰かの新しいゆがみのきつかけになる。みんなかかわり合つていて、あるとき加害者で、あるときは被害者なのだから、みんな共犯者といつてしまえる。

人間社会なんて、みんなそうでしょう。誰かが悪いのでなく、どっちみち、誰もみな悪に加担していつて、みんな共犯者なのだ。

さて、すると、アキラにかかわりをもとうとしたわたし自身も、かかわりを持つに至つた以

上は、好むと好まざるにかかわらず、この家庭の問題についての共犯者の一人となってしまうのです。この共犯者意識がなかったら、アキラの家族の誰とも本当のつながりは持てない。しかし、カウンセリングだとか面接相談だとかの教えでは相手の日常生活に心情移入をしてしまう援助関係はこわれてしまうとかというように言います。わたしは、そこをふみはずしてしまわなければ関係は成立しないと思う。どんどんと足繁くアキラの家へ通いました。

アキラの担任の先生とも連絡をとりながら、アキラの家への訪問を、わたしは続けたのです。夏が過ぎ秋が深まり、冬がやってきました。

アキラは急速にわたしに対して信頼感をもってくれるようになりました。すくなくともわたしにはそう思われた。おばあちゃんも自分の息子にするかのように、夜となく昼となく訪れるわたしの存在を重視してくれた。

アキラの不行跡は、おだやかになつたように見えた。学校をサボらぬようになったのは大きかった。次第に彼の不良交友の相手みんなが、わたしになじんでくれるようにもなった。

しかし、アキラの家で、金が無くなることは、やはり時々、おこつたのです。

悪いことに、空巢ねらいにおそわれて、その犯人がほどなくつかまつた、ということが、アキラの家でも、また近所でも起こつた。それはもちろんアキラには関係のないことでした。金が無くなつたら、すべてアキラのしわざときめつけるわけにはいかないということになる。

「それ見てみる。泥棒やろ。外から入つた泥棒のしたことを、みんなオレのせいにしやがつた

んや。オレと違う言うても、信用せんと。泥棒がつかまつたんやないか」

しかし、二階の住人も、おばあちゃんも、アキラを疑うことを止めるわけにはいかない。月に一、二度、金が紛失する。アキラは涼しい顔をしている。犯人はわからない。

おばあちゃんは、サジを投げたように言う。

「あかん。あきませんで。アキラは、もうあかん。根っからの盗みぐせや。もうなおりはせん。イトーさんがなんぼ苦労してアキラの様子を見てくれても、アキラのくせはなおりません」

やっぱりダメなのか

わたしはおばあちゃんに言った。

「おばあちゃん、そうなんでもかんでも疑ってしもたら、おしまいや。アキラは立ち直れる。立ち直れるよ。絶対大丈夫や。でも時間がある。この間のおばちゃんのサイフの中の五百円は確かに自分が使った、と言いつたでしょ。ぼくにちゃんとそう言うてくれたんやで。したことはしたと言うようになって、それから、徐々に事をしなくなる。時間を待たんとあかん」。

「それを、あんたに平気で言うた、言うのが、おとろし事です。イトーさんもあんじゃないよ。にされてんのやで」

ふてくされて隣の部屋にこもっていたアキラが、二人の話に聞き耳を立てていたらしい。ガラツとふすまを開けて、そこに立ちはだかつて言う。



「おばあちゃんは、オレを信用してえへん。むかしからそうや。そんならそれでええやないか。盗みもせんものまで盗んだ盗んだときめつけて、それで氣イが済むんやったら、それでええやないか。オレがすることはなんでも悪いんや。よおし、どうせ盗った思われるのやったら、ほんまに盗らな損やなあ。盗つたるわい、盗つたるわい」

「へエ、えらそうなこと言えるなあ。この前の前は、お前がとつた五千円。絶対とらへんと言いつて、おまえの引出しから出てきたやないか。それでもそんなかつこうのええことがいえますのんか」

「勝手にオレのものにさわつて、監視ばかり。おばんがどこまで監視しよるか、ためしてみたつたんじゃ。なんでもかんでも、調べまわりやがつて。こんな家飛びだしてしもたるか」

「ああ、出え。出なさい。出てひとりやつていけるんやつたらさつさと出ていつてしてもてほしいわ」

「そんなら、どこへ行こうと干渉するなよ。そんなこと言う位なら、な、ええか」

「ほんまに、どこでなにを買うのやな。なんでそんな金いるんやな」

「ほんまにええ加減にせえや。今度という今度は、なんと言うても知らんわい」

「今度、今度で、なにが今度や。ようぬけぬけと言うもんや。今度こそ、今度こそ。おばあちゃんが、どれだけ辛い思いをしとるのか、お前にはわからんか。ええ、わからんか」

おばあちゃんの目には涙がキラキラ。流れる涙をぬぐいもせず、アキラを見すえます。

「さあ、きょうはイトーさんもおつてのや。はつきりと自分がしたのならしたと申うてしまひ。さあ、言わなあかん。申うて」

「ふん、そうやつてははじめから疑つて、証拠もないのにおばあちゃんははつきりオレが犯人やとわかつてんのかいな。えらいなあ、神さんみたいやなあ」

と、一息おいてから、アキラは、

「そんな言い方あるのかいや！」

と、吐きだすように叫ぶ。

少年は隣の部屋との間の敷居に腰をおろし、腕をくんで、緊張したけわしい、不本意きわまりないという顔つきで、よそを見ている。時々肩で息つく。わたしは口をはさんだ。

「アキラ、その態度はあかんぞ。おばあちゃんの言うことはもつともやなあ。おばあちゃんの辛さが、オレにわかるもの」

と、わたしは、一オクターブ低く、ゆるく小さく、第三者のゆとりで話しつつづける。

「おばあちゃんは、おまえにウソばかりつかれてきた。これは事実やろがな。な。おばあちゃんにしたら、今さら『今度こそ』でもないわけや。な。けど、今日の『今度こそ』は今までと意味が違う、とおまえが申うなら、オレはそれもわかる。今日は、おばあちゃんとおまえだけでなしに、こうしてオレがおるねん。このオレに対しては、これが最初の『今度こそ』やねんものな。オレは、うん、『今度こそ』してないのやな」と信じていることが出来る。オレに対して申う

てくれるのやな。そうやな。違うか。そうやな」

わたしが静かにゆとりをもったテンポで念を押すと、アキラはうなずきました。

「今度こそは、してないのやな。間違いないのやな」

と、わたしがゆっくり繰り返す。アキラはもう一度うつむいたまま、うなずいた。そして、ポロボロッと涙をこぼすと、腕で顔をおおいました。

## 第二章 肩書きのない人間同士の関係

### 被疑者の目の色

証拠がない限りアキラは決して白状しないという。外からの空巢ねらいが実際につかまっていただから、いつもいつもアキラだときめつける訳にもいかない。アキラが自分ではないと言いはる。証拠もなく、外からの空巢ねらいだというしるしもない以上、曖昧なままで、警察に届けるのはばかられる。もしも万一やっぱりアキラだとしたら、やっかいなことになる。とても孫を警察につき出す気はない。そんなことをしたらおしまいだとおばあちゃんは、思っただけでも胸が鳴る。

曖昧なままで、暗に、みんなは金の紛失はアキラのしわざだと決めている。問題のおち込み方は、ちょうど狼とウソツキ少年の話そっくりである。一度疑われるようなことをしたら、あらぬ疑いをかけられても、それをぬぐう手段がなくなる。疑うものと疑われるものの関係はその時点でとどまらない。必ずもともとと関係が悪化する。どうしたらいいか。

わたしが訪ねていくようになり、アキラの生活態度に落ち着きが見えて来、金の紛失回数も目立って減った。そして、ここしばらく紛失事件はとだえた。ところが、ちょっと多額すぎる三万円という金が、二階のおばさんの財布の中から、ごっそり消えて大ごとになりました。

わたしがどう言おうと、アキラがどう否定しようと、おばあちゃんは、

「やっぱりアキラはもうなおらんのや」

と、つぶやいて、気落ちして、顔の色がありませんでした。

よく世間で、白か黒かは被疑者の目を見ればわかると言います。

わたしは被疑者の目の色を見て、無罪の確信を持った知名人が、弁護団を組織した有名な裁判事件のことなどを思いうかべました。

そして、わたしはアキラに、顔をこちらにむけるように言って、じっと目を見ました。

アキラの目つき顔つきを見て、わたしはなんにも言えなくなってしまうました。余計なんにも言えなくなりました。なぜかと言うと、アキラのわたしを見る視線には、とまどいがあったのです。わたしをまっすぐに見たのですが、一種の弱い光りがあった。

まっすぐにわたしを見たその視線の一種の弱さがなにを語っているのか。

それが、意外と、わたしには推測しかねたのでした。推測出来ずに、ただ重いものがのしかかってきた。というのは、彼の目は、わたしになにかを一生懸命訴えているのです。

なにを訴えているのか。

口では、金をとったのは、自分ではない。絶対ないと言っているのです。

彼の、わたしに対する一生懸命な視線は、わたしに無実を信じてくれと訴えているのです。うか。そうには違いありません。

しかし、彼のわたしに向けた目には、困り切ったような屈折した弱さもあつたことは間違ありません。まっすぐ目を向けたけれど、一種屈折したもひとつの訴えがあるのです。

彼がいま昂然と胸を張れないのは、たとえ、今度の事件が彼に無関係としても、度重なる前歴のために、今度一度の無実にも、そう強い態度はとれない。すねにきずもつ身のうしろめたさといったもののためでしょうか。目の色の弱さの意味は、そういうことでしょうか。

それとも、もしかしたら今度の三万円もやっぱり彼のしわざであつて、だがしかし、いまはせっかくイトーさんの信頼を得てきたのだ、家のみんなに疑われてすてばちになつていたけれど、イトーさんの信頼だけはつないでおきたい。ここで、事件の犯人だとバレたら、イトーさんはぼくに失望するだろう、どうでもこうでもここは、無実を言い張るべきだ。ウソでも無実を言い張る事情を許してくれという訴えが、目の色の弱さの意味でしょうか。

どっちともとれる。どっちかわからなければ、結局、アキラがこの度の犯人かどうか、黒か白かはわからないわけである。それではわたしは今、どういう態度をとるべきなのか。

わたしの頭の中はぐるぐるとさまさまな思いがめぐり、すっかり混乱してしまいました。

わたしは、きょうまでのアキラとのかかわりが一体になのか、を考えざるを得ないのでし

た。金の持ち出し。友人と一緒に浪費。次第に非行が、外でもはじまっている。その悪循環から、ついに脱しきれなくなってしまうているのか。おばあちゃんは、アキラは、外でも悪いことを悪い友達といっしょにしているに違いない、ときめ込んで嘆くけれど、アキラ自身にわたしが聞いてたしかめるたび、彼の言うのは他愛ない遊び、たとえばおもしろがってタバコを吸ったとか、ゲームコーナーで不正なやり方でゲームを一回多くしたとかの程度なのです。それ以外に、本当はもっとひどいことをして隠しているのだろうか。

そんなはずはないと、一方でわたしは否定したい気持ちがおこったのです。

わたしは、アキラをじっと見ました。

見れば見る程、白か黒かはわからなくなるばかりです。

ただひとつ、イトーさんは信じてほしい。その「願い」だけは、胸にひびいてきました。

### 前向きになってきたのに

いま彼のこの願いをこわしたら、せっかく前向きになった彼の生活を、またガタガタにしてしまうだろう。

アキラはもうその頃、ほとんど学校をサボらなくなっていました。ときどきは、わたしが横についてやらなくても、一人でノートを開けて形だけにしろ宿題に手をつけるようになっていました。担任の先生に大いに安心され励まされ、彼も、それは大変快活にわたしにも、

「K先生、ごっついよろこんでるねんで。無邪気なもんや」

と、口は悪いけれど、気持ちよく報告してくれていました。

落ちてきただけの成果は、中間考査にもわずかにあらわれていました。もったも、これまで、荒れていた時には、故意に、わかるところも書かない。白紙で出していたのです。

クラブ活動のサッカーの方でも、遠ざかっていた彼が、クラブに戻ってきたといつて、先生の引き立てを受けて、少しづつ積極的に、単調なトレーニングでも文句をいわずに参加するようになってきていたのです。

時々、授業をサボることはあったけれど、回数はぐんと減っています。サボった時につき合う悪友連に、わたしはひと通り会わせてもらっていました。それぞれくせが違ふ、面白い連中でした。まじめ一方の生徒よりは、よっぽど生き生きしていると思える面もありました。家にも学校にも、反撥の激しい言葉はく少年達でしたが、気楽な自分達のつきあい言葉で、割合いろいろと本音に近いところを、わたしには話してくれていたようでした。先生でも家族でもない、第三者だという気安さもあり、わたしが職業上の役割りや立場でなくつき合うのが、安心されたのもあったでしょう。

なににしても、アキラの暴走の進行はいま、中断しているのです。

印象的なのは銭湯での体験です。近所の魚安の末っ子のヒロちゃんという高校一年生が、わたしとアキラがフロ屋へ行った時に、来ていました。湯ぶねにつかかって、アキラが彼と親しく



話しているのが別に不自然ではない。近所同士の幼なじみという感じだったのに、フロ屋でヒロちゃんと別れ、路地を二人で歩きながら、アキラはわたしに、ヒロちゃんと話をしたのは二年ぶりや、というのです。

生活が荒れはじめてからは、成績優秀で明るくのびのびしたヒロちゃんは、故しれぬ反撥の対象となったでしょう。道で会っても知らん顔で通したらしい。

それが、夜も十二時を過ぎて、ひとの少なくなったフロ屋の湯ぶねで、二年ぶりに、でも、まるできのうのきょうのように、「オッス」と交歓していました。つき合いが回復したのです。

「いっつもいままで勉強かヒロちゃんは」

「いま試験や、これから帰ってまだ英語や」

ヒロちゃんは愉しげに充実したはずむ調子です。するとアキラも、

「おれも試験やねん」

と、当然らしく言葉をまじえています。頭に手ぬぐいを置いて湯から首だけ出して、くったくのない調子で、いい顔をして…。

石けんを使いながら、ヒロちゃんにわたしを紹介した。アキラはなんとも気楽なわらい声になにかの話の終りに「ヘッヘッヘー」とガランとしたフロ場中にひびかせてから、

「おれのおじさんでもない、お兄さんでもない。なあ、イトーさん」

と、わたしに同意を求め、

「ちよいちよい、オレとこに泊まりにくる人、おもしろい人やねん」

そして、ひきつづいて、

「ヒロちゃんはごっつい優秀やから、エエ大学に入りよるでエ、きつと」

と、わたしに紹介してくれたのでした。そして、三人並んでぎぶぎぶと湯を使いました。

アキラは、ほんとに前向きになってきています。長いトンネルを今、ちょうど、抜け出ようとしているのです。

### いまが大事な時だ

また、アキラはわたしに、幼なくして別れてから後の、父や母との交渉についても語ってくれた。おばあちゃんに、父のところへ生活費の請求らしい使いに出されたこともあり、そんな時、おばあちゃんに内緒で父にものをねだったりしていたらしい。父への敬慕は、離れて暮していれば、それだけ強いのでした。おばあちゃんはそれを感じては、あまりにも割に合わず、やっかみや腹立ちがつのるのでした。

実は、再婚して子もある母親の方へも、アキラは何度か会いに行っています。

母親は離婚の原因は、おばあちゃんのいけずだと、アキラに訴えているので、母をとがめずおばあちゃんを非難する気持がアキラの心にうずまいています。離れて暮す母親への思慕は強いのでした。

そのあたりの心に秘めているところを、アキラはおいおい明らかにしていきます。もはや、彼にとって、わたしは、近しい存在であるに違いありません。彼の前向きに開いていこうとする気持を今傷つけてはあかんぞ、とわたしは思います。

ところが、おばあちゃんにしてみれば、今述べたような、両親に対するアキラの思いは、見当違いもはなはだしい、というところでしょう。結局苦労しているのは誰や、わたしひとりやという思いでいっぱいでしょう。しかも、両親がどれだけのものか知らんけれど、毎日、毎日世話をして、こっちに甘えつづけて、アキラの日々の支えは自分ひとり。アキラ自身も、すっかりおばあちゃんを日常のこまごましましたことはまかせつきりにして育ってきた。おばあちゃん、アキラの生活の変化を認めながらも、二十四時間ともに暮すものだけが知る彼の生活内容の諸々の欠点を感じないわけにはいかぬ。アキラの心の健康の回復をそう安直に認めるわけにはいかないでしょう。金の紛失がつづく以上、結局はダメなんだと絶望する気持は無理もありません。しかも今度は三万円というはじめての大金です。

たびたび被害をうける二階の住人も、実は、ふた親から離れたアキラの生い立ちへの同情もあり、アキラにとっては親切な思いやりのあるよい人達です。特におばさんは、おばあちゃん留守の時に、しょつ中アキラの様子は見てくれていた。だのに、この金の紛失つづきで、それがショックでした。次第に荒れ放題になっていった経過を知る以上、アキラはもうダメだという投げだしの気持は、容易におさまらないのでした。



なにかの拍子でいままでの悪習をふつきろうとする子どもを、近親のものが、つい、固定観念でけなしつけ、せっかくのよい意図をこわしてしまい、子どもは意図がこわれたことに腹が立つ。周囲は、簡単にこわれるような決意ならやっぱりダメじゃないかとけなしつける。すると、反動で、やめるべき悪習により深く入りびたってしまう、ということは、多くの親子関係に見られます。ふふん、あいつの言うことはいつも同じや。結局言うだけや。という批評が、本人を立ちあがれなくするおもしなのであり、といって、ひとつひとつ信じてかかってもそのたびあつけなく裏切られるというのは、全くかなわないことでもあります。

アキラの再出発は、ここでみんなの不信をもう一度一斉にあびたら、あつけなく崩れてしまうように思えます。幸い、家での金の紛失事件は、学校までは聞こえていませんでした。それは、おばあちゃんの配慮というものです。腹をぐつとくくって、これは外に出すまい、とそう頑張ってきたくれていたのです。いま、おばあちゃんが失望してガタガタにゆるんでしまつたら、いろんな配慮もなし崩れに崩れて、学校や近所に、もっと、アキラの悪評が立つでしょう。内輪のものをどうこうするうちはいい。イトーさん、いつか、アキラは、外で事を起こすにきまっている、どうしよう、もうあかん、あきませんわ。と、おばあちゃんほうろたえている。実際、これまでの自転車の乗り逃げや、店先きの食い逃げなどは、学校へ通告があつても、学校がにぎりつぶしてくれてくるもの、また、ばれずにすんだものなのでした。それらと、この金を盗る常習とがむすびついてよそに知れたら、アキラにつく非行少年のレッテルは、決定

的になってしまいます。

わたしは、いま、アキラを信じてやらねばならん、と思いました。」

誰のための熱心さか

「アキラ、ほんまやな。今度の二階の三万円事件、おまえに関係ないのやな」

「ない」

「ほんまにおまえと違うのやな」

「イトーさんまで疑うのか。疑われても、しょうがない」

「いや、疑わん。おばあちゃん。ぼくはアキラを信じる。アキラはもう金を持ち出さなくなっている。だから、ぼくはアキラを信じるのやから、アキラを信じないことは、ぼくを信じないことやと思ってください。おばあちゃんがアキラを信じなかったら、いったいほかの誰がアキラを信じるのですか」

おばあちゃんは言った。

「ありがとさん。イトーさん、ほんまにありがとよ。そう言ってやってくれるのは、あんたさ  
んだけやがな。身内でもないもんが、なんで、そんなにかばって……」

あとは涙でした。わたしはぐっと胸がつまります。でも、ちょっと、こうして書いてみると  
なにわ節です。甘い甘い大甘の感傷劇。でもその直後、いい気なわたしは、びしゃっと冷や水

を浴びせられた。そのあと、土間に降りたところで、いつのまに降りて来ていたか、二階のおばさんが立っていて、わたしは、裏の古井戸のかげまで無言で誘われ、ひそめた声で聞かされました。

「あんたさんは、よう知りなさらんけども、アキラ、もうあきませんで。実はあんまり度重なるから、おばあちゃんにも言わんで、わたしだけでこらえてやってることも、いろいろありますのや。あの子のウソにごまかされていい気になっとっては、あんた空まわりしてるだけや、お人がいいわね」

これには、わたしは冷い悪意のようなものを感じました。わたしは心に反感のわいてくるのを感じました。と同時に、見事に足もとをすくわれた感じでした。

身内の人にとっては、わたしへの疑いもなかなかのものでしょうか。おそらく通常の理解を越える不可解な存在に思えたに違いありません。なんとというあつかましいお節介やきの学生さんなのかのために思われた意図があるに違いありません。度を越えた訪問。おばあちゃんの、わたしへの傾倒。わたしのアキラへの接近の無遠慮さ。

身内のものとしてこれにはいささかの危険を警戒したのも無理はない。

わたしは他人としてはあまりに深入りしてしまっている。実は、二階のおばさんは、アキラのことを教えてくれたのではなく、暗にわたしをこの家からしりぞけるのが本意であったかも知れません。

わたしは当時二十六才になっていたけれど、教育心理学専攻の学生で、時間の許す限り足げく、アキラの家に出かけていきました。夜、自分の家庭教師のアルバイトを終えてから、国鉄私鉄を乗りついで、二時間かかってアキラの勉強の様子を見に行くことなども常時のことになっていました。

これは非常識というものです。十一時すぎに着き、アキラの机の脇に座ってやり、十二時すぎの銭湯のしまい風呂につきあって、それから二時、三時まで、初歩からのおさらい。

でも、わたしの熱心さを他人事のようにみとれてぼんやりついてきていたアキラが、うす紙をはぐように、日を追って態度にはっきりした感じがでてきたのです。おばあちゃんは、アキラへの親近の態度や、わたしへの素直さを見て、信じられん、ああ、よかった、と幾度か肩をおろして息をはいているのです。

考えてみれば、しかし、これは、わたし自身のための熱心さでした。実のところ、アキラのためにしたことは言えなかった。二階のおばさんの不審は、その点においてあたっていただけです。

これは、自分のため、自分の勉強のためだったのだと言えば言える。勉強というといやらしい。もっと正確に言うならば、自分の生きる道を確かなものにしたいたいからでした。

わたしはその頃、やっと教師になるという生き方をきめたものの、せっかくの大学の教育心理学の研究室にあまり興味がもてなかった。つまり、自分が教師になった時、なにをどうした



らよいかのヒントが、わたしの力では、大学の中では見いだせなかったのです。それで希望して学外での問題の取り組みを許可してもらって、アキラたちのいる中学校へ訪れたのです。

Aや、Sや、Kや、Tや、Mや、Hなど、アキラ以外の少年たちへの接触も、その頃いろいろと続いていました。長期欠席。怠学。やくざ風のけんか。盗み。かつあげ。不良交友。いろいろとありました。ひとつひとつは書けないので、アキラのことにしぼって書いています。

わたしが、彼らのこと、そしてアキラのことに一生懸命になるのは、わたし自身の一生のためだったのです。それをアキラは直感したのだと思います。

いわばわたしが、わたしの人生という名の、とりかえのきかない舞台の上でアキラとのかかわり合いをはじめた。だからこそ、アキラはアキラで、彼自身のかげがえのない人生という名の舞台の上での出会いと認めてくれたのだと思います。

わたしはアキラとのかかわりそのものを、自分の人生の益とするつもりだから、アキラをいわば第三者としての目で見れない。すると、この一学生と一中学生の位置関係は、もうたとえば教師と生徒という職分や立場の対立する位置関係のヒナ型であることを超えてしまう。名称不明の、いや名称不用の、いわば、人間と人間との出会いだ。

考えてみると、世の中はみな役割り関係で終わっている。親子、夫婦、兄弟、友人関係、教師と生徒、お客と従業員、社長と社員、上司とヒラ。役割り関係の間では、すべて役割りのタテマエとしての言葉のかわし合いがあってもそれ以上のものにはならない。

特に、親子という、いわば内輪も内輪、タテマエなど存在するはずのない関係においてさえ、親の役割に対する子の役割というタテマエの間柄以上に深まらない関係がある。いったんタテマエでお互いに壁を作りあってしまったら、そのわくを破れない。

アキラ、オレはオレの人生という名の舞台を、降りるわけにいかない。ほかにとりかえもない。そこでオレはおまえとのつき合いをはじめている。どうにかやれないと、生きられない。よろしくたのむ。という意味のことを、例えばこういう言い方で彼に言うのです。

「おい、オレは先生という商売をやがてはじめるのや。そのための勉強に、アキラ、おまえのところへ来ているのや。おまえはおれの実験材料や。しかし、この実験に失敗するのは、かなわんことや。一生懸命やろう思てんのや」

すると、アキラは、見事に対応してくれました。

「アハ、かまへん、かまへん。イトーさんの実験、わりかしちゃんとしたもんやで。なんぼでもなつたで、実験材料になつた、なつた。熱心に来いよ。毎日来いな。実験に成功して、ええ先生になりイや、な」

そういう合ったときから、アキラはわたしを、あからさまに、好奇と関心の対象にして、自分自身の興味から、遠慮なくわたしを観察しはじめたのです。

やっぱりダメらしい

わたしとアキラの両方の人生にとって、お互いが意味のある存在になっていったのは、そういう筋道でのことです。

ところで、わたし達人間は、世の中という名の「舞台」に出演している。いや、させられているのです。死なぬ限りひっこみがつかない。

ところが、この世の中という名の「舞台」の上の出来事を見ているのは、それでは、誰か。

この舞台の上の芝居を見ている見物客のうち、わたしにとって一番かわりのある見物客はほかならず、わたし自身です。わたしは世の中という「舞台」を見物している。いや見物させられているのである。死なぬ限りこの芝居見物は中止させてもらえない。

人と一緒に自分が舞台に登場させられ、それを人にも見られ、自分も見物させられている。それが現実の逃げようのない姿です。

ところが、多くの人は、たいがい、見物客としてだけおられる錯覚をもっていたり、あるいは舞台上で見られる役割ばかり考えて、自分の目で舞台全体を眺める位置にあることを忘れてしまったり、どちらか一方にかたよりがちである。

劇場だと、観客席と舞台とは向き合っていて、人はどちらか一方に属するしかないわけですが、人生という名の劇場、世の中という名の劇場は、本来、超空間、超時間的な構造をもっていて、人、人、それぞれの意識の中にひろがって存在するものであって、常に演技者（行為す

る者)であると同時に、観客(観察する者)であるべき位置に、わたし達は立たせられています。観客だけでありたい、という人は、本当のかかわりあいを、実感出来ずに、生命の燃焼を味わわずに人生を終えることになるでしょう。

現代社会は、もともとのまるごとの生きざまを人為によって分類し、整理し、行う者と観る者を区別し、人びとの客観と主観の混然一体となった生命そのものの根を涸らしてしまいました。みんながみんな、わかった風に落ち着いて、真にわかる契機というものを捨ててしまっているのです。

わたしはアキラにとって、もちろん父でも兄でもその他の身内のだれでもありません。学校の先生でもないし、契約した家庭教師でもない。アキラの家庭の知人でもなかった。アキラとわたしは、単にアカの他人同士です。知り合ったもの同士。それ以外になにも肩書きのつかない関係。

現代社会で、肩書(職業や社会的立場)に条件づけられない人間関係というものの、なんと少なく稀になってしまったことでしょう。親と子というのも、本来カッコつきでない関係であったのに、中途半端な教養と、学校教育のとんだお節介のために、PTAママなどといわれて得意になり、親の役割り意識で身をかためた親ばかりになってきています。

それにしても、アキラには、その親が欠けています。わたしはアキラの親になりかわることは出来ません。しかし、一番手つとりばやく人間同士の関係を作れる立場にいまや入り込んで

いる、といえます。

大事なのは、親子ではなくて、人間同士というものだ。アキラよ、それを手づるにしておまへの人生という名の舞台で、自分でも満足のいく演技をするようになっていかねば。彼がそうなってくれなければ、わたし自身も自分の舞台の上でのいい演技をしたことにならない。アキラとわたしとの関係において、どこまで、主観と客観の混然としたそれぞれの生きざまにつきあたっていけるか。これがわたしの関心事でした。前向きになったアキラに賭けたのです。

それから数日後、アキラの家を訪ねた時、奥から戸口に立ったわたしを見るや、おばあちゃんが目を見開き、座敷につっ立って、ほとんど叫ぶようにこういった。

「あんた、イトーさん、やっぱり。あの三万円、アキラの本棚から。本の間から、出て来ましたのやで。アキラ、とび出してもう二日、帰ってきませんのやでエ」

そのうしろに、二階のおばさんが立っていた。険しくわたしを見ていた。

さあ、もういいでしょ。気安うに、世間知らずの若造が、遠慮もなく他人の家に入入りして善意づらしてかきまわすのもいい加減にしィ。アキラのことがあんたなんかの力の及ぶことかいな。

その目はそう語っていた。

アキラはどこへ飛びだしたのか。

ああ、やっぱりダメらしい。おばあちゃんは、わたしになにかことばをかえしてほしがって

第2章 肩書きのない人間同士の関係

います。わたしはかえすこともなく、戸口の前で、立ちつくしていました。

## 第三章 答は長い年月のあとで

### 別々の泥沼でもがく

子どもの言動が信用出来なくなつたとき、親はますます子どもを責め、非難することになり、子どもと親の関係は悪化する一方となりがちです。

助けを求めながら泥沼に落ち込んでいく。もがけばもがいただけ、はいずり出すのでなくて逆になります、沈み込んでいく。そのどうしようもないあがきを、親も子も続け、冷く激しい反撥の果てに、子は親から決定的に離反していく。その時、人間関係へのあきらめのようなもの、を固定観念として持つてしまつてゐる。それから後のさまざま他人との関係で、その挫折のパターンを繰り返しがちとなる。そうしたもののなかで、という思いがいつも心の底にあつて、それが決して自分には満足できぬものながら、それこそ、どうしようもないのです。

人間関係がもう一歩深まるための努力のしかたがわからなくて、途中であきらめてしまふ、という悲劇の、なんと世間に多いことでしょうか。

さて、アキラとおばあちゃんとの関係こそ、その見本みたいなのでした。

わたしはアキラはよくなるかと期待したのです。しかし、おばあちゃんも、二階の住人も、わたしの観測の甘さを笑ったのです。イトーさんはアキラにたぶらかされているという。

「今度こそ自分が盗ったのではない」

と、アキラが断言したのを、わたしは、

「これを信用しなかつたらあかん。わたしはアキラを信用する。今後アキラを疑うことはわたしを疑うことやと思うてください」

と大見得をきつたけれど、これがまたまたアキラの大ウソだった、ということになったからには、わたしの立場が無くなってしまったわけです。

二階のおばあちゃんのせせら笑い、つまり、他人の余計な干渉を非難するという気持ちからのわたしへの冷い態度は、当を得たものであったわけです。

さあ、わたしもまた追いつめられてしまいました。他人の家の泥沼のあがきに、経験のない思いつりの青年がออกมาせに一枚加わって、なんのことはない自分も他愛なく巻き込まれて、泥沼に落ちていきよる。

が、ここで気づくことが一つあります。おばあちゃんはおばあちゃんひとりの泥沼であがき、アキラは別の、アキラひとりの泥沼であがき、別々の泥沼に落ち込んであがいているわけです。同じ一つの泥沼に落ち込んでいるのではなくて、別々だというのが、これが悲劇なのではない



か、と思うのです。

どうせ落ちるのなら、わたしはアキラと同じ泥沼に落ちて、いつしよに足で下をさぐって、確かな地盤のひっかかりを見つけないければならん。いや泥沼に落ちた少年を、上から引っぱりあげようとする教育者や親達の努力は、ほんとうは、成功しがたいのだと思う。一緒に沈み込んで、外からは見えない泥の中のもがきそのものの過程に足がかりを見つけないければ、少年ひとりをはいずり出させることは出来にくい。いまやそれをする立場なのです。

ほかの例で言えば、酒飲みの気持ちは酒飲みにならないとわからない。飲んで飲んで心も頭もくらくらになり、自分のどなり声までもが遠い世界の出来ごととなり、この宇宙のなかで、まさに自分ひとり向きあつていふという、あの悲しくて静かな泥酔の居直りの安定は、泥酔そのものを経験しないとわからない。

わたしは、おばあちゃんや二階のおばちゃんに、アキラに対してと同じように疑いの目を向けられるようになった。それはアキラとの共感を得る立場を得たのだ、と言えば、負け惜しみの言いのがれです。でも、負け惜しみの言いのがれでは終らない、そこからの糸口がまた、そこにあるわけです。糸口にするかしないかは当事者の意志の問題です。

### 教条だけではダメである

ところで、アキラの話が長びくので、読者は、ひとつの事例を大層にまあ、と思っておられ

るかも知れない。もっと簡単にまとめるつもりで書きはじめました。アキラに関していま書いているのは、わたしが二十五、六の時のことで、わたしの心のなかには、ひとつのかたまりになって残っています。心にある限りでは、ぎゅんと凝縮して、明瞭にまとまった思いです。親と子と信頼しあうということは、すべての親の願いでしょうが、それがこわれた時の回復の仕方といったものを考えるひとつのヒントとなるようにと思つて書きはじめたのですが、心の思ひとしてちゃんとまとまったものでも、人にわかつてもらおうとすれば、その背景やなり行きを説明しなければならぬ。大変なものです。わたしの心の中ではいくらかうまくまとまった事例であつても、それを構成し、あるいはかかわりあつてゐるものの、状況やお膳立てを、みんな示していかないと、読んでいただく人にわかつてもらうわけにはいかない。

わたしの、アキラの事例についての思ひは、ひとつの「気分」というような形に、いわば昇華してしまつていて、ふつう、人間ひとりの気分というものならば、簡単な形容詞ひとつで表現出来ると思ひがちなのですが、ほんとうは、人間の気分というものは、決して形容詞ひとつで他人に伝えられるものではない。

古今の名作を見ると、ひとつのことを言いたいために、何百頁の小説が成り立っています。ドストエフスキーの小説など、あの長さで、結局読んだあと、ひとつの気分をどさんとこちらに残す。実に簡明なような、わかつた感じが、まとまつて心に残ります。

比較するのもナンセンスながら、社会福祉の事例記録などでは、専門家が書いたものは特に

あまりに客観的な事務記録になってしまつて、読後、「人間の思い」というものがまともに残らない。

また、教育家や心理学者が書いた育児の手引き書などというものは、こうしましょう、ああしましょう、ああしてはいけない、こうしてはいけないと、やたらに教条ばかり並べたてるだけで、それでは少しも生きた体験につなげていけないだけの糸口を、読む者に与えない。

たとえば、「勉強するときは、集中させよう」と書いてある。集中するのが大事なことはわかつているのだが、実際にどうするのかわからない。「なんとか集中してやれるように励ましてやりたいものです」という期待が書かれても、実際にどんな声をかけてやるのが、効果的であるのか、少しもわからない。そして、いくらそれらしく工夫しても少しもどうもならない、ということになりがちです。

集中することがいいことだ、と当の子どもがわかつたとしても、さて、それでどうすれば集中出来るのか。仕方なしに「集中せよ」と壁に書いて張つてみる。毎日毎日それを眺めるけれど、集中しそうにない。「集中せよ」「集中せよ」と心の中で百遍となえてみても、實際出来たのは、勉強に集中することではなくて、「集中せよ」と唱えることに集中したにすぎない、という結果しか出てこない。

教条を覚えるということと、教条に合つた行動がとれるということの間には、本当に大変なへだたりがあります。

逆にひきずり落されて

悪いことには、教条を知っていたら、それでもう十分だと思ひ込んでしまいがちな風がある。自分が出来もしないのに、いや自分が出来るかどうかもまるで吟味もせずに、頭の中で、そうすることがいいことだという知識をもっているだけで、なんとなく安心してしまっている。いざとなると、自分の知識と、自分のやることなすことのへだたりにガク然と気づく、ということが多いものです。

知識として知っていることが役に立たないどころか害になる、ということがあります。教育ママといわれる頭でっかちのお母さんなんか、みんなその害がいっぱいです。子どもの目の色顔の色からものを読みとれずに、育児書や教育書からのみものを知ろうとすると、結局やっていることは、子どもの側へ歩いていくかわりに、子どもを無理やり、いやがる処刑場へひつたてていくということになっている。こわいことです。

こっちは正しい。子どもがまちがっている。さあ、子どもよ、こちらへおいでという導きの態度は、子どもがこちらへの信頼をもっていないとき、ナンセンスとしか言いようがない。

考えてみれば、学校教育だって社会福祉の施策だって、すべてますます安定した側から不安定な側へ、ちよつと手だけ出してみるという、小ぎれいな土つかずのやり方に慣れすぎています。教育とか福祉というのは、人間の心にかかる問題なのだから、小ぎれいな手がいくら差しのべられても、ほんとうのかかわりを希求する側にとっては、そんなものは何の役にも立ち

しない。

なんやノ体だけ向うへ避けて、そんなぶさいくなへっぴり腰で、そんな冷い手なんか出ささんといてくれノ子どもはそう心に叫んでしまうのです。

こいつ、こわごわ手エ出してきやがってノよし、これ引っぱって、引きずりおとしてやろうか。という欲望がわいてきて、いきなり、泥沼の中の子どもが、差し出された手を、思いつきり引っぱり込む。ああッ危いノこれ、そんなにひっぱるな、ひきあげてやろうというのに、こつちが落ち込んでしまうやないか。やめろ、やめろ、やめなさいッ。あ、あ、やめてエノ助けてエ、だれか来てエ。

ドサツとあわれな教育者が泥沼に落ちたら、子どもは泥の中で、口の中まで泥だらけにしてア、ハハハッ、ハッハ、と高笑いするでしょう。

教育者は、なんでわたしはこんな目に会わされんならんですか、と腹をたて、さっさと自分の専用のハシゴでももって来させて、あとも見ずに上ってしまってしまうことが多いのです。まさに、そう、わたし自身がきれいごとの教育者の卵でした。わたしはアキラに手をひっぱられて、泥の中に、アキラのかたわらに、落ち込んでいたのでした。

落ち込んでいった過程が書いてなかったら、これから後のところも書けないのです。まだるっこい書き方ですが、どうかつきあって下さい。

さて、三万円の紛失が結局アキラのしわざとおばあちゃんにきめつけられ、その証拠をつき

つけられて、家を三日間出てしまっていたアキラは、どうやらこれまで続けたことのある新聞配達店の、配達仲間が、朝が早いために、新聞屋の二階で泊り込んでいる、その中にもぐり込んでいたようです。よく皆におごった経験があるので大きな顔が出来たのかも知れません。

中途半端な気持のまま、投げやりな態度で帰って来て、おばあちゃんとろくに口をきかぬアキラに、その二日後、わたしは、冬のはじめの空には半月の夜中、家を訪れて、会いました。

三万円のなり行きは、おばあちゃんから聞いているけれど、アキラからは直接確かめることはしませんでした。

アキラは、肩をならべて歩きながら、わたしがおばあちゃんからすべてを聞いているとは気づいていなかったのか、こういうのです。

「イトーさん、あかんわ、おばあちゃんは……。オレを疑ってばっかりや。オレ、だんだん変っていつてると思うのや、自分でも。信用してくれるのは、イトーさんだけや。おばあちゃんも、二階のおばちゃんも、金が無くなったら、いつでもオレがとったのやと、頭から決めてしもてる。それやったら、いつそとつたるうという気になつてしまふで」

わたしはその時、どんなことを言ったかおぼえていません。ただアキラのウソをそこでとちめる気にならなかつたことは確かです。わたしの心は、ポロポロに破れているようでした。

「よし、それなら家でおばあちゃんの前で、もう一度、誓いなおせや。もうとらないうて。今までのことは今までのことや。問題はこれからのことや。な、はじめから出なおしや。ええか、



な、そうしよう。な」

アキラはうなずいた。きびすを返して家に帰りました。月のあかりが、うつすらとわたしの印象に残っています。

おばあちゃんは半信半疑で、というより、ほとんど信じないで、アキラの誓うのを眺めていた。もうええ、アキラとイトーさんと、まあ二人でやつといて下さい。わたしはもう疲れました。おばあちゃんの目の色はそう語っていたと思います。

そして、それからまだ一週間もたたないある日、おばあちゃんが、わたしの行くのを待ちかねていた。

「またや、イトーさん。わたしの財布から三千円なくなった」

オレもおまえもバカなんや

ところがこのときは、アキラが、わたしの来た気配に飛びだして来て、おばあちゃんの言葉を聞くや、ひたいに静脈をうきたたせ、真赤になつてどなつた。

「違うというとするやないかノ証拠があるのかノオレやという証拠があるのかいやノオレ、イトーさんに約束してんぞオ。オレはもう金はとらんと約束してんぞオ。オパンノオレがとつた証拠があるのかいやノ言うてみイノ証拠があるのやつたら言うてみイノ計算の間違いやろがノ」  
涙でぐしゃぐしゃです。鼻に涙がおりてきて、声もズルズルです。両の目はまぶたから外へ



つき出ているみたいでず。

わたしは心がどでんとひっくり返ったみたいに感動していました。金をとったかどうかはわからない。

それはわからないけれど、アキラとわたしのつながりはここに存在している。

その晩は、ほとんど十五夜ぐらいの月やった、と思います。

はじめは激しく、そして、納得せぬおばあちゃんがもう力を入れて言うてきかそうともせず、批難がましく受けこたえ、決着もつかぬだらだらしい押し問答に、一時間以上つきあつた後、わたしはまたその夜もアキラをさそつて外へ出ました。

外へ出て、工場の裏べいの続く、月の光ばかりのところへやって来ました。この前の晩よりも、月は白々と明るく輝いていた。

「アキラ、今度のことは、オレはよくわからない。ただおまえが、オレを信用してくれているようなのは、よくわかる。しかし、オレはお前を信用しているのやろか。おまえがこんどの三千円こそ、とつたのではないと断言しているのだから、もしオレがすっかり信用しているのなら、そのこともすっかり信用してしまえばいいのや。ところが、心の中に、わだかまりが正直いつてあるんや。オレはおまえを信用したい。しかし、信用しておらん。おれの困りぬいとる様子を、まあ、聞いてくれや」

アキラは、息をつめるように押しだまって、肩をならべて歩きます。

「おまえがもしもウソを言いはつておつて、オレがそれをバカ正直に信じるのであれば、オレはひとにだまされて気のつかないバカモンや。そんなバカモンは、人を助けたり導いたりする資格なんかあらへんやろ。おまえを助ける資格なんかあらへん。」

しかし、そうやかからといってやな、オレはすでにおまえを信用すると、この前おばあちゃんの前で宣言してしもたからな。信用せんわけにいかんのやで。もしも実際、おまえが三千円盗んでいて、オレもそうやとにらんでいるなら、それで、まあ、道理は合うから、オレはバカ正直ではないことになる。しかし、おまえが信用を破り、オレも信用を破り、両方から信用をこわすことになる。すると、これほどあわれなダメな関係もないよなあ。

どっちにころんでもバカや。

おまえが三千円とつていないのが事実で、オレもおまえを信用出来る、というのなら、それがいちばんまともや。しかし、オレは確かに信用してないのが事実や。

信用する、といいながら、信用してない。どっちにころんでもオレもう、だれにもえらそうなこと言えんで。おまえの助けには、もうなれんのやろか、オレは……」

横に並んで歩くアキラが思いがけず昂然と顔をあげています。わたしはつづけけます。

「ところが、オレはどうかして、おまえのしつかりするところまで、見とどきたいのや。その気持がやっぱり変らんであつてやなあ。それもオレがバカ者のしるしということかも知れんので、な。」

つまり、おまえもオレも、バカなんやなあ」

このままではすまない。なにか突破口がなければならぬ。わたしはつづけて言った。

「実は、オレ、教師の卵やから、ここでおまえをなぐるうと思うてる。ところが考えてみたらなぐる資格がないような気がしてたまらん」

アキラは、歩が前へ進まなくなつた。

くちびるを噛んで、意を決したように言った。

「イトーさん。ぼくあかんのやで。いままでに、なんべんイトーさんをごまかしてきたか。なぐつてか」

この時、三千円のこととは、それではほんとのところ、どうなのや、と聞きたい気持ちをわたしはおさえました。なぐつてくれ。それがアキラの要求です。問題はそれに応えるか応えないかであつて、真相の追求を今する筋道ではない。親子のいさかいで、こういう時、親の方がともすれば、問題を今流れている本筋からはずしてしまふ。それをすると、両者の関係はゆるんでしまいます。

「よし、オレはおまえをなぐる。しかし、条件つきでなぐる。条件というのはなア、おまえもオレをなぐる資格がある、ということや」

アキラが、わたしの顔を見ました。

「信用すると約束したのに、オレはおまえを信用しとらん。今度の三千円のこと、事実がどう

であろうと、信用していないオレを、おまえはなぐる資格がある。オレはおまえをなぐる。おまえはオレをなぐれ」

アキラは、信じがたいという風に眉をゆがめ、冗談がはじまったのかと思つて、ガタンと氣楽になつて

「まさか、そんな」

と言つてから、こちらのまじめなのに氣づいて口ごもり、それから言葉をついだ。

「そんなこと、あかんわ。ぼくがイトーさんをなぐるて、そら出来んわ」

「オレに信用しなおしてくれと言ふのやつたら、オレをなぐらなしかたない」

アキラは、どきんどきんと、胸を波立たせはじめました。

「なんぼなんでもそんなこと出来へんわ。反対や」

「反対やない。そんならおれはバカ者のままでおらなしゃあないのや。オレとおまえの信頼はこわれてもとに戻らんでおしまいや」

「ごめん、すんません。カンニンして。オレはなぐられるのは当然や。なぐつて下さい。オレがイトーさんをなぐるなんて、そら、無茶や」

アキラは、一度冗談かとゆるんだ感情が、わたしの本気で中断されて、それから、みじめつたらしくしおれてしまった。

わたしは、向かいあつて立つて、じつと待った。次第にアキラの氣持がまとまってきたので

す。

### 共犯を確認すること

向かいあつて、ずいぶんと永いお互いの気持の確認が続いたという印象が残っていますが、実際は、それほど長くなかつたのでしよう。

「十回や。一回づつ交互になぐるんやで」

低くつぶやくようにわたしは言い、アキラは息をのみ込みました。

一回目、わたしは、掌が焼けるように痛かつた。アキラは頬をはられて左へよろけました。「おまえや」

わたしは目がねをはずしました。アキラは姿勢をもどして、口をなかば空けて空を向いたその動きのつながりで右手を振り、わつとその時泣きだして、瞬間わたしはちよつと目が見えなくなりました。わたしの頬は焼けるようなピシツとした感覚でいつぱいになり、ゆがみをとりもどしていくわたしの視覚の中で、アキラは声をあげて泣いていました。

こんどはわたしが左の手を振りました。アキラの右の頬で、にぶい音をたてました。

こんちくしょう、とわたしは言つたと思います。アキラも、くそ、といつてわたしのツラをほたいたと思いません。

ヨタヨタとよたつては姿勢をもどし、互いの頬で、交代にバシバシと掌が鳴つた。頭がガン

ガン鳴った。

そのあと、わたしのアゴの下に頭をなげ込んで、アキラは、あたりにはばかることなく声を立てて泣きました。

「オレももう一度出なおしや。おまえもしっかりやれや、な」

わたしも泣いています。

「うん。やる、やる。やりなおす。やりなおす」

アキラは何度も何度も繰り返した。

……もちろん、それからの日々の、アキラとおばあちゃんとのトラブルは、いろいろと相も変わらず、続きました。

わたしは、それから数カ月の後から、いろんなきっかけで、中学生数人を、家にひきとつて面倒をみることになってしまいました。アキラはよく心配して、様子を見に、片道二時間以上かかるところを、やって来てくれました。

家にいる年下の者に、なにか言い聞かせてやってくれているようなこともありました。それはあんまり役立たなかつたけれど、アキラが、

「おい、みんな、イトーさんを困らせるなよ、な」

といっているのを聞くと、わたしは心の余裕が持ちなおせたものです。

アキラのその後を書いていたらとどまるところがない。それから、一、二年の紆余曲折は、

どうなることかと、度々わたしの胸をつまらせるものがありました。別居する父親とのかかわり、母親の動向、おばあちゃんとのトラブル。高校進学、そして中退。就職、離職、再就職。父親とおばあちゃんとアキラの考えのズレが事あるたびに大変なめごとになってしまふ。よくわたしのところに相談にやって来、こちらが忙しくてろくろく話の出来ないような場合でも、来てみたら、なんとなく、やる方向が見つかった気がするねんなどいって、帰っていききました。十八の時、おばあちゃんが必死に反対するのをきかずに、父親の息のかかった喫茶店のパーテーション見習いに入ってしまった。そして、おばあちゃんの心配はあたらず熱心な仕事ぶりです。一、二度見に行ったわたしも感心してしまいました。何年か後に、四国の喫茶店の主任になったといつて、四国から電話をしてみました。結婚した時も知らせてきた。

それから数年間、連絡はありませんでした。そして、もう十年前になるのか、神戸へ同業者仲間と旅行で来ているといつて、ちらつとすれ違い程度に会ってから、また連絡はとぎれました。元気にやっているのでしょうか。もう二児の父親で、喫茶店のチェーン会社の信望のある中堅社員です。

二年前の夏のある日、夜の一時頃、玄関のブザーが鳴るので、びっくりして出てみたら、二十八年のすっきりいいおとなになった彼が、ニコニコと笑いながら月の光に照らされて、立っているのです。

「いま、オレ、大阪の方に戻ってるんです。オヤジの関係する会社の方へ来いと、やいや

い言うので、こっちでやってるんです。今夜、仕事を終えてから店のものと、ちよつと気ばらしのドライブに出たら、月がきれいでねえ。十三年前を思い出してこんな夜中に、とうとう神戸まで来てしもた。車の中に若いものを待たしてあるので、すぐ帰ります。ハ、ハ、ハ。イトーさんに会いに来てしもた」

わたしは、その夜、十三年ぶりに次のことばを聞くまで、あの晩なぐりあつたことが、アキラにとつてどんな意味をもつたかを、聞く機会を持ちませんでした。客観的に口に出るようになるまで十三年かかったということでしょうか。

「あの夜は、今夜と同じ月やった。オレ、あの夜がなかったら、どうなっていたかわからへん。ほんまに自分の悪いクセから抜けられなかつたんです。あの晩から今日まで、なんでもやりなおす決意さえ出来たらやりなおせるのや、と自信を持ちつづけられた。今夜、それを言いに来たんです。ねえさん（わたしの妻）によるしく。おやすみなさい」

走つて車に乗つて、あつという間に、彼の運転する車は角を曲がつて消えて行つた。

確かに十三年前、あの工場の裏べいの続く人の気配のない道を照らしていたと同じ月の光がその夜も、彼の車の消えたあとの道を照らしていました。

あの時、アキラにとつて必要な関係が、わたしとの間に成立しなりました。ふつう、親と子の間に、衝撃的な結びつきの瞬間が、幾度かあるものです。そういうものによつて、子どもは、揺り返し揺り返し、自らの針路を修正していきます。



切り目も折り目もなくずるずるとゆがんでおち込んでいく親子関係に、この頃、わたしの小さな相談室で次々と接しながら、わたしはときどきアキラのことを思いだします。

さて、アキラのことについては、一応は必要な効果をしめし得た話でしたが、これがヒロシのことになると、わたしは思い出すさえ自分がみじめになります。でも自分の平衡感覚によって、これを書かぬと先きへ進めません。次章からはヒロシという少年のことです。

それにしても、アキラの口から、あんな確かな言葉を、十三年も後になって聞こうとは思いませんでした。子どもに対して行ったことの意味はなにかという解答は、ずいぶん年月をへだてて出て来ます。ついに解答の出ないことも多い。一々解答を求めては出来ない。根気仕事です。

## 第四章 家出して来た中学生

### 四歳児の拒否の目つき

親子関係でもナニ関係でも、ほんとうに大事なものは、お互いの心を大事にすることです。その仕方の根本として、役割や立場による対立でなく、ましてや勝ち負けでなく、まさに共感から出発しなくてはならない。対等の立場を作る。そこが土台だ、ということ、わたしは前章までで言ってきたつもりです。

大人と子どもが共感を持つということは、しかし、大変なことです。なかなか出来ることではありません。

わたしはいま、にがにがしい記憶を思い出します。具体的になんの事が問題だったか忘れましたが、わたしがまだやっと二十歳過ぎの頃、当時同居していた姉の長男、つまりわたしの甥が、まだ四つか五つだったと思いますが、わたしの制止を聞かず家の外へ駆け出していきました。ふだんはまあ、いちばん家族の中ではわたしが親近で、可愛がって甥の心の動きをつかん

でいると、自負していたものだから、この甥の、わたしからの逸脱に、胸のおどるような腹立ちを覚えました。

タダシノと激しく甥の名を呼んでもタダシは立ちどまらない。わたしは大股で駆け出して、グイとえり首をつかんで、

「タダシノ呼んだら止まらんか。言うこと聞けんのか。なんでや。なんでや」  
と、ゆすぶりました。

彼の目はよそへ向いて、光りをはなっていました。

「もっとすなおにせんかい」

と、思わずパンとなぐったら、けわしい大人のような目、他人の目で斜めにだまっていたしをにらみつけて、わたしの期待に反して、泣かなかったのです。

なぜかはわからなかったけれども、その時、四つの甥と、二十歳過ぎのわたしの間に交流するものは完全に断ち切れていたのです。なぜそんな切れ方が、彼とわたしの関係で起り得るのか、それが不思議で、不思議で、いらだたいはかなさだけが、記憶としていつもいつもよみがえります。

それから長い間、いわば、人間関係のはかなさの原点とでもいいようなものとして、この場面は、わたしの心にこだわって残ったのです。多くの親が、これに似た記憶を持っているのではないのでしょうか。

わたしの場合、この甥との関係において、その後もしょっちゅう、そんないらだちがありました。

よく世間の親が、そういうときに、

「この子はだれに似た？ほんとに強情な子やなあ」

と、いうような言い方をするけれど、それは不注意な言葉でありすぎます。そういう言い方はしなかったけれど、とにかく、この四つ五つのタダシの、ここぞと思うところで無言の抵抗あるいは無視に出合うことで、いらだちがいっぱいでした。

でも、いま考えると、なんだか簡単なことがわからなかったんだなあ、と思えるのです。わたしはタダシを幼いものだから意のままになる、あるいは意のままにしているのだ、と書いていたのです。幼い心を軽視していたのです。

それが大変な間違いであるのに気づいたのは、ずっとずっとあとのこと。タダシが実に中学校も過ぎてからのことではなかったでしょうか。

この甥はだから、わたしの誤ちの犠牲者です。いわばわたしに抵抗することによってわたしを育ててくれたのかも知れません。彼はいまもよく言っています。

「ぼくはトモにいちちゃん（わたしのこと）に、ほんとによくみてもらったけれど、手も足も出せない時も多かった」

わたしはもともと内気です。ほとんど人前で気持をおおっぴらに発散させられない方でした。

それで、知らず知らず家族の中でいちばん幼いこの甥を自分の抑圧のハケ口にしてしまつていたのかも知れません。

タダシが少し大きくなつて、小学生から中学生のころ、わたしはよく姉に頼まれて、彼の勉強をみてやりました。みていると、彼の集中力のなさにいらいらして腹が立つてくるのです。

そばで聞いていられない、と姉も父母達も言つていましたが、まさに侮蔑的に、

「ようも、こんなもんが解けんのやなあ。いったい学校でなにしてきたんや。おまえの不注意には、ほとほとあきれてもう到底つき合えんわ。したいようにせえよ!」

といつたかと思うと、すぐその口の下から、ジリジリ体をつめ寄らせて、

「エエ? いつたいどっち向いてるねんや。やる気があるんか。ないんか? そのエをどこへ持つていく。メはどうするんや? イコールはどこについてるのや? よう見イ。見んか」

すると、タダシは口の中で、

「したいようにせえ、いうたからな」

「なに? なにを言うた。口の中で言わんと、ちゃんと口に出して言え! もういっぺん言うてみ  
イ」

イタブル、ということばを体で示すような様子だつたと思います。タダシも作用に対する反作用でことごとくに反撥していました。タダシが肝心のところでいらいらして、落ち着きを失つた少年であつたのは、大いにわたしが影響していたと思います。

いまだから、こんな殊勝な反省を、ぬけぬけと言えるのです。もしあのタダシがまだ四つの時に、だれかがわたしに、

「タダシが押し黙るのは、おまえの態度の反映や。おまえの態度が悪いのや」

とでも言われたら、当時のまだ二十歳過ぎのわたしは、身をふるわせるように反撥して、「バカなノタダシ自身の問題やないか。オレがどれだけこいつのことを一生懸命考えてやっているか、ひとにはわからないのや。タダシには通じてるはずや。そやのにこいつノこいつの気持ちのこじれているのは、姉のせいなんや。こいつの親の毎日の接し方のせいなんやノ」

とでも、腹から吐き出すように言っただけ、自分の非は認めなかったでしょう。タダシ自身を目の前におきながら…。

#### 無関心になりあう事も大事

タダシと、まあなんとか人間的に対等な、客観的な関係になりはじめたのは、たかだかここ数年前くらいのころからで、つまり、彼が東京の方の大学へ入って、距離的にもはなれてしまっただけのことだと思えます。

それも甥と叔父の関係だから淡々としておられるわけで、これが親子だったら、まだまだ親の義務と権利だといって、離れた彼にやいやい言って寄りかかっているのかも知れません。

ところが、正直に言って、わたし自身のひとりムスメ（いま彼女は小学校五年生です）には、

彼女が生まれてこの方、タダシにしてきたようにやいやいと云ったおぼえがありません。

こちらが成長したのだと思います。苦い苦い体験を、仕事の上で、いろんな子どもとの関係で味わってきた結果、最初から間違わずにすんだためだと思います。

ムスメの方も幼いころのタダシのような、得体の知れない拒否の目つきを、わたしに対してしたことがあります。ムスメの性格がよいとかどうとかの問題ではなくて、わたしがそうさせずにすんだからのことだと思います。

いつもいつも親が、親として子にからみあっているのは、時に大変な精神的暴力だと、いまは思うようになっていきます。大人の子どもに対する越権行為をいましめる気持が、いまのわたしにはあります。意欲の方向が違っていてお互いがかみあわない瞬間は、互いに無関心になった方がよいということ覚え、ムスメに対してはしょっちゅう、そういう態度で、無関心になりあうことが出来、従って、拒否の頑強さが、ムスメの態度に出ずすむのだと思っています。：とは言っても、いまのわたしは、自分で気づかない違った種類の精神的暴圧をムスメに対して与えているのかも……。それは知れません。

もしも、全知全能の神さんが雲の上からわたしを眺めていたら、いつでもいつでも自分のその時々のお考えがユニークで正しいと信じ込んで、年がゆけば、新しい反省が起こる。その反省出来る自分がやっぱり人よりユニークで正しいと信じ込んでいるわたしの他愛なさに、思わず苦笑し、「どうしようもない」とでもつぶやきながら、鼻くそでもほじくっていなさるに違い

ない。

人間のすることはすべて、相对比较でその価値が値ぶみされるのです。絶対的に正しいというようなものは、なに一つありません。

ところが、いまのいま、瞬間的に自分の行動について決断しようとするその刹那の判断においては、さしあたって、いまこうすべきだという頭の中の命令が至上的な絶対価値にならざるを得ないのです。あれもある。これもある。あれはどういう点で正しい。反対にこれはこういう点で正しい。とっていったのでは、行動できません。

ここがむずかしく賢こぶって言えば、人間存在の絶対矛盾とでもいうべきところなのでしよう。すべてを客観的に見よ、といったところで客観とはつまり他人事として見ることなのであり、そればかりでは主体的行為が出来ません。

反対に主観というものを大事にせよといわれても、主観とは、言いかえれば自分勝手ということです。わたしの言っていること、ここに書くことも、まあ、雲の上の神さんから見れば、いい加減もいいところ、なのでしょう。それでいい。いや、それで仕方がないではありませんか。そう思って書いています。だからそう思って読んで下さい。

とにかく少なくとも、わたしは、自分が二十歳の時よりも、いまの方が、少しはわかったことが多くなっていると思っています。そのかわりに、無くしたものも多い。でも差し引きすれば、生きている長さだけ、成熟の方向へすこしは進んだと、自負しています。その自負がなけ



れば生きていくことにくたびれてどうしようもなくなってしまうでしょう。

さて、それにしても、わたしにとっては、多くの子ども達が教師でした。いろいろなものを教えてくれました。ムスメとの関係がタダシとの関係よりも少しゆるやかであるのを見てもらえれば明らかです。

たとえば、いまから書いていくヒロシにしても、わたしにとっては大変な師です。出来ればヒロシのことは書きたくない。アキラの話のように気持のよい筋道に進みません。

ヒロシは、小学校では長欠児童だったので。中学に入っても、それは続きました。

### 不本意な暮しが背景に

家に訪ねてくる先生のすすめや誘いで、しぶしぶ登校しはじめても、なにかつまづきがあると、またまた学校に來なくなってしまう、という風だったのです。もう成人したヒロシの兄も義務教育時代は同じようなものだった、ということでした。

学校での風評を聞いて、わたしは学校側の許可を得て、アキラを訪問しはじめたその前後から、ヒロシの家にも立ち寄りはじめました。

学校を休んでいるヒロシの家、つまり路地裏の窓の小さな小屋のような家へ、わたしは何度かたずねていき、戸をあけても、昼間でも中が暗くて見通せず、奥でうごいている感じを待ち、やがてのっそり出て来たヒロシと、溝に足をかけての立ち話をよくしたものです。



Tom. 8

上目づかいにわたしの気配を鋭くうかがいながら、わたしの言葉を待っているのです。

「どうや、また休んでるのか」

などと、わたしがぼつんと、あまり答えを期待しない自問自答のつぶやきみたいになると、彼は目のかすかな動き程度で、言葉なんかなしにうなづいて、それ以上の反応がない。わたしといっしょにじっと、そこでつつ立っていて、それからどうしようという心の動きを見せないのでした。

母親は家を出てしまっているのです。さっさと再婚してしまっています。夫に愛想をつかしたのだそうです。こういうのは、ずっとあとでヒロシ自身がわたしに語ってくれました。

父親は、後暗い生き方をしつづけた人間らしくて、ヒロシは少しも父親を尊敬していませんでした。いつも不在でした。

兄も父親にならったような生き方らしく、前述のように義務教育中はほとんど学校へは出な  
いまま年を過ごし、どうも正業についていないで、不安定な衝動的な毎日を送っていて、家にはほとんどいないのでした。ヒロシと、ヒロシの妹の小学生二人とが、いつも三人で家にいるらしいのでした。

ヒロシは中学二年としては、すらりとうわ背があり、賢こそうな、はっきりした顔だちで、そういう目つきをしたときには、すご味があるのでしょ。学校の皆には一目置かれた存在でした。もしうまく育っていたならば、ほうっておいてもリーダー格にすぐの上る能力を、外

面的に、素質としてもっているように感じさせる、そういう少年でした。それが気のむらが激しく、家がそんな風なので、劣等感が決定的に強く、不就学が続いてしまふのでした。

彼にとって一番不本意なのは、だれにも腕力では負けないはずという自負のある自分が、なからなにもまで学校のみんなに立ち遅れていて、気持は腐り切つて家にすつ込んでゐる。すると、妹たちの食事の用意もしてやらねばならぬことになりませう。

当時はまだカンテキに火を起こして飯をたくという形がみられました。土間でそんなことをしている自分を、ひとに見られることが、ヒロシにとっては、もつとも不面目なのでした。

ある日、中学校へ行つてみると、きのうからヒロシが学校へ来ている、といつて先生達が喜んでゐるのでした。

「どうせしばらくの間ですよ。ヒロシは、長続きしない」

と、K先生が言った通りに、四日目に、なにか友達の誰かと言ひあつて先生にとがめられてかつと腹を立て、途中で家に帰つてしまひ、それからまた休み続け、という調子なのでした。

そんなあとで、わたしがたずねていくと、あきらかにわたしの行くのを待っています。強がりだけで、決して内省的なことを言わない少年でしたが、二人きりで会つと、ころもとなひ不安な気持が言葉に出なくとも、体全体にあふれてゐるのでした。

聞きたそうな様子を示したときは、わたしはどんなにやかや話してやりました。家の前で立つて話すだけでなく、路地から路地を歩いて、ときには裏角の小さなうどんなやに入った

して、学校のどの先生とどんな話をしたかというようなこと、どんな友達が学校で会ったらどういっていたかというようなことを話してやりました。

学校と家にいるヒロシのパイプ役になっていました。

「やっぱり学校へは行け」

と言うと、

「やっぱり学校へは行く。来週の月曜から行くことにする」

と言ったけれど、月曜日はやっぱり行っていなかった、というような事で日が過ぎました。

でも、運動会の八百米は自信がある、というので、運動会前からふたたび登校させることに成功しました。先生方もヒロシのやれることをやらせて認めてやろうと努めて、ヒロシの気持ちを立ててくれ、わたしが家へ訪問しては、先生間の風評がよくなったと報告してやるので、運動会が終ってから後も、学校へ行き続けるようになりました。

ところが、学校へ出るようになったらなつたでまずいことが起りました。

**学校へ行くようになったが**

先きに書いたように、ヒロシは学校の皆から一目置かれています。学校へ出ると、何人かのくせのある連中が、すぐヒロシの周囲に集まって来ます。学校生活に不平不満のある連中です。ヒロシは腕力も頭も、みてくれもすぐれているのだが、気むらな持続力のない子どもで、み

んなど一緒にいつもごたごたと事を起こします。なにかにつけて規則違反、けんか、グループ一緒に早引け、つまり三時間目位から抜け出てしまふ、とか、先生方も気の安まる日がなくなつてしまつたのです。

ヒロシの性格を見てみると、つくづく家庭環境が問題だと考えてしまいます。毎日の生活の中で習慣として培つておくべきものが、あまりにも欠けています。特に、人間関係の持つて行き方が全く家の中でトレーニング出来ていないのがちよつと致命的です。

もしも、先生が他の生徒にするのと全く同じに、とがめる調子で、声を荒げて、

「おい、ヒロシ。なんでおまえは三時間目から帰つたのや?」

と、尋ねるとすると、やにわに彼は、

「なんや!!文句あんのかいや。それがどうしたねん?」

と、返してしまいます。相手が気安い先生で、気楽に対応出来るとなると、なおさら余計に地が出てしまいます。そう言えば、わたしは、ヒロシを家に訪問する時、そういう雑な問いかけはしませんでした。すぐく相手の態度に敏感で、こちらが少しでも、事務的な、というか、機械的な、というか相手の人格を無視したような、仕様のない相手には仕様のない応対でいいという手を抜いた対し方をすると、ひそんでいる劣等感、つまり、いつもバカにされたりいやがられたりするのに向かっ腹を立てる気持が、むらむらと表に出て、つい反射的にすごんだ態度になり、自分のそんな態度に刺戟されるようにして、がたがたとまるでやくざ気分になり切

ってしまふのでした。

ヒロシは、いつでも刃渡り三寸の短刀を胸にかくしもっている、とほかの連中が教えてくれました。やる気のないときはまるで動きのない沈んだ様子ですが、相手のなにかに引つかかって、かかっているときとよめた時のさつと豹変するその気配の変化は見事で、かっと激するのに時間がいらぬ。動物の敏捷さで破壊的な行動を展開してしまします。

彼のまわりに寄ってくる連中のひとりびとりは、一対一で対してみると、ごく気の弱い、不和雷同的な、物事を頭で考えず体で受けとめるというような、感覚的にそれぞれどこか鋭いところのある、勤勉な人達から見たら、どうしようもなくなまくらな連中でした。

卒直に言ってみれば、規格品を十把ひとからげにまとめあげていくとき、ちよつと毛色のかわったのがあって、ひょいと、これは規格はずれと言つて横にはずされる。そんな風な状況になつていたのでしよう。彼らは、よく話し合つてみると、動物的な鋭い嗅覚のようなものを持つていて、微妙なところを、「臭い」と、感知してしまふところがあります。聞いているうちに彼らがやる気をなくしているのは、規格はずれだといつて列からはずされたことに腹を立てたのでなく、むしろ、規格品として十把ひとからげにまとめあげる教育の一律性を、うさん臭いと、気にさわつていたのでした。

わたしは、彼らの持続力のなさや、人と対応するときにすぐに構えて敵意を持つてしまふことや、ものぐさで日常的なものの事の始末の出来ないところを、残念だとは思いましたが、しか

し、自発性のないその他大勢組でしごく従順に十把ひとからげにされて黙々と過ごしている多くの中学生にくらべると、みずみずしい直感力が失なわれていないのに感激するのです。

家庭教育が、毎日の営みの習慣性だけを子どもにも与えて、子どもは、ただ従順に、世間の約束事に従っていく。家庭や世間の約束事の多くは、つい本質的な吟味がなされずに習慣的になっているけれど、ちょっと考えてみれば、かえって生活に意味のないあるいは支障を起こすものになっていることに気づく、というようなものであり得ます。それに気づこうとしない子どもよりも、それに気づいて、おかしいな、やり方を変えるべきだ、と発言もし、行動も起せる子どもの方が、前向きだと言えるでしょう。家庭教育がそういう前向きの意欲を持つ子どもを作るよりは、良くも悪くもその他大勢組で黙々と世間についていく子どもを作っている。無難だからだといえ、確かにひとりだけが難に落ちることがないだろうけれども、社会全体のひずみが温存されて、皆の頭へどさつと難が落ちてくるものです。いつか、この前の戦争のような事態になって、命からがら逃げまどいながら、

「罪もとがない市民が、女子どもが、なんでこんな目にあわんなんのやろ。わたしら、なんにもしてえへんのに」

と、天にむかってなげかざるを得ないようなことになる。なんにもしてえへん、ということが悪いことだと気づくには、それだけの、問題の所在に気づく感覚を平生から養っておかねばならないが、家庭教育はふつう、そういう感覚をつみ取ることばかりに一生懸命なようです。



ヒロシらの連中を見てみると、家庭の家族関係が、どこかしらみんなこわれていて、そういういわゆる家庭教育がない。それだけに、従順におかしくともおかしくなくとも世間の約束事に従う習慣性が身につかず、おかしいものはおかしい、変なものは変なもの、と、ちゃんと感じてしまう。だからどうするのか、となると、彼らは、すねる。ひがむ。ものを言わなくなつて弱い相手からんでいく。不平不満を、その場限りの感情の暴発で発散させる。悪いことに常に他人の挙動に批難のタネを見つけて攻撃することだけに熱中して、自分達の気持を高め広げていこうとする方向づけをあまりにも持たない。持続力も集中力もなく、考えは流れて消えてしまつて、動物的な嗅覚でとらえられる快不快の感情に身をゆだねての毎日なのです。

わたしは、学校から許されて家庭訪問を続けて、彼らと個別に接して来たのですが、時々学校に伺うと、わたしの立場が奇妙なものになつていくのに気づかされるのでした。

### つながりが深まってくる

わたしが家庭訪問で、ひとりびとりの気持を受けとめるということをしてしていると、急速に、そういう皆の気持の代弁者だというように、彼らがわたしに期待するようになってしまいました。誰にも話さないことを、オレはイトーさんと話した。あの人、ちょっと変っているけど、オレのことを軽蔑しない大人なんて珍しいでエ、という受けとめ方で、学校でも、彼らがなにか規則違反なことをやったりして目立ちながら、おい、今日、イトーさん、学校に来てるでエ

などと、担任の先生の注意を空で聞きながら、わたしへの過剰期待を見せるので、先生方に結構わたしは疑問視される存在になっていったようです。

どうもあの青臭いイトーというのが、ええかつこしすぎる、というようなところでしょいか。あの大学生に自由な行動を許可すると、子どもらがどんどん図々しくはずれだしたようだ。という職員室でのうわさ話を、学年主任のO先生からそれとなく聞いたりしました。

O先生は地味な中年の社会科学の担任で、わたしの個別訪問の経過などを、よく聞いてくれました。そして、

「きみのやっているようなことは、なかなか学校の教師として、やるゆとりもないし、第一、やっていいのかどうか、議論のわかれるところです。先生方の間で、疑問や批難や、時には、学校の外で、そんな人気取りをやってくれる者がいると、全体の秩序にさしつかえるという、強硬反対などもあってねえ……」

などと、ひそかに話してくれました。

わたしの家庭訪問を許可したことが、どうも非行対策にならず、むしろ逆の効果になっているのではないかというところが、どうも非行対策にならず、むしろ逆の効果になっているのではないかというところが、どうも非行対策にならず、むしろ逆の効果になっている。

そう思われるのも無理はない、とわたし自身も思っていました。

臭いものにはふた、というのが、世間のふつうのやり方で、わたしは、臭いもののふたを開けまわったのですから。

わたしは学校教師の立場ではないので、学校というワクからはずれたところで、彼らと接してきました。彼らは学校と家庭とこの世の中全体への不満を思うさまわたしの前で吐き出します。これを頭から否定してしまつたら、彼らとわたしの関係は持続するはずがありません。

わたしはカウンセリングの本質として、まず彼らを受容するところから関係を深めて広げていくべきです。いや、ここで別にカウンセリングなどというカタカナ語を持ち出すまでもありません。共感のない相手に、だれが自分の本音を明らかにするでしょう。

まあしかし、彼らひとりびとりとわたしとが本当に関係を深め、彼らが十分に内省的になり自立した性格になっていくのはいい。ただ、そうは簡単にことが進まないのが当然で、そのあたりのことでわたしは大きな誤算をしていた。彼らは、わたしとの一対一の関係が、少しあつただけで、一種の免罪符を手に入れたかのように錯覚したのでした。イトーさんが、そう言うつた。イトーさんも、そう言うつた。と、先生に言う言い訳や反撥に、わたしがあまりに頻繁に出てくる。これは、先生方にとって困りものだと思われたのも無理がない。

それに、先生方のなかで、子ども達の置かれている位置を、社会全般を深く見通す広い目で正確にとらえよう、理解しようとする人達が少なかった。わたしが目ざわりになるのは当然なのでした。

無口で決して自分のことを一対一という場では語らなかつたヒロシが、訪問を重ねるごとに路地から路地へ歩きながら、自分の不本意な育ちや生活のありさまを、ぼつんぼつんと話すよ

うになり、彼の感情理解にこちらが努めると、やがてはつきりとわたしが行くのを待つようになり、不安と不満を吐き出したあとで、

「学校でもう一度、やりなおしてみる」

という約束などもわたしにしてくれるようになり、不就学の状態はとにかく脱したけれども、彼のいるところで、いつもなにか事が起る。

よその学校の連中とのけんかとなると、ヒロシ達は生き生きして、集まって計画する。ボーリング、自転車のチェーン、ナイフ、鉄の棒などを持って来てかっこよく身振りをして、面白いっている。内輪でひそひそ緊迫した雰囲気やっている。日を置いてふたたびいくと、目の上がはれ上ったり、ほほに青あざがあったり、すねを傷つけたりして武勇談をきかせてくれる。彼らはそういうところに氣ばらしを見つけているのですが、どことなく淋しげで、わたしが帰るといとうと、夕やけの町を妙に淋しげに送って来てくれたりしたものでした。

三学期が過ぎて、ヒロシが二年から三年に進む春休みになりました。

わたしは自分の期末試験などでしばらく彼らの地域へ行かないまま、どうにもヒロシ達のことを考えると落ち着けませんでした。それに、自分の忙しい学業の合い間を見つけては、ヒロシ達のグループより、一年上のKという三年生の子どものことがかかり切りになっていました。（このK少年については、さきに「親とはなにか」〈中公新書〉で触れています）。気になりながら、しばらくヒロシとは会っていませんでしたが、O先生らから、この春休みには、ヒロ

シ達はなにかやらかすに違いないという職員室での風評も聞かされてきました。

三月末のある日の夜更け、気になっていたヒロシと、その仲間のタケユキが、わたしの家にひよっこりたずねてきたのです。

彼らの住居区から、神戸の西寄りの部分にあるわたしの家までは、片道二時間以上はなれていきます。もつとも、その年の正月、わたしは彼ら数人を、わたしの家へ連れてきてやったことがあります。その道順を二人で確かめ確かめやって来た、もうここまできれば安心、というように二人で顔を見合わせ、わたしにもニヤニヤと笑っている様子に、これはなにかあるぞ、と思いました。玄関から来ず裏口から入って来てつかかけを脱いで上ってほっとしている二人の様子は、普通ではないのです。

「よう来たなあ、まあとにかく、座れ、そこへ座れ。めしは食うてきたのか」

「まあ、聞いてえや、イトーさん」

彼らは息せき切って話しはじめました。

警察につかまりそうになつたからここまで逃げてきた、というのでした。

### 一年ここへ置いてほしい

彼らに、春休み前からのごたごたについて、まず話させました。

学校への反感が暴発を起こし、校長室へ呼ばれて説諭されている内に、彼らの態度が悪いと

補導の先生達がどなりはじめ、ヒロシは、それに我慢が出来なくなって、

「知るかい。もうええ！こんな学校には来んわい！」

とどなって、とめようとする先生をふり切って、校長室の戸に体当たりし、戸を押し倒して、家へ帰ってしまった、というようなことがあったのだそうです。

それからは、春休みまでは結局休みっぱなしで、春休みに入っても、彼らはなにをするのもおもしろくなくて三々五々、街角でたむろしていたのだという。

「金には困らなかつたんや」

と、ヒロシとタケユキはヘラヘラいやらしい笑い方をして顔を見合わせている。

聞けば、映画館の座席の後部や、裏通りでよその学校の生徒をおもに、カツあげをやり続けたのだそうです。何十人となく中学生、小学生、時には、自分達より年上の高校生からも金をふんだくったようです。

彼らは、K警察の少年係に目をつけられていました。わたしは、少年係のAさんと再三、彼らのことを話し合っていました。地区の防犯会議に、Aさんに呼ばれて参加したことなどもありました。そのAさんが、彼らにはが手だった。

さて、なにをするのでもなく日を過ごして、とうとう、わたしの家に来たその日の午後は、ヒロシとタケユキは、二人して、酒屋の酒をいっぱい買って酒でも飲もうや、ということになった。酒屋にトラックが荷を届けて来てとまっている、その後部から、店主のすきを見て、一本

づつ酒をとって逃げようとする、トラックのかげで気づかなかった思いの外の近くに店主がいて、一升ビンをとって逃げだすところを見つけられた。ビンを放りだして、逃げだす。横の路地をくねくねとまがって折れてから、そこにあった自転車二台に乗って逃げていく。夢中でペダルを踏みながら、顔なじみのK署のAさんの顔が思いうかんだという。もうこんどはただではおいてくれんぞ、やばい。もう大阪をズラかろうや、ということになったと言うのです。もうひとかどの犯罪者気どりです。

電車に乗ったときは、もうどちらからいともなく、神戸へ行く、わたしのところへ行くと決めていたというのです。

電車を乗り継ぎ乗り継ぎ、わたしの家へたどりつくまでに、二人は、中学三年の一年間、イトーさんのところに置いてもらって神戸の学校へ行こう、と決心したというのです。

彼らの周囲の状況や都合を考えずに、大変なことをいとも簡単に決めてしまう。それも勝手にひとり決めてしまう。

彼らの行動はすべて衝動的なものです。それを少しいさめたり禁止したりすると、少々なら我慢して、やる気をなくしただけのように見えて、それがもう少し強くなると、やにわに衝動的な行動を起こしてせっかくなか配慮した周囲の努力なんかいっぺんにつぶしてしまいます。

わたしは、彼ら二人の気持を掴めるかどうかの瀬戸際にきているのだと思いました。

ヒロシの家庭の背景を考えると、少しまともにやろうという気持の出て来た彼の意志が、家

によって崩されてしまう。家を出たいというのは、もっともな気持ちだと思えます。

いっしょにやって来たタケユキという少年も、実をいえば、大変複雑な生い立ちでした。

見えっばりで、かっこよくまくしたてる点でヒロシとは違って変に大人じみた社交性があるのですが、ちょっと話を聞いていると、底が見え見えです。計算があるようでいつもその計算に大穴があいていて、失敗するとちょっとひどい神経質なくやみ方をする。腕っぷしはヒロシと同じ位で、背格好も二人ともよく似ているが、器用さはヒロシの方が上でしょう。複雑な家族関係で人生の苦勞を知ってしまったというところがあって、とても中学生には見えないう気取った身のこなしの少年です。

小さい時に母親が死んで、父親はもともと本当の父親ではなかったとかで、今まで育って来た家庭には義理だとか遠縁だとかの関係の雑居家族です。結構事業はうまくいっているとかで一家の生活に活気があるのですが、抜け目のない打算づくめの家族関係は、ちょっと入ってみただけで、とうていわたしにはなじめないものがありました。

それなりに彼のことは家族が心配しているのですが、本当の肉親はだれもない、という彼のひがみがみんなの気持ちにさわるのでしょうか。彼は家族の困りものでした。

ときに、金ですむことならば彼の大変な甘えを許し、ときには彼の意欲をおさえて、大変な圧力をかけてしまうという家庭のあり方が影響して、タケユキのいつも見せる強がりのウラには、強度の不安がわたしにはまる見えになっている。とにかくとても落ち着いておられる家庭



環境ではありませんでした。

タケユキが家を出たいというのも、わたしにはわからないことではなかった。

しかし、わたしには、この二人を引き取ってうまくやっていける自信なんかありませんでした。しかもまた、ここで二人を見離すことの出来る勇氣、その勇氣もありませんでした。

## 第五章 氣負いすぎた青年の失敗

いま彼らになにが必要か

ヒロシやタケユキのどうしようもない荒れ方を、学校としては大問題として、その扱いに手をこまねいていた。

問題視され警戒されると、彼らはますます荒んでいった。

ところが、わたしは学校の先生ではないので、当事者としての責任を負うことがなく、従っていかにも卒直に解放的に彼らの家庭を訪問しては、楽々と彼らの心情を彼らの口や態度からひき出し、了解することが出来たのでした。学校に対する反撥、家のこと、交友のこと、日頃の彼らの行跡について……なんでも話してくれた。わたしに対しては心を開いてくれたと思います。

そこで、彼らも、わたしも、つい大変な思い込みをしてしまったのです。彼らは、「イトーさんならばくらを理解してくれる」

と、思い込んだ。荒れ放題に荒れて始末がつかなくなってイトーさんのところなら逃げこめると、考えた。そして、彼らが飛び込んだのを見て、わたしは、自分が、彼らによって信賴されている唯一の存在なのだ、と、うぬぼれてしまいました。

彼らにとつては、いまなにが必要なのか。疑いもなく、彼らを受け入れる人間が必要なのだ。それは、いまわたし自身がなろうと思えばなれるのだ。ヒロシとタケユキの期待をいまここで裏切ったら、もはやわたしはこれから後教師となったところで、少年達にとつて有用な教師にはなり得ないだろう。わたしは、人生がそこに賭けられている、という思いで、そのことを思いつめたのでした。

わたしには、人間個人の人格形成というものがなによつてなされていくのか、その筋道をきわめたいという徹底的な願ひがあります。それがすべての行為と思索の動機になっています。それをきわめることは壮大な推理小説の謎ときです。この推理小説は、ちやちなわたしの一生の短かい期間にどれほどの謎がとけるわけでもない壮大さです。やつてもやつてもやり尽くすこととはない、と思うのは、大変な安定を心にもたらしにくれます。失業を心配しないでいいと同じ安心といつていいのかも知れません。人格形成の謎がわからなかったら、本当のところ、人間同士この世の中でうまくやつていくやり方が、つかめないはずです。

ひとりの自由を味わいたい。他人と共感したい。この相矛盾する気持は、わたしの最も基本的な欲求です。その調和をだれもかれも無理をせずにはかかれるような社会になつてほしい。わ

たしはそんなことばかりいつも考えています。今彼らが飛び込んできて、人格形成に就いての謎ときの一つの機会を与えてくれようとしている。彼らとどこまで共感を深められるか試してみることは誰にとってもマイナスではない。

翌日、わたしは彼らを家に居らせて、わたし一人彼らの学校へ出向いていきました。彼らのそれぞれの家にも出向き、親達にも会いました。警察署にもたずねて行って、彼らの行跡を心配している少年係のAさんとも話し合ったのです。

中学校での教頭や担任や校外指導の先生の意見は、ざっとまとめてみると、こういうようなものでした。

「きみの熱心さはどうも理解しにくい、しかし、彼らがきみを頼っていき、きみもそれを受入れてみようとと言うのなら、中学三年の一年をきみの家ですごさせてやるのもよからう。学校がどれだけ努力しても、家庭がしっかりしてくれないので、われわれはお手あげなのだから。ほかの生徒に及ぼす悪影響を考えてぞつとしているところなのだからきみさえやる気なら」

またそれぞれの家では、

「そらイトーさんとここに置いてもらうのやったら、そんなありがたいことはない。けど、まあみとってごらん。ちょっとやそつとであいつがよくなりますかいな。あんた、若気の至りで、後悔しますやろなあ。しかし、まあとにかくどうかどうかよろしく頼んまっさ。わたしらがなにを言うても、あいつらはさからうばっかりや、ほんまによろしゅうお願ひします」

と、あっけなく荷をあずける態度だった。

少年係のAさんは、

「とうとうそうするか。まあ、きみの気持次第や。本気になってみてくれる、という人間が、どの非行少年のまわりにも欠けているのでねえ。しかし、きみが果たしてやっていけるかどうかはやってみないとわからんなあ」

と、なんやら半分含み笑いで半分はまじめな共鳴の、優しい励ましを与えてくれたのでした。教育心理学専攻の一学生が、非行傾向の中学生の家庭訪問を行ううちに、こうして二人の中学生を一年間自分の家に引き取る結果になってしまいました。

そして、およそ他人が予想するように、それはうまく行きませんでした。

しかしこの体験は、わたしとわたしの妻にとつての全くかけがえない体験でした。

一緒に顔をつき合わせて暮すということになると、これは、時々わたしが出かけていって会って話を聞いてやるというのは、全く違った次元の人間関係です。

つまり、わたしは保護者代行人で、彼らは保護される中学生、という関係です。アキラに関しての体験とは全く異質の少年達とのかかわりが進行していききました。

本気な真剣なかわりが、非行傾向の少年達にとって最も大切だという少年係のAさんのことばはもちろん間違いではないけれども、いくら本気でも、いくら真剣でも、やり方が正しいかどうかによって、どのような結果にもなりません。

親が子どものことを必死になつて心配しても、親の目の前でぐれていく、ということがありますが、それは、多くの場合、熱心さ、本気さが足りなかったのではなく、やり方を間違えていたのです。親が子ども一人のことに心配して出すエネルギーの量といえば、誰がなにをやるかと、それになんうはずがない。

わたしはアキラのことよりも、ヒロシやタケユキについての方が、何倍も真剣で本気だったし、努力も比較になりませんでした。しかし、それがアキラの時の何倍分の効を奏したとは思えない。いや、むしろ、何分の一の効もなかったように思えます。

無駄なあがきでお互いの心をすりへらしあつたように思うのです。

#### 受け入れるよりも説教ばかり

わたしは、なぜ日に日にわたしの労力の増大に逆比例して、彼らが素直さを見せなくなっていくのかを、冷静に理解しようと、その時は一生懸命努めているつもりでした。実際にはちつとも冷静にはなっていないのに、気づきませんでした。

わたしは、親でも縁者でもない者が、中学生を引き取つて面倒を見るといふ、いわば当節では稀有の熱心さに、少年達が共感するのなら、事態はうまくいくはずだ、と甘く考えていたのだと思います。

ヒロシとタケユキの生活費は、どうにかこうにか月々無理をして捻出していきましたが、そ



ういうわたし達夫婦の苦勞を、ヒロシらはちゃんと受けとめてくれるだろう、というわたしの期待は、大甘のじぶんを英雄視する独善だったのだと思います。

たしかに、はじめのうちは、ヒロシもタケユキも、わたしの家での暮しをはじめた以上、わたしの家のやり方になじもうと努めました。わたしの期待に添うよう懸命に努力していたその様子を、もとの中学校の先生方ももしも見たならば、その卒直なうってかわった明るいなごやかさに、特にわたしの妻に対する素直さに、おどろいて目を見張ったに違いありません。

その彼らの良い意志、良い意欲だけを純粹に受容することが出来ればよかったです。ときどき訪問して気持ちを受け入れるという立場ならばそれが出来ました。ヒロシとタケユキについても、彼らが自分達の家にいる間はそれが出来ました。けれども、いまや、彼らの保護者代行人という立場では、それが出来なくなっていました。

たとえば、彼らが、わたしの家の隣家の垣根に干してあった大根を、片っぱしからずたずたに切り落したのにはおどろいた。はじめ理由がわからず、わたしは彼らをどなりつけて叱った。しかし、よく調べてみれば、転校のために連れていった地域の中学校の、教頭をはじめ先生方が、ヒロシとタケユキの身のこなし、目つきを見て、露骨な警戒心を示し、冷たく関心のない様子を見せた。そのことを、ぐっと耐えて学校から帰って来た。そのうっぶんばらしであったのです。大根を切る位、自分達の心の傷口とくらべたらなんでもない、とでも思っているような彼らに、わたしは、彼らの心情をわかりながらも、保護者として、くどくどと言ひ聞かせて



おりました。隣家にひどい被害を与えたことを批難し、注意を与え、今後こんなことをしたらこの家におまえ達を置けない、と言わんばかりの、念入りの言い聞かせを続けたのでした。

また、たとえば、彼らの住んでいた地域で多くの若い者がやっていたように、クレープのズボン下に紫色かなにかの腹まきという下着姿で表に出て、股をわっさわっさとひろげて歩きながら、つばをチョッ／＼と音を立てて飛ばす。道を行く女の人に、

「ねえちゃん、ええ服きてまんな」

とかなんとか、これはタケユキの方がおもに、へらへらした調子で、つい習性になったからかきが出る。悪気なんかあつてするのではない。つい気楽にやってしまう。地域が住宅街なので随分わたしの目から見たら目立つ。彼らの家のあたりでやっていたときは、なんでもなく見過ごせたのに、わたしの家でやっているとところを見ると、なんでもかでも、これは困るな、これは困るな、と思ってしまう。

だれだって日常自分で気づかない生活の習慣を、ことごとく意識させられとがめられ、改善を要求されれば、いやになってしまいます。ことに彼らは気分屋で衝動的で我慢することを知らない少年達で、だれの忠告も無視してやってきたのです。ほかならぬわたしの忠告だから、はじめのうちは一々それにこたえるべく努力をしていましたが、こういう日常的な、自分ではそれを別段悪いと思っていないことを、あげ足をとるようにとりあげられると、彼らのふるまいのなにもかもが、規制され、禁止されるのだと思つて、彼らは気持をくさらせてしまうので

した。

そして、彼らは最初、この一年間は絶対に一度も家に帰らないで、イトーさんの家で努力すると、かたくかたく誓ったのにもかかわらず、實際生活してみると、この生活は思いがけず不自由で辛く、慣れなくて窮屈で、我慢出来ないのです。

彼らは、家に一度帰ってみたい、日曜に帰ってみる、といい出しました。こちらへ来て、まだ一カ月もたっていませんでした。親達には会いとうもないけれど、ほかの友達の間は静かになつて居るのかを一目だけ見に帰りたいという気持ちを、何週間か抑えるのさえ、もう大変なものでした。今友達に会ったら、いわば、ヒロシとタケユキはグループの芯なので、彼ら二人が神戸に居るということ皆が浮足立ってしまうだろうことは容易に予測出来ます。

そのあとで、何人かが二人の居るわたしの家へやって来たり、どうかすると、それで学校へ行かなくなつてしまつたり、それらの親があとを追つかけて来たり、それこそごたごたとどんなやっかいがうずを巻いてしまうか知れない。向うの中学校とも、わたしはちゃんと約束したのでした。ヒロシとタケユキだけを神戸に置く、ほかの連中とは、一応この一年間連絡をとりあわないこと。しかし、それは無理でした。

帰りたい帰りたい、という二人の思いを、なだめすかして抑えると、我慢出来ずに、ところかまわずうつぶんばらしの暴発です。学校の先生への暴言とか、登校拒否で朝遅くまでのふて寝とか、近所の子どもを脅迫してものを巻きあげるとか、通りがかりの人に相手になつていく

とか、どうにも抑えがきかないのには弱りはてました。

これでは最初から、あんまりにもつまづきっぱなしです。

### 無為無策の生活の態度

わたし達夫婦の居室と、彼らの部屋は、台所兼茶ノ間でへだてられていましたが、夜おそく何時になっても寝ないで、ラジオを聞いたり高声で話し続けている気配に、わたし達もどうしても寝つかれず、いくら早く寝るように言いにいっても、こちらへ帰って来てわたしがふとんに入るか入らないかのうちに、また気配がもとに戻る。あれではまた明朝いつまでも起きないで、結局は学校に行きそびれてずる休みになってしまふと思うと、気が気でない。

ここはやっぱり、彼らの住むところではない、とわたしと妻は何度も話したもので、妻は、社会福祉のケースワーカーで、すぐ「対象者」への接近、とかいうことが問題になる。福祉の援助を必要とする該当者を「対象者」といい、専門家は、どうかすれば、「対象者」のことを

彼らは、彼らは、といって議論する。いいかげんなこちらのひとりよがりの接近という言葉には疑問をもっていた。「彼ら」ではなく「われわれ」という発想がなぜ出て来ないのか。それは結局身を置いている場所が違うのだ。他者だとしてお互いに違った立場から見ている限り、福祉の援助するものと援助される側の生きたかかわりは出てくるはずはない。飛躍した言い方

を言ってしまったえば、社会福祉が世の中の差別をこわしていく原動力になるには、視点の変化がどうしても必要だ。援助する側と、される側とがひとつにくるまった「われわれ」である視点が必要だ。そういう議論を、わたしと妻は幾度繰り返したとか、数知れない。その果ての実践でもあったのです。

ヒロシとタケユキと一緒に暮しはじめてみると、自分達の抽象議論が、結局、わたし達の生活体験の狭さによって成り立っているということが、安物のメッキのはげ落ちていく様子よりももっとあっけなかつた。

日本の国という、ひとつ所に生まれて育つて、ほとんど違わない条件で生きているようでもそれぞれの置かれた生活環境は違うのです。愛されて認められて安定して、集中も出来る創造力のばせられて、人づきあいもうまくトレーニングされて、自己を発揮していける人と、逆に愛されもせず、認められず不安定で、集中力が育たず、創造力がなく、人づきあいに支障ばかりを生みだし、自己を全く発揮出来ずに終ってしまう人とは、生まれてこの方、置かれて来た場所があまりにも違うのです。どのように違うかの深い認識を持つ契機を、わたし達夫婦に与えてくれたのは、ヒロシであり、タケユキであり、又、その後、わたし達の家庭に委託を受けた何人もの少年達でした。

さて、ヒロシとタケユキにとって、中学三年の勉強というものは、もはや無縁に等しい程難かしくもあり、面白くもないものです。そして、先生達からは白眼視され、常に警戒されてい

ます。

しかもわたしは、彼らの日常行動のハシバシを、片っぱしから、こうしてはいけない、ああしてはいけないと、忠告しつづけます。

彼らはこれまで、街の中をうろつきまわることを続けていましたから、あどけないような周辺の中学生と一緒にスポーツに興ずるとか、学校のクラブに参加するとかは、考えつきもしなくなっていました。

何よりもかよりも、わたし達は、彼らの無為無策の生活態度には、全く驚いてしまったのです。なにかおもしろいことないか、というのが、彼らの基本的心情であり、よそからその、なにかおもしろいものがやって来ない限り、こちらから探しにいたり、作り出したりすることを全く思いつかないのでした。

面倒くさいことはいや、注意を集中させることはいや、耐えることはいや、くたびれることはいや、考えることはいやなのでした。

よそから与えられるもの、いやおうなく身にふりかかってくるもの、刺戟の強いもの、一時の興味をかきたてるもの、そんなものに身をまかせていく。浮足だった感情のゆれ動きのままに心をただよわせていく。それ以外の人生のすごし方を、彼らは知らなかったようなのでした。しかしそれだけに、彼らは、世間の事物のうわべの衣をはいで裸の姿を見る目を持っています。彼らの目で見れば、わたしや妻の、やっていることはみな、性急で目的主義的すぎる、

意識的すぎる作り物の作業なのでしょう。仕事の進め方や生活のたて方は、時々感情や欲望を殺しそれに無感覺となり、他人とのつき合ひでは、本心でないきれいな事を言ひあう互いの八百長でつながっており、なにかもあまりにも人工的な配慮によって成り立っている。そんな生活より、いっそ腹が立ったら殺し合ひかねないような生き方の方が、ずっと自然だ、氣楽だ、と考えているようなのでした。

とはいっても、共に暮すことは、なんとといっても共感の深まり広がりを生んでいったことも否定出来ないのです。

われわれ夫婦との共感が、はたして彼ら自身にとって幸いであつたか不幸であつたかは、それををはかるひとそれぞれの尺度によって違ふでしょう。

### 明確な自己主張と共に

みんなの満足の出来る食事のあとなど、屈託のない気分が満ちて、見事に愉快的な充実した会話が展開することも往々にしてありました。そういう時妻は大声で冗談をひきついで、けらけらと笑います。姉さんの笑い方がおかしいといつて、妻の冗談を、ヒロシがひきつぎます。タケユキの、調子が出たときの流れるような回顧談、つまり、自分がどれほどこっけいな程人に無視され軽視されたかの話など、全く話している本人さえもがこっけいで、聞いていて、みんなげらげら椅子から尻がずり落ちそうになり、果てもなく続きます。

ヒロシは時々、伸びをしてせいせいしたという調子の明るさで、

「なあ、にいさん（わたしのこと）、話をするということは、おもしろいのやなア。家でお互いが衝突し合わんとわいわい話しあうことなんか、オレ、全然なかってんでエ。オレいつもみんなにごつついすごみをきかしてて、言われとったやろ。あれはな、いうたろか、ほんまはなア、話なんかしたこともないもん。しかたなしにぎゅうつと目にすごみつけて……。こうして……」

「ハ、ハ、ハ。やれやれ。やってみイヒロシ。もつときついで、いつものおまえ」

と、タケユキがけしかける。わいわいげらげら、自分を客観視することをはじめるのでした。確かに肩に入れた力を抜いておだやかになってみると、ヒロシはひょうきんでした。

実のところ、彼は、いままで身を構えずぎていました。前に聞いたうわさは本当だったので、わたしのところへ来た翌日、わたしのところにいることに決まった時、彼はわたしの居室へ、改まって入ってきて、

「イトーさん、これももういらんから、預つといて。どこかへ隠しといて」

といて、赤いもうせんに巻いたものを、わたしに手渡しました。

開いてみると、白木の柄の刃渡り三寸程の短刀でした。これをずつと、彼は身につけていたのです。彼はひとりで身をひきしめて生きてきたのだ、とわたしは絶句したのでした。

「なあ、にいさん。賢いものはずるいと思うねん。頭のない奴ほど正直やと思うねん。オレなんか、ちょっと本読んだら頭が痛うなってしまう。ここへ来てにいさんの部屋みたらごつつい

本がぎょうさん並んでるがな。びっくりしてもた。これは飾りやろ、まさか読んでえへんのやろと思うて、開けてみたら、どれもみんな線引っぱったり、なんか書き込んだりしてるがな。あれノみんな読んどるノと思うてびっくりしてしもた。にいさんごっつい賢いわ。けどバカやな。オレらのようなものをなんで置いとるのやろ。それ、考えたわけや。賢い奴のすることと違うがな。ようわからんようになってしもてんでエ」

「ねえさんは、くそがんばりやなア。弱々しそうな細い体してて、ごっつい意志が強い。金あんまり無うても、平気な顔。そんな顔出来へんで、これほど金が無かったら。しかもや。さっさっさーと、おかず作んのん、うまいで。オレ、家にいるときなア、こんな三つも皿の並んだパンメシ食うたことないねん」

……生活を共にすることの気楽な近づきあいは、進んだのです。

ヒロシ達とわたし達夫婦の間には、これまでの生活の違いから来るあきらかなへだたりが、どうしようもなくありました。しかし、日を追って、次第にそれだけのものではなくなっていくたと思います。

彼らは次第に自分のことばや態度で自分の心を表現する愉しみを身につけはじめます。自己主張が次第に明確な輪郭を持ちはじめます。そして、心の底深いところで、次第次第に、自分の置かれた境涯や、自分が人生のトレーニングを人並みに受けなかったことに関する認識を持ちはじめ、それは一種の被害意識となつて、明確に自覚されていきます。



これまでは自分でもわけのわからない衝動的行動で気持を発散させていたのだけれど、それがどんな抑圧によるものであるかに、気づきはじめてた。

皮肉なことにそういう被害意識に目覚めさせたのは、わたし達の家での人間関係と生活の仕方であったのは事実ですが、彼らにとっては抑圧を与える世間というもの、さしあたっての直接の代表者が、これまたわたし達夫婦だということも事実なのでした。日常の暮しの中で、相も変らずああしてはいけない、こうしてはいけないと言って聞かすわたし達の言葉を、ヒロシ達は、フンと鼻先きであざわらうようになってきました。

限りのない敗北感が：

夜中の二時、三時になっても花札をやめないヒロシに、

「いいかげんにしろ」

と叫んだら、フンと鼻先きでわらいました。

「朝起きれない。学校をまたざる休みする気か」

こっちは興奮して、はては嘆願するような調子で寝るように言うと、ヒロシは、わたしをまるであわれむような表情で冷たくニヤリと笑って動じない。

「オレが、一生懸命おまえらのことを考えてるのがわからんのか」

「余計なおせっかいかい」

「なにを？ここで生活してんのは、そしたらどういいう意味や」

「勝手にじぶんがええ氣になつておりたいためと違うか」

「……………」

「なぐりたいのやつたらなぐりや」

わたしはヒロシの横つつらをなぐつたのです。たてつづけに十回なぐつたのです。アキラのときとはエライ違いでした。

なぐる音は、はかなく虚空に消えていきました。こちらの心が動転し、ヒロシの態度は冷たく座つてしまつていました。わたしがなぐりおわつたら、ニヤリとして、

「ハ、ええ氣なもんや」

とヒロシはすてゼリフを吐いた。

どうにもこうにもこちらのみじめさだけが残りしました。

こんな敗北感が、数限りとなくありました。

話を単純化するために、ヒロシとタケユキ以外の少年には触れませんでした。実は二人がいた約二年の間に、いろんな事情から、児童相談所を経由したもの、それ以外のもの、いろいろな少年達がわたし達と、あるものは一年、あるものは数カ月か数週間か、一緒に暮しました。一緒に暮すと、あまりにも人それぞれの違いがはっきりします。共に生き合うこと、それがどこまで出来るのか。若いわたしは、実は必死でした。見る人が見たら茶番に見えたかも知れ

ない。妻は心労のあまり、見るかげもなくやせこけて、それでも、皆の前では氣張った姿を見せ続けました。少年達の友達もたくさん来て、中学校のD先生によれば悪の巢でした。

少年ばかりでなく、K少年がさそって連れて来たユキエという中学三年の女の子も、よくわたしの家に来るようになりました。中学校一荒れた子どもで、まるで大人のようなさびのきいた低音で、西田佐知子の、

「アカシヤアのオ雨にうたれてエこのまま死んでしまいたい」

と、投げやりに歌いながら、ボタンと戸をしめて向うの部屋に入ったり出たり落ちつかない様子が、みんなの気分を象徴しているようでした。

わたしは、ひとつ自分で作ったうたを、ある晩みんなにうたってやりました。

特にヒロシが、何度も繰り返しを要求し、みんなすぐ覚えてしまいました。その晩、一晚中みんなは歌って歌って歌い続けました。

くらいさびしい　はげしい道を　歩いたあとは

苦しみ忘れて　夕日赤い空をあおぐ

ひからびた土に　涙はこぼれ

つかんだきみの　てのひらに汗にじむ

花ひらく心に　みちゆくかなしみが

さあもう一度ゆこう あしたまたもう一度

きみにはきみの道

ぼくにはぼくの道

弱音はくなよ また会う日まで

ヒロシ達は、うたうお互いの共感に酔って、目をつぶって、大声をはりあげ、とどまることを知りませんでした。開けはなった窓には、暗々とした虚空ばかりがひろがっていました。

赤ちゃんをみてやれや

本当に生活といえるような生活ではありませんでした。わたしは、昼間、児童相談所の囁託の仕事に出かけて、家から離れることが多かったのですが、妻は二十四時間家にいるきりです。荒らくれたような少年達の中で、気の休まる時がありませんでした。買い物に出る、バスに乗って、バスの座席に座ったときに、ほんと自分の世界に戻った、と思う、というような話をしてくれました。わたしも、仕事を終えて帰るとき、さあこれから家だぞ家だぞ、心をしっかりせえよ、と自分よびかけるのでした。

いまから思えば随分無茶なはなしです。しかし、その頃わたしは、とにかく自分で出来るぎりぎりのところまで、彼らとの共感とへだたりとを確かめないではおれませんでした。そうせ

ざるを得ないほどにも、いろんな人々の置かれた現実のハンディは深くひどいものなのだ。人間として不当な現実を、自分の体験として味わいつくさないでは、人間社会のことを議論する市民のひとりとはなり得ないはずだ。わたしはひとりでもつづやきました。

氣負いだといわれれば、こんな氣負いはほかにないほどかもしれない。どうせ決定的な挫折が目の前にひかえていたのでした。

涙と笑いと、絶望的な失意と歡喜の絶頂が織りなす、いま思い出しても心臓がきつくしまるほどの無茶苦茶な日々でした。

そのなにもかものこまごました出来事はとても書ききれません。

ヒロシは、やがてわたしの家から仕事に通うようになりました。でも、持ちまえの頑張りのなさと、カッとする性格のために、どんな仕事も長つづきしませんでした。

わたしの家へやって来てから二年目のある日、彼はやっぱり家へ帰る、イトーさんにこれ以上迷惑をかけるのは自分もたまらない、いろんなことがわかった、ありがとう、帰ります。と言った。彼の決意は止めようがなく、わたし達夫婦は、彼を駅まで送っていきました。

まだ少し時間がある。茶でも飲んで、別れよう、と三人で喫茶店に入り、二言三言いっているうちに、ぱっと彼がなにか声をあげた、と思いました。見る間に、彼の両眼から、涙がぼろぼろとこぼれ、こぶしでなぐりつけるように顔をかくし、ヒロシはほとんど叫ぶように、押し殺して低く声がつぶれながら、こう言いました。

あの頃みんなで歌ったうた きみにはきみの道

作詩・曲 筆者 (昭和37年作)

Am Dm Am Em Am  
 Am Dm Am Em Am  
 G7 Dm Cmaj7 Dm F E7  
 Am E7 Am E7 Am Am  
 Dm Am Am Em Am  
 Am Dm Am E7  
 Am Dm Am  
 Am E7  
 Am

な くら い さび し い。 はげ い みち を ある い た あ と まは  
 く ら い さび し い。 はげ い みち を ある い た あ と まは  
 く ら い さび し い。 はげ い みち を ある い た あ と まは  
 ひ から び た つー ち に な み だ は こー ぼー れ、  
 つ か ん だ き み の、 の ひ ら に あ せ に じ ゃ は な ひ  
 ら く こー ろ に みち や く が な し み が ー、 さ あ  
 も う い ち ど ゆ こ う あ し た ま た も う い ち ど ー、  
 き み に は き み の み ち、 ぼ く に は ぼ く の み ち、 よ わ  
 ね は く な よ ま た あ う ひ ま ー で ー、

くらしい淋しいはげしい道を歩いたあとは  
 苦しみ忘れて夕日赤い空をあおぐ  
 ひからびた土に涙はこぼれ  
 つかんだきみののひらに汗にじむ  
 花ひらく心にみちゆくかなしみが

さあもう一度ゆこう  
 あしたまたもう一度  
 きみにはきみの道  
 ぼくにはぼくの道  
 弱音はくなくまたあう日まで

遠いはるかな青い空をあおぎながら  
 しあわせもとめてあすも細い道があるく  
 友はみな世の中の流れにうずもれて  
 すすんでゆけるのかはやどこかでくじけたか  
 よびかける心にみちゆくかなしみが

むかし停車場でわかれたみんなに夢で会って  
 ここまで来れたよと夢の中でじまんばなし  
 もう倒れそうだとそぶりもみせず  
 かわらぬつよがりかふざけあうなつかしさ  
 こらえ通す心にみちゆくかなしみが

繰り返し

繰り返し

「イトーさん、オレらみたいなもの、もうみてやるなや、な、同じみてやるんやったらなあ、自分の赤んぼでもええ、ひとの赤んぼでもええ、赤ちゃんの時からみてやれや、な！」

ヒロシの叫びを押し殺した声が、あれから後、いつでもいつでも、わたしのお腹の中で叫んでいます。

駅で別れてから二年後に、突然ひょっこり、ヒロシはわたしの家にたずねてきたことがあります。その時はわたしより何センチも背が高くなり、体もがっちりして、まったく大人びて、ほとんどなにもお互いに言いかわしませんでした。窓から下町を見わたし、わたしとじつと並んで無言のままできてから、気安さとへだたりの入りまじった決着のつかない表情になって、また来る、と一言だけ言って、帰っていきました。

それから一度も来ません。

ヒロシと一緒にだったタケユキは、もともと、ヒロシより一足先にわたしの家から離れていったのですが、一、二度それからたずねて来、それから後、十年ぶりに去年、じぶんの妻と四才の息子を連れてやって来て話すには、ヒロシはオヤジや兄同様、組関係に属しているのだということでした。それもいまはいいところまで上がってるんやでエ、ということでした。

ヤクザだから悪いという資格はありません。それとは別に、ヒロシについては、わたしは見事に力がなかったと思うだけです。

わたしがヒロシに与えたものよりも、ヒロシがわたしに与えたものの方がはるかに大きかつ

たのです。

同じみるんやったら、赤ちゃんの時からみてやれや！な！……彼のことは今もわたしを方  
向づけます。

タケユキに、ヒロシが言っていたさうです。

「オレ、イトーさんにはまだまだ会わんつもりや」と。

わたしはそれを聞いて、良くも悪くもあの二年間のヒロシとのかかわりは生きている。彼に  
とって、わたしはひとりの知己になり得ているのだ、と強く思いました。

赤ちゃんの時から……。わたしは話をそろそろ親子関係の本質を考える筋道に向けていこうと  
思います。



## 第六章 子を生み育てる “重さ”

生まれながらの不平等

赤ちゃんのときからみてやれや！

ほんとにそうです。ひとはそれぞれ生まれついたその時から、さまざまの違った扱いを受けています。ピンからキリまであります。ピンとキリを比較してみたら、その違いの大きさがわかります。

一年間で、大阪市内だけで、四十人も五十人も捨て子があると聞きました。

放置されてごえたり飢えたりして死んでいった子ども達は悲惨すぎます。

放置されているのが発見され、発見されるまでに熱を出して高熱で脳がこわれ、親もなくて一生自立も出来なくて、施設に收容されっぱなしの場合もあります。苦しみ悩みの長さからみて、放置されてすぐ他界した場合よりも、もっともつと悲惨といえるでしょう。

それから、また、親から捨てられるというと、こんな悲惨なことはいけれど、しかし、捨

てられたから悲惨だというのはなくて、捨てる神あれば拾う神ありという諺どおり、むしろ、子を捨てるほどの親なら、そんなところで育てられるよりもっとよいところで育てられるという好運もあります。現にそうなっている姿を、実際に、いくらもいくらもわたしは確かめてきました。わたしの参加していた里親運動のまわりには、育ての親の力によつて幸せの保障された子どもがいっぱいいます。

まあ、いまの世の中では、親に見捨てられようがなにされようが、いちはやく保護されるならば、公の福祉の措置で、なんとか子どもひとり成長するための条件が、平均的に保障されています。親から離れて、保護される赤ちゃんを収容する児童福祉上の施設は乳児院ですが、乳児院は赤ちゃんを育てる場所としては、ひどい家庭よりはずっと良い。いい保母さんにめぐり会つて可愛がつて育てられる赤ちゃんは幸せです。

たとえば、アル中かなかで人格に破綻をきたしていて、生活力がなく、ウチではいつも乱暴を働く父親と、そんな夫に愛想をつかしては、別のあちこちの男のもとに走り、うまく行かずに戻つてきてはヤケになつて赤ちゃんに当り散らす母親。家の中はいつも滅茶苦茶。赤ちゃんはいつも飲まず喰わずの連続で、泣き疲れ、あきらめて生気もなく暗いすみで、いつも一方向けに寝かされて放置され、頭はすぐ片方にゆがんでしまつて、人工綿がごろごろの破れたふとんにまみれて横たわっている。

オムツがいつも忘れられたままびしょびしょのずくずくで、むれてちよつとやそつとのもの

ではない臭いを放ち、お尻はただれっぱなしの見るも無残。

赤ちゃんの顔は湿疹だらけでかさかさで、表情というものがなく、やせてあまりにも小さい。生きているのか、死んでいるのか、息をつめたまま、という感じである。そういう風でも、自分のことにかまけて気がどうかなってしまった親は、子を捨てるなどさえ思いつきもせず、かといって子どもがいまや大変な状況で、子を育てることがいかにその親達の現状を超えたものであるかを考えさえしない。

社会の片隅では、そういう現実が、常時どこかであるわけです。

誤解されると大変です。駄目な親なら子どもを捨てた方がいい、などといっているとはとらないで下さい。子どもの扱われ方には、下には下がある、という、どうしようもない悲しい現実を言っているのです。

ヒロシの叫びは、言いかえてみれば、人間はなぜ人生の出発点で、みんなが平等な条件を与えられないかについての痛憤です。ひとはみな生まれながらにしてあまりにも不平等すぎます。わたし達夫婦は、ヒロシ達中学生と共に暮しながら、明けても暮れても、生まれながらの不平等が悲しくてたまりませんでした。自分達の力があまりにも非力すぎて、むしろ滑稽だ。しかし、笑うにも笑えない思いなのでした。

しかし、そんなわたしの思いよりも、もっともつと、ヒロシの方が、ドスをいつもかくし持ち、強がりと言って腕力で鳴らしてきた彼の方が、不平等に対する痛憤が何十倍も強いのだと

いうことを、愚かながら、彼との別れのきわに、彼がはじめてほとばしらせた涙と叫びによって、わたし達夫婦は思い知らされた。

どうにもこうにも悲しいのです。世の中はあまりにもひどい状況に満ちていて、自分達はあまりにも非力にすぎるのです。しかも、生きていく上はどうしたって自分かわいさが基本にあつて、他人のことは二の次になるといふ、これは逃がれることの出来ない現実です。弱い、弱い弱い。

ヒロシがわが家を出て行つてから二カ月後には、家にいるほかの子ども達も連鎖的に、あるいは交響的に関連しあつて、事を起こした。里親（特に神戸市が認定する家庭養護寮）として非行傾向の中学生を短期間引き取つて面倒を見るといふ形のわが家ではあつたが、それにしてもガタガタになりすぎました。

わたし達の力の及ばない事が、いよいよはつきりし、直接には、隣家の主人から、「幼児をかかえる自分達としてあなたのところの少年達の影響が恐しいので、せつかくマイホームを作つたのに残念だが転居することに決めた」

と、それまでの協力的な理解がこわれたことを打ちあけられたことがわたし達の挫折を早めたのでした。

## セイイチのこの悲しみ

わたしはこれではかえって誰もかれにも悪い結果を招くだけだと思い、家庭養護寮としての実践の中止を市に申し出ました。事態を察知した児童相談所の関係者諸氏が、急遽子ども達の引き受けの手配などに走りまわってくれました。未熟な者が未熟な事をして、いろんな方々を走らせる結果にしかならなかった。その当時、ひそかにわたしの行跡を案じてくださっていた人々のことを想起すると、いつも胸がぎゅんとしてしまいます。

子どもがいる間中、なにかにつけて協力を得ていた地域の派出所に、中止の旨伝えに行くと、ほっとしたように中年の警官がこう言った。

「ああ、やっと決心したの。あんたとこ、中学生をおくのをやめるのですね。よかったよかった。実はねえ、周辺で、空巢やちよつとした盗難の届けが二、三あるんだけど、もしも調べてあんたに迷惑がかかるといかんと思ってたねえ。せつかく努力しているあんたがますます大変だろうと思つて、手をつけないでおるんですわな。まあ、やめるんやったら、よかった、よかった」

気をつかってくれていたことがありがたく、ここまで疑われていた、この程度に思われていたと知つて、わたしは呆然自失のありさまであった。愚かな未熟さです。

その時までいた子ども達は、あるものは家に帰り、家のない二人は、施設へ行くことになった。その二人のその後の変転は、わたしに多くのことを教えてくれた。お互いに生きている実

感を確かめる関係は今も続いています。

わたしが家庭養護寮を中止することを、仕事から帰って来てはじめて知ったセイイチは血相を変えました。彼は中学三年の始めにわたしの家にやって来、わたしの家から働きに出ていたのです。彼は目をむきキバをむくものすごさで、わたし達の居室に飛び込んで来、

「にいさんもねえさんも（わたし達夫婦のこと）、オレ達を裏切るのか！」

と叫び、坐っているわたしになぐりかかり、わたしをなぐりたい放題になぐり、次に彼は台所の包丁を持ち出して、

「殺してやる！」

と、妻に向かいました。

わたしはなぐられて血の出る口や鼻や目のきわをおさえながら、

「セイイチノやめろ」

と叫んで、ふたりを追いかけて外へ飛びだした。

春のはじめのウソのように平和に晴れた日でした。近辺はなに事もなく静まりかえって、辻をまがっていった妻と、追いかけるセイイチの姿は見えず、わたしはガタガタと体をゆすらせて動転して走りました。

セイイチの激情のあまりのこの行動は、実は、セイイチと、十年後に再会した飲んだくれの父親とが、彼が中学二年の時にくりかえした追いかかけのパターンです。セイイチの反抗に腹を

立てた父親は、なにかというところ、刃物をもって追ってきた。自分は氣違ひのように逃げまわつたものだと、常々セイイチ自身がわたし達夫婦に聞かしてくれていました。そのパターンなのでした。

危険を感じて飛びだした妻と、あとを追いかけていったセイイチは、わたしが近所を探しまわつて帰つてくると、すでに家に帰つており、セイイチの激情の潮は引いていて、ふたりとも沈み込んでおし黙つて坐り込んでいました。

わたしも妻も、悲しかった。セイイチは悲しいより、狂いそうになるほどろたえていたと思う。セイイチは、実は幼児期に親に放置されて、中学生になるまで、親が行方不明という形で施設にあずけられて成長した少年です。十年後に親の居所がわかった。セイイチは家へもどつた。しかしアル中の父親も、自信のない母親も、セイイチの目には悪魔の姿に見えた。前述のように夜の町を父に追いかけまわされたりした葛藤のあげく、セイイチは激しい人間不信におち入つて家出、放浪の末自分から施設に舞いもどり、施設にもまた適応出来なくなつていました。施設園長のすすめもあつて、それから後、わたしの家にやつて来たという経過をたどつた少年なのでした。

彼の扱ひの難しさには、妻も、ほとんど神経がこわれそうな程苦しんだようです。彼のためだけではない、さまざまの心労から、妻はひとが變つたかと思つて程憔悴し切つていました。ものを言わないようになり、時々気がついて見ると、黙つてひざをだいてうづくまつてばかりい

る。それでも黙々と子ども達の食事などの世話を続けていたけれど、その拳句のはてに、このように包丁をもったセイイチに追いかけられる結果で、少年達との生活は終止符を打ったので、子どもが居なくなつて夫婦だけになつてからも、殆どお互いにしゃべりあうことが出来なかつた。口をあければ、必ず子どもものことに触れる。子どもものことに触れるのは、生ま生ましい自分自身の痛みに触れることです。妻もわたしも、徹底的に骨のズイまで自分の非力を思い知らされました。それを反芻してみる力はありませんでした。

### 部屋は空っぽ心も空虚

子ども達の居室にしていたわが家の主たる二部屋は、子どもらの残していった雑然たる荷物の上にほごりがかぶつたまま、それらの部屋にはいっさい出入りしない、ちぢこまつたような黙々とした二人だけの生活が、一年続きました。

ふたりが意志を確認しあつてから、たつたの四年目でこの挫折です。

少なくとも、基本的に「人間に興味を持つ」、「人間のことでひっくりかえるならやむを得ない」と、そんな人生を行きたいとする点で共感できるのだと、朝六時のデートというようなことを繰り返しながら、しゃべつてしゃべつてしゃべりぬいた四年前の、あの清新澆刺とした二人は、どこへ行つてしまつたのだろう。

あの頃、意を決して、彼女は市の社会福祉主事になつた。わたしはその時から、中学校の先



生になるための教育心理の勉強をはじめた。彼女は、自分が福祉のケースワーカーとしての仕事に入る筋道について、ためらいながら、言葉を探しながら、こんな風に説明した。

「なにをみても、なにを考へても、基本的には絶望だと思ふ。そう思ふ以上は、とにかくやってみざるを得ぬ気持のものを、ただやってみるまでのこと……」

そう語る彼女の静かな情意が、親近な自然さで身に沁みた。あの時の共感から、いまわたし達はなんといいへだたりの境地に来てしまつてゐることだろう。

わたしはわたしで、こんな説明をしたと思ふ。

「中学校の先生という、殆ど間違はずには済むはずのない職業を選ぶまでに、ほんとうに、複雑な曲りくねりの道を来た。よくよく自分の生き方に迷つた結果の決定である。結局いま自覚してゐることは、ひとを教え導く仕事というものは、必然的に傲慢。せめてその傲慢さに気づく深さが、先生の「人間」をわずかにあらわすのだろう。わたしは先生にならうと思ふ」

教師の娘として生まれ、学校とか教育とかの周辺に、子ども時代親しんだがため、教師という職業を冷やかに客観視してゐた彼女は、傲慢さを認識しようとするその認識のあり方ゆゑにわたしが職業として教師を選ぶことを支持すると、断定的に表明してくれた。あの頃の二人の輝きは、どこへ行つてしまつたのだろう。

教職の道からは、これまで述べて来た筋道で路線をはずし、わたしは、彼女の仕事に接近し、結局逆に彼女を巻き込む形で、児童福祉の仕事のワクに入つて、中学生達と共に暮らしてしまつ

た。その挙句の果てに、これほど簡単に、挫折したのです。

もろくもあつけなくも自己の無力と世の中の問題の深さに意を屈し、二人はなにも論じ合わない一年をすごしました。

妻の思いはおそらくこうだったと思います。

「社会福祉の道をゆこうとするのなら、人間の社会のひずみの中に、自ら入っていかねばならない。その外側からではなく、内側でなにかをなさねばウソだ。しかし、一口で人間社会のひずみといっても、ひとたびその内側に一步をふみ込むと、人間の心の中からひずみの中に巻き込まれてしまわざるを得ない。現状の福祉の仕事のこざれいさよ。形式主義のはかなさよ。福祉の制度と仕事は、あまりにも現実の人間とかけはなれすぎている。それを指摘することは、しかしたやすい。だからといって、わたしにはそれではななが出来たのか。一緒に暮した少年達と自分とのへだたりを、現実はどうしようもなかったではないか……」

やがて、それから一年過ぎ……。妻は自分に残された唯一の可能性は、自分の子どもを生んで自分の手で育ててみることに、そこにしか「生」の実感は残されていない、と考えはじめていた。

しかし、わたしは、「自分の子ども」というものに執着しすぎるに違いない自分をおそれ、子どもを持つことで必ず自分はやがて自分の周りに垣根をめぐらしはじめるに違いない。狭い家族中心の考えにこもって安心したがるようになるに違いないと思うと、子どもが出来るのは

反対でした。

親と子の桎梏が、人間社会のあらゆるゆがみを定着し、進行させる、悪の元凶なのだと考えたのです。自分だって例外でなくその桎梏に足をからみとられて、人間社会をより広く深くとらえようという欲求と行動は、決定的な限定をうけざるを得ないのだと考えました。

妻とわたしの無言の対立は、激しいものになって来ました。

お互いに人間としての生き方を賭けての激しい対立です。生活を共にする限り、その対立がことばや行動にあらわれ、露骨な緊張が時として突発的にあらわれました。

ふたりはやつぱり違うのだというそれぞれの思い。一緒にやっつけていけないという気持の確認。しかし、この四年間の共通体験の果ての二人の気持の違いを、果たして当事者二人以外の誰がわかり得ようか、という天をあおいで口をあけて叫びたい衝動。

生きるということは、いつも「ひとり」なのだ。その事実だけは、彼女とならば、ここまで話し合え、共感し合えてきたのだ。おたがいの違いを認識しあうその深まりでしか、人間同士の共感根を持ち得ない。「二人の世界」でなくとも、「それぞれの世界」がここまで感知しあえるだけ、身近かに生きてきたのだ。

ことばで、気持で、確かめ確かめ、わたしと彼女は、つまるところは真摯に向き合わざるを得ぬお互いにとっての知己でした。

子どもを生むこと。彼女がそれを恐れていない。彼女の決断のプロフィールを朝の逆光の中

で直視したある日、突如あつけなくわたしの心が溶解していくのを感じた。恐れていない。決断している。子どもを生んで育てることによって、彼女は、自分の心のありかをもういちど尋ね当てる事が出来ると、いま、確信している。彼女はそこに賭けている。

### 生む前からの親子関係

わたしはすっかり平明な気持ちになっていきました。すると、わたし自身があれよあれよとあきらめるほど、わたしの心の組み換えがやすやすと進行するのです。

出生した子どもと、その親になった二人、との「出会い」。これが、われわれにとって、すべての人間関係の原初となり得るのだ。自分と子どもとの人間関係を確かめることこそ、これらの自分にとって、もろもろの人間現象を洞察するトレーニングの発露となり得るのだ……と、わたしは考えるようになっていました。彼女との間に生まれる子どもは、わたしを閉じ込めるものではなく、開いてくれるものなのだ。

彼女は懐胎しました。それまで黙ってやけにふかしていたタバコを、ふつつりと彼女はやめてしまいました。

そのほか、いろいろな面で、基本から彼女の様子がガラリと変わりました。以前、彼女は、少年達によく笑われたものでした。ひとつところに考えが集中すると、それにかかりつきりになるのに、なにも考えない時には、ほんとうに何も考えないのです。例えば歩いて石段をふ

みはずしたり、時には道の脇のミゾに落つこちてヒザのすりむきような激しいこと。

「ねえさんはそそっかしいわ。道歩いててミゾに落ちるなんて、だいたい聞いたこともない」

と、いって少年達が笑いころげると、彼女自身も、

「ほんまやねえ。…ほんま？みんな落ちないの？」

と、いって真顔で聞いたので、みんなますます大笑い。

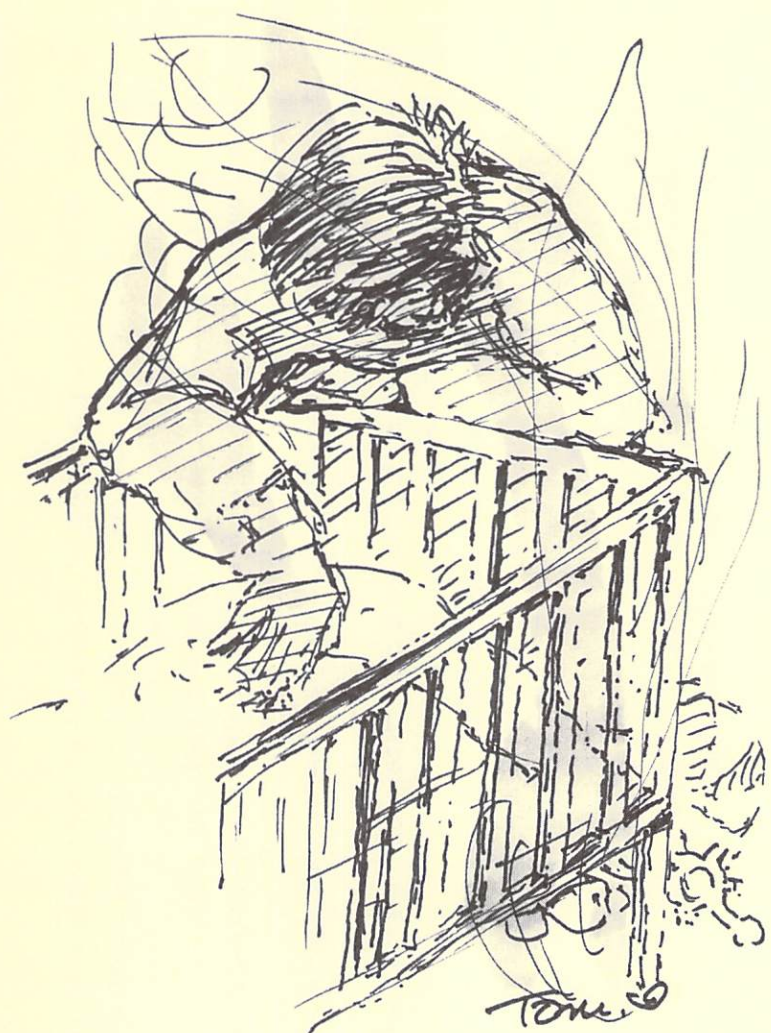
「わたしはだいたい、熱中して作ったオケを、やっと作りあげた、やったアと思ってさつと持ち上げたら、タガをしめ忘れてすぼんと底が抜けた、というようなところ、あるのよ」

と、すましていた彼女が、懐胎してからというもの、ただの一度も階段をふみはずすなど、ものの見事に皆無になりました。

食欲不振がちだったのも、見事になって、直感的な栄養のバランスについての考慮も、見事だったと思います。

彼女が懐胎を自覚したその時から、わたし達二人と、やがて生まれて来る子どもの人間関係はもはやすでに存在していた、と言えると思います。母体としての自分を、細心に、決断的に大切にする彼女は、すでに母親そのものとしての姿を示していたように思います。

自分たちのやがて進行するはずの親子関係をつぶさに眺めようと待つ二人の心のあり方が、つまりは親子関係の具体的なわれわれにとつての形なのです。ふたりにで持続し深められる話し合いが、いつしか再開していました。



そういえば、赤ちゃんというものが、具体的に、どんなものかは、いろいろ見聞して来ているつもりでも、よくわからない。よくわからないからよく確めよう、やがて確められるのだ。そんな自覚がどんどん二人の共感としてたかまつてきました。

昭和四十一年の一月、子どもが生まれました。一貫目以上の女児でした。安産でした。

始めて子どもを産院のベッドの上から抱きあげた時、わたしは痛切につき上げてきた自分の実感がショックでした。

赤ちゃんは、生まれたてはサル同然だとたかをくくっていたのです。ところが実感はそんなものではなかったのです。

ひとりの人間が、手足をおさえられ、目も口もふさがれて、自力をそがれ、不承不承にそこへころがされている。不満を表明する手段さえない……。

そういう感じであつたのです。つまり、これは最初から人間だ、という驚きがあつたのです。赤ちゃんは、はじめは何もわからないから、まあ父親としては、物心つく頃まで待つて、それから徐々に、まともにかかわつてやろう、という、ごく一般的な考え方をおよそ肯定していた自分にとって、これは意識革命でした。

わたしは子どもを抱きあげた最初に、それまで俗に与えられて来た先入観から自由にならねばならないと決意しました。わたしにとっての新しい世界は、その時目前にひろがっていました。赤ちゃんを人格として、対していける予感に、心は快哉を叫び出していました。

折りしもちょうど、わが子の出生と前後して、里親さがし運動の民間機関の事務局長になつてみないかという誘いがかかりました。

社団法人家庭養護促進協会は、わたしが少年達を里親として引き取っている間は、わたしの実践を支えてくれる機関であつたわけですが、その年からわたしは機関の内側の人間となつてまわりの里親家庭を支援し、里親をひろめていく側の立場になつたのです。

いろいろな状況の子ども達と、仕事の中で接しました。子どもを育てる側の、たやすくは表現し得ない、当事者一人一人の絶句する思いの深さ、その極点に、いろいろと接しました。膨大な心の量、心の重さが、知り合った人々の内側に黙々と生きつづけています。わたしは目を見はり、立ちつくし、歓喜があつて、人々の手もとの子ども達の成長に共感し続けることが出来ました。その片鱗さえこの本には書く余裕はありませんし、軽薄に表現したくもありません。

そして、家庭内では、わが子の成長が、日に日に新たな発見をもたらしてくれるのでした。人間は、自分のことを、本当によく知っていません。赤ちゃんの時に、どんなものであつたかを、今の自分とのかかわりで、徹底的に思い返さぬ以上、自分というものの原初からのすべてを掴みきつかけはどこにもありません。そして、自分の赤ちゃんのころを推測するためには、現実には、赤ちゃんの運命が自分に託されるその重さを体験し、まじかにその姿を見つめなくてはならないのだと思うのです。

わたしは、自分の子どもの出現によって、もう一度自分の「生」を生きなおしていけるのだ。



心の中で何百遍もそう繰り返し、自分に言い聞かせていました。

## 第七章 0歳児の“親子関係”

すべての基本が0歳の間に

さて、わたし達夫婦に子どもが生まれました。0歳の子どものつき合いがはじまったわけです。そして、一歳になるまでの育児体験で、ひとつの結論を得た。随分独断的なきめつけに聞こえるのですが、それを先きに言ってしまうと、こういうことです。つまり、

《人間は最初の一年間に、基本の形が出来上ってしまう。そしてそれは育てるものが決定的に影響を与えた結果だ》

と、いうことです。良くも悪くも、決定的に影響を与えています。

満一歳までの一年間に、どんな親子関係があったか。それが子どもの人生の土台の形となってしまうと思うのです。

もちろん、その土台の上にどんな建造物が建てられるかは、将来の未知の可能性というものでしょう。0歳の大切さは、それで運命が決定するというものではありません。ただ子どもが

成長して自らの人格という名の建造物を建てようとする時、苦勞するかしないかは、土台がしっかりしているかないかにかかって来ると思うのです。

最初の一年に親が意識的無意識的を問わずしたことなしたことが、すべて思いもかけぬ形で子どもの身になり心についていく。わたしは自分の子どもとつき合っていて、それを痛いほどこわいほど感じた。これまでの挫折体験が、いっそうその思いを際立たせたのでしよう。

赤ちゃんは、大人のようにことは何でも行動でも、自分の気持を表明することが出来ません。大人の与えた刺戟が、自分にどんな影響を及ぼしているかを、赤ちゃん自身が説明することは出来ない。だから赤ちゃんに与える影響は、与える大人の側にしても、なにを与え、それがどういう結果を及ぼすかがなかなか分らないのです。

どんな風に分らないかという、たとえば、ある人が抱きあげたら赤ちゃんはきまっpegずぐずとむずかり、ちっともいい顔をしない、というとき、その人はともすると、

「わたしはどうもこの赤ちゃんは好きになれないわ」

という形で反応してしまう。その赤ちゃんに、もともと自分をいやにさせる要素があつて、もともとの相性が悪い、というようにきめつけるわけだけれど、事實はそんなことじゃないのかも知れない。

よくあることですが、その人の抱きあげ方や、抱くときの態度や気持は、微妙にその人の心の方向を現わしているものであつて、それが、子どもを受け入れる方向にむいていないことを、

赤ちゃんは敏感に察してしまい、どうもしっくりしない、嫌だ、困る、といってぐずぐず言っていることが多い。もし、赤ちゃんがその時大人なみに言葉で説明できるならばこう言うでしょう。

「わたしの中に、あなたを嫌いにさせる要素があるのではなくて、むしろ、全く反対に、あなたの抱き方、態度、気持がおかしいのです。わたしはそれが嫌いなのです。わたしは赤ちゃんなのであなたに対してはなにも出来ない。大人であるあなたが一方的にわたしになにかをする。あなたの方でやり方をいろいろ考えてもらわないと、わたしとあなたとの良い関係など、はじまりようがないですよ」

こんなことを叫びだしたところなのだと思います。そんなことをまさか赤ちゃんが叫ぶはずがないので、大人には、自分が赤ちゃんに与える影響というものが、どんなものであるかというところが、なかなか分らない。

分りにくいけれども、全く分らないというのではない。その都度、赤ちゃんは一生懸命にそれなりの意思表示として信号を発しています。先きの、ぐずぐずむずかる、というのも、まさに意思表示の信号です。それを信号と受けとるか取らないか、また、どんな信号と受け取るかが、事の別れ際だということです。

意思表示、と書いたけれど、考えてみると、赤ちゃんに《意思》などというものがあるのかどうか、わたしには本当はわかっていません。赤ちゃんの示し出す信号というものは、意思と

いうよりも、もっと生理的な反応、あるいは意識形成以前の衝動パターンといえるようなものだろうと思います。

一般に、人間の心を三つの側面にわけて、知情意ということを行います。《知》と《情》と《意》とは、もともと別々のもので、ほとんどいつも三者が対立的に向かいあっていて、互いに葛藤ばかりしているもののように、われわれは考えがちです。

### 知情意の基礎としての《情緒》

たしかにわれわれ大人の実感としては、いつでも自分の心のうちで、いわゆる知性と感情と意志とがぶつかり合っています。

そして、また、人間の型としても、知的な人間と、感情的な人と、意志的人物、というようにわけることに慣れていきます。しかし、知と情と意をいつでもわけて、別々のものだときめつけてしまっている考えは、わたしが赤ちゃんの時期を大事にしたいと考えている考え方と、だいぶんへだたっているのです。

赤ちゃんはもともと、知と情と意というように心が分化していません。知情意が分化する前の、つまりまだなにかも未分化な、無意識の心というようなものがあるだけです。心が無いのでなく、心はある。しかし、それは無意識の心というべきだと思います。

無意識の心というのは、どんなものかという、それは大人にもあります。どこかで誰かが

泣いている。あれは誰が泣いているのか。と自分の心は一瞬いぶかっている。誰がどこで泣いているのだろう。気がついてみれば、泣いているのは、なんと自分である。そういう時、泣きはじめたのは無意識の心によるのだ、といえばいいと思う。気がついたら泣いていた。その泣きだす気持は、われしらずの思い、というべきものです。

赤ちゃんの心を満たしているのは、すべてこのわれしらずの思い、つまり、無意識の心なのだと思う。だから、赤ちゃんのやっていることは、なにひとつとして、赤ちゃん自身が自覚してやっているものはない。こうしてやろう、と思ってやってはいい。ひとりでこうして。ひとりでこう動いている。というよう形ですが、自覚とか意識とかいうものが無いのだから心がないのだ、といってしまつては、とんでもない間違いです。赤ちゃんには無意識の心というものがある。

議論がどんどん面倒になっていくけれど、もう少し続けたら、わたしは、心というものは、平べったく言えば、一種の測定器、つまりはかり天秤のようなものだと思います。最初最も純なはかり天秤ですが、測定器の構造は成長と共にどんどん変っていく。はじめはほんの小さな芽であったものが、やがて重くひろがって繁茂する大樹となるように、心が測定器のようなのだとすると、その測定器自体が、単純なものから、限りなく複雑で精巧で巨大な測定器、どんなことでも、どんなものでもそれにかけて測定すれば、あらゆる次元、あらゆる単位で測定可能、ちゃんと測定値が出る。という姿に成長するのだと思います。心を、そういう測定器

のようなもの、と例えてみるわけです。

測定器で一番単純なしくみは、あの、手にもってぶらさげて測る、はかり天秤です。左と右とどっちが重いか。天秤は重い方に傾きます。重さの比較が、第三者の目にも、傾くという動きによって目に見える。測定したのは天秤自体の働きです。赤ちゃんの心とは、つまり、そういうものだと思う。赤ちゃんの測定器がなにを測定したか、そして測定の結果はなんと出たか。それを周囲の大人が理解して、その心の動きにそった行動をしてやると、赤ちゃんの測定器は、どんどん活発に動きはじめるのです。

成長した人間の心も、どんどん解剖し分解していったら、結局は天秤のような単純明快な測定器要素の複合体だということになります。電子計算機は、基本的にその考えで作られているのでしようが、もちろん、人間の心は、電子計算機などと比較にならない高度な複合体です。つまり、あれとこれの重さを比較するというのが、心の基本原理で、考えてみれば、世の中の一切はすべて対立しあうものからつまりで構成されていて、その両者の識別比較をするというのが、人間の心の働きだと思っわけです。

心が成長し、膨大なものになっていくと、それが、大まかに、三つの領域にわかれて、それぞれ独自の発達、あるいは関連しあっているの発達ということが行われるのでしよう。ちょうど、色彩でいえば三原色のようなもので、青の領域を《知》とすれば、赤を《情》、黄が《意》ということになります。《知》は、外界のあらゆる情報知識の集合部で、《情》は、五官が感知

する感覚要素の集合部で、《意》は知と情の葛藤や調和のさまざまをまとめあげ全体のワク組み決定を行う統轄部だ、と考えたらわかりやすいでしょう。

そして大人になるに従って膨大な形の知に関する測定系、情に関する測定系、意に関する測定系が出来上っていき、また、知と情の関連比較の測定系や、知・情と意の関連系など複雑多岐ないろいろ違う次元の測定系が数限りなく構成されて、心というものが成り立っていくのです。あちらで比較したものと、こちらで比較したものの、それぞれの結果を更に測定比較する測定器というように、それこそ科学がいくら進歩しても、人工ではとても及びもつかない複雑精妙な機械以上の機械として、ひとりの人間の心というものが作られています。

### 生理に支えられた情緒

しかも、人間はなにもかも有機的に組織され構成されたもので、先きの例えでいえば、測定器が測定器を作りだしていくという形で生成発達したもので、有機的に常に内側から変化を続けている統一体です。だからある程度成長してしまっただから、この子どもの知的な面はこうのばしてやろう、意志をこう強くしてやろう、という外からの部分的手当ては、ほとんど無意味な干渉となってしまう、そういう努力は徒労に終るのだと思われまます。

ちようど、人間が一本の大樹を作ろうと思えば、一本一本枝を作り、一枚一枚葉を作って、それを幹にひっつけたり、はりつけたり、つぎたしたりというやり方で作れるものではないの



と同じことです。

すばらしい大樹を作ろうと思えば、肥えた土地を選び、自然的条件を最高によくし、芽が出たらせつせと水やこやしをやる。それ以外の方法では、大樹の成長に人間は手をかすことが出来ない。樹の成長自体はあくまで樹の自動的活動によるもので、外から干渉出来ないのです。知情意のまだ未分化なころの、子どもの心の土台となるものが、《情緒》だと、わたしは思います。《情緒》のおかれているそのままだもひとつ基本の土台があります。それは《生理》だと思えます。生理とは、赤ちゃんが自然的生命体として生きて動いている生物体としてのしくみです。

《知》、《情》、《意》の基本は、赤ちゃんの時の《情緒》のあり方にかかっており、《情緒》は、生物体の《生理》の状況によって全面的に規定される。基本は赤ちゃんの《生理》のあり方だ、と思うのです。

すると、問題は基本的にどこに要約されるかと言うと、充実した一人の人格を作りあげるためには、幼木のまわりに堆肥をいかに与えるかが大樹を育てる基本条件であると同じく、赤ちゃんの生理的条件を、いかに生き生きとしたものにととのえるかが基本なのだ、ということに要約されることになります。

赤ちゃんの生理的条件がととのっているかないかを見きわめるのは簡単です。生き生きしているかどうか、ということだけで判定出来る。その判定の出来ない母親は、母親として失格です。

そして、母親の生理的安定がなければ、赤ちゃんも安定しにくい。母親の生理的安定には、父親、つまり夫も大いに責任のあるところです。みんなかわりあって微妙に、その総合結果が赤ちゃんの安定度にあられるから、難しい。難しいと同時にこんな愉しいものもない。

赤ちゃんの生理的安定は、たとえば、こういうところにあられるでしょう。  
深く大きな確かな呼吸をしているかどうか。  
気持よく激しくミルクを飲むか。

いらぬ時にどれだけ決断的にミルクを飲むことを止めるか。

手足の動かし方は強くはつきして、またあくまでも柔軟か。  
快便が出るか。

皮膚の色つやがよいか。

赤ちゃんの生理的状況がうまくいっているかどうかは、そういう明らかに目に見える形であられる。

生理的状況にひずみがあると、それは赤ちゃんの情緒の形成に決定的にひびきます。それは心の中の基本の天秤をいささかいびつな形に固定してしまうことにつながる。天秤が正しい測定器であるためには、はかり棒の質量がどの部分も一定で、左右の長さは、支点からピタリ同じでなければならぬ。棒の質量が均質でなく支点から物をのせる台までの長さに左右の違いがあれば、重さの違うものによって天秤がつり合ってしまいます。それが基本の誤りです。

世界のメートルが正しいメートルであるために、かつてイギリスに大事にメートル原器が保管されていて、それが狂ったら、世界中のメートルが狂うと考えられたように、赤ちゃんの心の天秤は、いわば、一生のバランス感覚の原器なのです。それが狂ったら全部狂う。

将来、広く深く豊かに生き生きとしたバランス感覚で充たされて、限りなく成長出来る大人になるためには、赤ちゃんのときの生理が広く深く豊かに安定していなければならぬのです。安定した生理に支えられた情緒というものは、どんな形で目に見えるかというと、たとえばこういうところにあられるでしょう。

快不快をはつきりとあらわすか。

いつまでも未決着なぐずぐずした気分が残らないか。

笑顔は大きく豊かか。

泣くときはあけっぴろげな強い激しい泣き方をし、びったりととまっすぐ機嫌がもどるか。  
寝起き寝ざめがはつきりとしていて、機嫌がよいか。

いつも充足した満足したようすを見せているか。  
嫌なことは嫌だときっぱりしたようすを見せるか。

わたしはよく赤ちゃんを、あぐらの中に入れてたり、いっしょに顔を寄せて寝ころんだり、サークルベッドの上から顔を近づけてのぞき込みながら、声をかけました。《ことば》で話しかけたのではなく、声をかけたのです。赤ちゃんは、ことばの意味は了解出来ないけれど、かけた

声の気配でこちらの気分を的確に洞察します。気分のない声には気分のない態度で反応をかえしてきます。

赤ちゃんの満ちたりた顔を見てみると、こちらが満ちたりて来ます。こちらが満ちたりると赤ちゃんもいっそう快哉をほとばしらせます。この豊かな気もちのひろがり、赤ちゃんの心の測定原器を精妙で狂いのないものに幾度も幾度も調整しなおすためのゆとりとなるのです。

たとえば、だれもまだ来ていない昼間のきれいな銭湯のなみなみとゆれているお湯につかれ、気持よくて、なんだか歌にならないうなり声、うわわんとひとりで出てくる。あんな感じに、赤ちゃんの機嫌のよいのを見れば、こちらが気分がよくなって、うわわんとなにか声をあげてしまう。すると、赤ちゃんもまた鼻うたのような声を、出しはじめる。こちらと赤ちゃんとが、ひとつの共鳴体になっているのです。こちらがひびけば、あちらがひびく。一緒にひびく。他人との連帯などというものの原初がこうしてその時に作られてもいきます。規約による連帯でなく、情緒の共鳴という形で……。

この快感の共有は、切実な深さに心の中に根をのぼし得るものです。情緒の基本の安定が、親と子の心の反映のし合いで作られていくのは、そんななんでもない場面の積み重ねによるものです。

わたしは前に一緒に暮した少年達の誰とよりも、敏感に素直にお互いの気持を受け渡す心のキャッチボールが、0歳の赤ちゃんと出来ることに感動し、人間存在のこわさに目を見はらせ

ておどろいたのです。

### ひずみの基本もまた〇歳で

大人になつたらわかるだろうとか、大人にならないとしてはいけないとか、子どもの感覚よりも大人の判断を優位に置くくらえ方が世間一般に多いのですが、子どもの心の反応の確かさは、大人などの比ではありません。

従つて、深く豊かに大人との反応のしあいによつて育つた子どもの心の安定と、そうでない子どもの不安定との間には、極端な差が出来てしまいます。

考えてみれば就学期になつて、子どもは学校教育に一律に入つていくという点で、みんな同じスタートラインに立つというけれど、それは決して子どもの発達を保障する条件の平等を証明するものではなくて、就学までに大変な差が出来てしまつてゐる。むしろ学校へ上つて、どの程度に教育や集団生活で自我を育て得るか、そのレディネス（用意）がどこまで出来てゐるかという点が大事なのであつて、その意味では、就学期は、大切な幼児期の終り、つまりスタートでなくゴールなのです。

心の中に出来る測定期にひずみが出来ると、自分の快不快さえも、自分では識別出来ぬ子どもになつていきます。

おしっこにぬれたおむつをできばきとさっぱりしたものに取り代えてやり、きりりと着衣を

ととのえてやり、ひしとだきしめながら、

「さあ気持がいいねえ。さっぱりとしたねえ。さあさ、これでおしまい」

などと次々に言葉があふれでて、赤ちゃんにほほずりをして、赤ちゃんの満足を存分に引き出し、愉しさを共有したら、子どもはたしかに満足した上で、ほどなく、今度はだきしめられる窮屈さを感じはじめだろう。さらりとベッドへおろしてやると、キヤラキヤラと声をたてて喜ぶ。そういうやり方で、ぬれていないおむつを喜ぶ感覚を赤ちゃんは確かにしている。

ところが、もしも、おしっこにぬれたおむつを長く代えてやらない習慣になると、おむつをさっぱりしてもらおうことの快より、ぬれたおむつのじんわりぬくもる感じの方に慣れを感じ、しょんべんくさいにおいを別になんとも思わなくなってしまい、おむつが気持悪いということでは泣きもしくなってしまう。これは集団収容施設や赤ちゃんをかまう余裕のない家庭でよくあることです。

不快なものを不快と思わないようになった子どもは、それはそれなりに済んでしまいかとうとそうではなく、ゆがみがいろんな別のところに出てきます。

施設の子どもは勉強が出来ない、落ち着きがない、とよくいわれるけれど、それは、すでに施設に入る前から、赤ちゃんの時に、情緒の安定した状態を作ってもらっていないからだといふことが、この頃だんだん明らかにされつつあります。

第一、非常に曖昧な形で親と離れてしまっているという現実の事態が、心によけいな底深い

不安やこだわりを作っていることは明らかです。

集団施設にいた子どもが、里親家庭に受け入れられたとき、よほどの期間にわたって《取り込み》の行動があらわれることがよくあります。なんでも自分のものにしたがるのですが、それが際限もなく続く。自分で食べられるはずもない量を、まだその上にもっともっとと要求する。

食卓の上にあるものを、自分の小皿の中のものに腕がこいしてひとに取られまいとしながら、食卓の真ん中の大皿から、なおもどんどん自分の皿に取り込む。

「いくらでもあるのよ。食べ切れないから、自分のお皿の分を、ゆっくり食べてから、お取りなさい。ね、わかった？」

などと注意しても、全く聞かぬふりか、それとも、ちらっとすごい敵意の目で一べつするだけで、ますます身をかためて意固地になって、あるいは、にこにこ愉快そうに、一人でよろこびの世界に耽溺しているという感じで、取り込み続ける。

おやつでも、自分の食べられる分量というのがまるでわからない。多ければ多いほどよい。到底食べられそうにない量を要求して、空のおもちゃ箱の中などに、ため込んで、絶対に人にはわけてやらない主義で、いつかほとんど腐ってしまっている。別に、腐ったり古くなって食べられなくなっても、今度は逆に、さほど惜しいと思わない。手元にたくさん保管し得ているということだけで、心が安心している。

欲望にとめどがなくなってしまうという事は、自分の欲望を測定し、自律的に調整を測る心の中の測定器が、基本の測定原器が、ひずんでいるからだ、わたしは思うのです。わたしは、自分の赤ちゃんにつき合うまでは、このことが、はっきり主張し切れませんでした。

よく、聞きわけがないといって、子どものことに腹を立てる親をみますが、みんな、それ以前に心の中の測定原器を精妙に正しく作れるような配慮を、親がととのえてやらず、従って、原器に狂いが出来、その結果として、聞きわけというよりも、自分の欲望の測定が自分自身の測定器によって測定出来ないようになっていく。聞きわけがある、ない、というと、その時に親が聞かしてやって、それを分ろうとするかしないかは、持って生まれた素質だと考えているような言い方です。常識的な子育ての認識が、どれほど、子どもの心の発達のしくみとはずれているかということが、この言葉づかいひとつとってみただけでも明瞭にわかります。

第一、今まで書いてきたように、快、不快の共有、共鳴こそが、子どもの測定器の調整上必須であるのに、聞きわけがないといって、親がつんつんおこっているのは、全く測定器のひずみを助長する悪循環に加担していることになるわけです。

欲望というものは際限のないものだ、というのがこれまでの世の中の常識であったのではないでしょう。わたしは、赤ちゃんをみていて、これをやすやすと否定することが出来るようになりました。欲望というものは際限がない、というのが自然の姿であって、それを自制してこそ、人間的といえるのだ、などと人に言われると、どうもそれはおかしい、と云っても、そ





れは間違っているとは、言えなかつたのですが、いまは違います。

つまり、欲望には限りがある。情緒の安定を測りさえすれば、欲望の限度というものが心で測定され、自然に欲望は限度内でおさまるものだと思います。「自制する」というような、いやでもどうしても無理をしてこらえる、という感じのおさめ方でなくて、自然に欲望が充足するとは、たりととまる。無理がないのです。心の測定原器にひずみがなければ、そうなるのです。

0歳の時に、自分の気持次第になんでもさせ、こちらの判断でいけないこと、させてならぬことは、ピタッと禁止し、子どもに不満な様子があれば、やがてはそれを自力で超えそうなときは、超えるのを待ってやり、不満や緊張が度を超えているな、と、その表情から読み取った時は、出来るだけこちらが手を添えてやる。そして、大事なことは、赤ちゃんの充足がよみがえるまで、こちらがつき合ってやる、ということ。といつても、それは、泣いている赤ちゃんを、泣き終えるまで抱いてあやし続けてやるということではなく、あ、この泣き方だと、自分で泣きやむまで放っておいて、待ってやるのがいいなと思えば、全くこちらが手を出さずかまいつけずに、放っておいてやる。いつか気嫌よくなってブバブバなどと声をたておもちやをさわりはじめた、という様子になったら、その気嫌の良さをさりげなく共有してやるということ。どう具体的にするのかというと、すつと横へ近づいてやって、赤ちゃんの気嫌の良さにつられてこちらが、嬉しくなってしまう。思わずほほえんで、ご気嫌よしにこちらがなり切ってしまったって、目を細めて遊びを見守る。ひょいと持って遊ぶおもちやを落としたり、

さらりと自然な態度で拾ってやる。「横に大人が来たな」という感じではなく、「愉しさが倍加したな」という感じを、赤ちゃんが心に抱くような、手の添え方、心の充ち足り方、を、こちらが工夫してやる。……そういうことです。その時に、変に、さかしらに、お母さんが、

「そうなの、よし、よし、ご気嫌がよくなったの。今泣いたカラスが笑ってるの。おりこうさんね。いい子になったから、お母さん、遊んだげましょね。泣いたら駄目なのよ。ね、わかった？ね、わかったわね」

などと、しゃべり立てているのは、あれは全くの全くの蛇足というものです。へびには足はないのですが、へびにご親切にも足をつけてあげようといつてきかない。へびはほとほと押しつけの親切に困ってしまう。あのたぐいの不用な押しつけです。第一そんなことを言っている親は、全く、子どもの気嫌のよさを共有していない。いやご自分はほんとは共有しているとしても、赤ちゃんには、その気持が伝わらない。せつかくの気分にはイチャモンをつける嫌味な存在、と思ってしまうでしょう。

……いつもいつも、赤ちゃんの充足や満足の様子を確認し、もし、不満や抑圧が自分で超えられない様子を見せていると、いろいろと心当りの原因を排除してみても、赤ちゃんの充足がよみがえったのを認めて安心し、まるで疲れた五体をたっぷり湯ぶねにつけたときのように、こちらが快哉のうなり声をだす。すると、それに赤ちゃんが共鳴して、わおわおと、無意味音をあげて、まだ寝がえりも打てないのに、手を振り足をあげ、背をゆすらせて自らの快哉をほと

ばしらせている。……わたしは、時間のある限り、朝も晩も休みの日も、仕事から帰ってくるとうも、なにもかも忘れてそんなことばかりに熱中した。もちろん、これまでの説明でおわかりのように、ずっとつきそってやってやったのでなく、必要な共感をその時々々に味わうことに懸命になった、ということですよ。

そういう一年は、わたしにとっては決定的に深く重いものでした。

わたしは、ムスメに救われた。人間というものを見る指標を、ムスメに与えてもらったと思うのです。

## 第八章 厳しくするか、甘やかすか

### 一人びとりの付和雷同性

乳幼児期の親子関係が、人間の一生においてもっとも大切だという考えを、前章にひき続いて述べていきます。

最近ますます乳児、幼児の時期の大切さということが言われていますが、それが一体どういうことなのか。大切だというなら、なにをどんな風に大切にすべきなのか。それが少しも具体的に はっきりとは、されていないように思えます。

乳幼児期の大切さというと、多くのお母さんは、早期教育の必要性のことだと、短絡的に判断してしまふ。子どもにはいつから教えるのがいいのでしょうか、という質問がかえってきってしまう。なんだか、一日も早く、子どもに学校の勉強のようなものを教えた方が、子どもは将来、人生の競争で勝つのだ、と考えてしまつていたりする。

「うちでは、小学校へ上る一年前から、一日一時間だけは、勉強机の前にじっと座つてお勉強

させる習慣をつけておられますの」

というようなことを、何の疑いも無く満足気に、すらすらと言つてのけるお母さんがいます。これが、しかも、現実にはそれほど奇妙な特別変つた例とも思えない風潮になってしまいました。

お題目だけがまかり通つて、これがよいのだという風評がマスコミで紹介されたりすると、われもわれもと競つてその波に乗る。自分の判断で吟味しない。そして、もしも乗りそこねたら生きた心地がしない。不安にさいなまれる。その付和雷同性には全くへきえきします。わたしの感じる限り、わたし達の社会はずっとずっとそんな形で続いてきました。

物事の意味を自分で考えるということをしなない。みんながやる形や型だけを自分も模倣する。ひとびとの付和雷同性が、社会を悪くするのです。世の中を悪くするのです。人間個人の心を貧しくするのです。

実は、その付和雷同の傾向こそが、「乳幼児期の大切さ」に気づかなかつた過去の育児の、見事な結果、見事な結実なのだ、わたしは思っています。

「付和雷同」つまり、ひとの意見にすぐ乗つてしまふ。むしろ、乗らなかつたら不安でたまらないというのは、言い換えれば、自分が無い、自分の考え方というものを持たないことです。つまり、創造力や構能力がない。あつちの意見と、こつちの意見をつきあわし、自分の体験と他人からの見聞をまぜあわせ、自分としてはこうだ、という考え方を、創りだす、あるいは構

成し出してみる、ということをも、あまりにもしない。あまりにもしたことがない。人にあてがわれて、それでやって行けといわれたら、後生大事にそれだけを守っていく。それが間違っても悪いのは自分ではない、間違いを自分にさし示したひとが悪い。もっと言えば、間違いのまかり通る世の中全体が悪いということになってしまふわけです。

主体性の無さ。責任をよそにあずけてしまふ。これはとりもなおさず、自分をお粗末に取り扱うことに他ならないではありませんか。

そういう人びとの付和雷同性こそが、実は、間違つた乳幼児期を経てきた人間のゆがみの姿そのものに他ならないと、わたしは思うのです。

よく道端でお母さんが立ち話をする。

自分の子どもがかたわらでござと遊んでいる姿に視線を投げて、

「こうしているのを見ると、かわいいのよねえ。けど、ほんとにあきれてしまふわよ。言うことをほんとにきかないの。わたしをまったくバカにしてしまつて……。こつちが腹を立てて、カーッカーッとして怒り散らしてるのに、ヘラヘラ笑つて逃げまわつてるのよ。一体どういう気かしら。こんなんでどうなるのかしらねえ、大人になつて……」

「そうねえ、誰の思いも同じと違うの？奥さん。うちとこも同じよ。主人とよく言うのよ。こんなことで大人になつたら、一体どんな大人になるのやらなあ、て。……でもね、どこともなそういうことですよ。どうにかなるのよ、きっと。大人になつたらなつたで、案ずることな

いのやない？」

「そうやねえ、奥さん。わたしも、実はそう思ってたんのよ。ほら山川さんとこ、見てごらんさい。なんやかやと、奥さんがいってたけど、○中へ、トオルくん見事合格。なんせ、○中だつたらもう大学が保証されたようなものなんでしょ」

「なんといいたって、学校だけはねえ」

「そうよ。こういうご時勢ですもの」

「勉強だけはねえ」

「そうよ。勉強だけはしてくれないと」

乳幼児期が、どうであれば、将来どんな大人になるか。本当に、今まで明確にされて来なかったのは、そのところです。それを考えない。こんな、まるで取りとめのない、無意味な立ち話のコンニャク問答が、それぞれの自分の無さを、見事に表白しています。

### 直輸入アメリカ式育児

そんなことをとやかく言ってみても、乳幼児期がどうだから、大人になつたらこうなるなんて、そりゃ、せいぜい占いのようなものや。当るも八卦当らぬも八卦。あてにならないことはあんまりわかつた風に言わん方がええ。今までにさんざん言われたどんな未来論も当つたためしはない。人の一生のことも、わかるものか。



人びとは、そう思つて自ら考えるのをあきらめてしまった感じがします。

そういうえば、先の戦争が終つた直後、負けいくさの反省と、戦勝国アメリカ流の考え方の歓迎と、わたしはまだ子どもの頃でしたが、そのひどかつたこと。あれがもひとつ地についたものでなかつたのは、子ども心にも充分に感じられたものでしたが、戦争が終つて考えが新しくなつたから、これからはうまく行くと考えた将来像が、あとになつてこわれたからといって、もう考えることはやめめた、というのでは、それでは、まるで、天才バカボンの親父流のナンセンス漫画なみの浅薄さだとも、言うべきではないでしょうか。

戦後すぐの頃は、自由、平等、民主主義がとなえられて、その線にそつた育児論が、実にはなやかでした。付和雷同の親に育てられた人が付和雷同であるのは、いわばごく自然のことです。戦後の自由や平等や民主主義というものが、全く付和雷同的に人びとに迎えられたのも、いわば当然です。それに伴つて、戦後はやつたいろいろなアメリカ流の育児論がありました。それらも付和雷同的に、人びとがきそつて日常生活に取り入れようとなりました。

どんな育児論があつたかという、たとえ、こういつた調子です。

「これまで日本人は、子どもが幼いとき甘やかして、ちよつと大きくなつてから厳しくした。アメリカではそれがちよつと反対で、幼い子どもは厳しく、少し大人になると自由にさせている。これからはこれにならつて、わが国でも、小さいうちから厳しくしつけなければならぬ。背中におんぶすること、なにかといつとすぐ抱きあげてあやすこと、時と所を問はず乳房を

吸わせていることなど、最もいけないくせだ。こんな甘やかした育て方は国の恥だ。即刻改めるべきである。

赤ちゃんはサークルベッドに入れて、ひとりで寝られるようにしつけよう。哺乳びんでの時間と量をきめた哺乳は、母親からの分離と、自立性を促進する。赤ちゃんが泣いても、すぐに手を出さないことも大事だ。とにかく、今までわれわれがやって来たことを、全部反対にしたらいいと考えれば、おおむね正しいであろう」

実に安直な二者択一。二つあるうち、どっちがエエもんで、どっちがワルイもんか。そこをはっきりするということが、付和雷同社会に受け入れられるための要諦です。

こっちもエエが、時にはあっちもエエというたら、必ず、そんなエエ加減なこと言わんと、どっちかにきめてしまえ、ややこしゅうてかなわん、とどやされる。それが、付和雷同な人間同士のつきあいの原則だということですよ。(……こう言えば、ある人は、それはおかしい、と言いかも知れない。付和雷同とは、つまり、どっちがエエかわからんということでしょう、と。)確かに内心ではわからないのです。しかし、表向きは、どっちかにつかねばならない。今は、やりの方につく。付和雷同性社会とは、ほんとのところがわからなくても、表向きは黒か白かをはっきりしなくてはならない社会のことです。

だから、今までやってきたことに間違いがある、ということになったら、それでは、それをそっくり反対にしたら、正しいのだろうということになる。アメリカ風育児がよいということ

になると、それと対立的にとらえられた日本風がすべてアカン、ということになったのでした。勸善懲惡。エエもんは、何をしてもどうであつてもエエ。ワルイもんはどんなにどうであつてもワルイ。どっちがよくてどっちが悪いかをお上に決めてもらつたら、すべてその式でやつていく。これが、実は、民主主義の多数決原理と、ピツタリ重なつてしまいました。多数決できまつたら、それが絶対的に正しいもので、それに従わなければならない。それがつまり、民主主義だということになつてしまつた。滅茶苦茶な話です。

よく考えてみたら、自由と平等とは、全く対立し、永遠に反撥しあう概念ではありませんか。自由とは、言つてみれば「だれもかれもしたい放題」ということでしょう。平等とは「誰もみな同じでなければならぬ」ということでしょう。黒か白かをはつきりつけることによつて成り立つ付和雷同社会が、自由と平等の民主主義をとり入れたのは、あまりにも大きな間違いでした。自由と平等は本質的に対立しあうものなんです。その両方をすんなりとうけ入れて、さあこれであまく行くなんていつても、呑み込んだお腹の中で、二者は永遠に対立し、いがみあつていきます。どうもこなれが悪い。胃の中が変だ。お腹の中で戦争がはじまつている。こりや大変だ。どうも食い合わせが悪かった。どっちかひとつにしたらよかつた。自由だけをのどから指をつつ込んでとり出そうか。平等だけをのどから指をつつ込んでとり出そうか。それをきめるのにも、もめにもめて、なかなかきままらない。ところが、どっちかひとつだけにしたら、民主主義という名の榮養は、こわれてしまいます。自由と平等のだけき合わせ、その一組で、民

主義義という栄養が構成されている。さて困った。

付和雷同社会に生まれて、付和雷同社会に育った人びとは、対立する、といったら、必ず、人々が、A派とB派にわかれて、勝ち負けをあらそうことでしかないと考えてしまう。ところが、自由と平等によって成り立つ民主主義というときの自由と平等とは、互いに対立しあうもののだと言っても、なにも国全体が二論にわかれて、こっちが自由派、あっちが平等派、左右を決する天下わけ目の戦い、はてさて、自由が勝つか、平等が勝つか、勝負勝負、とやりあって優劣を決したら、事がおさまるといふ対立なのではない。

自由と平等とは、実は、人間個人、ひとりの心の内部で、一生対立し、葛藤しあうものに他ならないのです。対立自体が、民主主義というものを成立させるのです。対立をやめたら、民主主義はこわれるのです。

戦後の育児論が次第に崩れて曖昧になったのは、単純に何がよくて何が悪いかを固定的に決めて、付和雷同的にそれに従って見たものの、正直言って、どこかおかしい。人びとの無意識の本性が、どうも決められた二者択一にそっていかない。それがためだったのでしよう。

それは、戦後、民主主義がいつしか曖昧に崩れてしまって、民主主義的手づきだけが人々の生活を規制し、いまや何がよくて何が悪いのかわからなくなってしまったことと同じおかしさでしよう。

## どこもかしこも人間不在

人びとの付和雷同性は変りようもないので、いまではみんなそれぞれに、あくまでもどこまでも、何がよいか何が悪いかを、人に言ってもらいたい、示してもらいたいと思つて、目をきよろきよろ、ウの目タカの目、首をのぼして探しまわっている状態と、なりました。

西にいい塾ありと聞けば西に飛び、東にいい家庭教師ありと聞けば東に走るといふふうで、教えてもらうことばかりを求め、最終的には世間的にハクをつけてもらわねば、安心して生きていけないのだからと、みんなみんな浮き足立っている。

付和雷同性ここに極まれり、という有様で、原理原則論、本質論は、すべてうたかたの如く宙に消えて、今や現象のみを追いかける姿になってしまいました。従つて、あのアメリカ式、日本式の育児論もと言われなくなつてしまい、それとともに育児の本質を問う議論などしているひまがないのです。

いま、育児論が非常にはなやかなように見えますが、議論がはなやかなのではなく、育児法のハウツーものがはなやかに横行しているのです。人びとに論議のタネを提出しようとするのではなく、こうすれば万事うまくいくというインスタント技法を提出しているものばかりです。ところが、こういう時勢に、古典的な人もいるもので、わたしは、それにはちょっと驚きました。わたしよりも少し年上のある内科医夫婦には、子どもが無くて、里親運動を通じて、親の無い赤ちゃんを引きとつて養子にすることになりました。その引き取りのきまつた際に、そ

の内科医が、新しく一人の赤ちゃんの父親となるに際して、これは確かめておきたいと前置きして、こう質問されたのです。

「イトーさん、どうですか。やっぱりアメリカ式でしょうかねえ。それとも日本式がよいと思われませんか」

にこにこして悠々と、知的なもののわかりのよさそうな、姿形も立派なお医者者の風格でわたしに対しながら、そう質問したのです。わたしは、一瞬、答えられませんでした。

隣には奥さまが貞淑な形にちゃんとおさまって、ほほえみを軽く浮かべながら、主人の質問に答えるべきわたしに、視線を向けています。

実は、わたしは、いまさっき書いたようなアメリカ式、日本式の育児論というやつが、そう言う言い方が世間から消えてもう久しいので、この質問を受けた時、頭の中にはありませんでした。だから、アメリカ式、日本式、と言われた時、なにか大変高級な専門的な知識を確かめられているのだ、と錯覚し、うろたえたのです。

知らぬは一生の恥、聞くは一ときの恥ということわざが、四十前になってやっと身につきはじめたわたしは、恥ずかしさのこみ上げるのを覚えながら、敢えて聞きなおしてみました。

「アメリカ式、日本式といえますと……」

すると、その医師はそれに答えるまでもなく、医師としての落ち着きを見せながら確然と、しかし、心の内では少し曖昧気に、

「やっぱりアメリカ式でいいのですよねえ、小さい時にうんとしつけを厳しくしておかないとねえ。(と、そこで少し体を夫人の方にねじる動作で夫人をさし示しながら) これにも言っているんですが、本当に厳しく、ということ。しかし、これがどれだけやり通せるか。こいつは根が優しいものですから。(と、そこで夫人に向かつて) しっかりイトーセンセイのご意見を伺っておきなさい」

幼いうちは、厳しくするか、甘やかすか。こんな単純な二者択一論に、ベテランの医師ともあるう人が、いまごろ本気でとらわれている。これには、あきれて、びっくりして、こわくなりました。

これは、少なくとも人間関係のからまりで苦勞をしてきた人の、とらわれ方とは違います。医師という職業は、もっと人間をまるごと掴む修練の出来る仕事だと、わたしは考えていました。このひとりで、わたしは、医師にもいろいろあることに気づいたので。

わたしは、福祉の相談業という職業に身を置きながら、常々、人間の問題は、心身の全体の様子が洞察できるのでなければ、なかなか掴めないものだと考えていました。その意味では、自分がいかに相談業として他人の問題を把握する努力をしても、所詮は、ことばのやりとり程度で問題をとらえようとするしかない。そこへ来ると、医師という立場は、身体上の問題を、直接自分の手で確かめて見ることが出来る。エライ違いです。

その意味で、これまでもよく、わたしは、過去に社会福祉のケースワーカーをしていた妻

とともども、こう言いあって来たものです。

「もしも医者で人間的な人がいたら、人間個人の問題について援助する力という点で、ソーシヤルワーカーなんて、絶対にたちうち出来んやろなあ」

しかし、たくさんの人びとの体の診察をし、病気の治療に努めてきた以上、どんな医者だつて、人間の生きざまについての洞察が深く鋭くなるはずだと考えるのは、どうやら自分勝手のひとりぎめのようなものです。こんな安易な育児論にとどまっているお医者さんもいるのですから。

医者だつて、考えてみれば、今の社会のゆがみに影響されないはずはない。今のすべての社会構造や産業機構と等しく、医者の仕事もどんどん分化し、分業化されて、内科外科それぞれの中でも、肺なら肺だけの専門医、心臓だけの専門医などということになってしまつて、体のどこか一局所だけが対象で、心のあり方の問題など、二の次になってしまつてしまつて、いや心の問題なら精神科がある。自分は単に胃腸だけの担当だ、ということになってしまつてしまつてゐる。

すると、その反省として、あまりにもバラバラにほぐしてこわしてしまつた、一度全体としてひとまとめにして眺めなおす必要があるぞ、という反省が起つてくる。胃腸が痛むのと、心の中の何かのこだわりとは、決して無関係ではない。そこをはっきりつかまねばならぬということになる。そして、心身医学とか、心療内科とかいう考え方が、一方に起つてきて、心と身体つながりというものを、あらためてことごとく理論づけなければならぬようなことになつてくる。なんのことはない、「医は仁術である」というところに戻していく大事さに今更思



い当っているのであって、いま現実の医学は、人間存在をあまりにも浅くしかとらえなくなつた反省をはじめているわけなのでしょう。医師でありながら、あまりにも人間的事象の全体を掴まな過ぎる医者が多いわけです。

### 受容と拒否の二律背反

乳幼児の時期の人間関係というと、赤ちゃんにとっては、母親との関係がほぼすべてです。生まれたての赤ちゃんは、全く無力な存在ですから、なにひとつとしてお母さんの手を借りずに出ることが出来ない。赤ちゃんが自分で出来ることといったら、せいぜい、口の前に出されたミルクを吸うことと、呼吸すること位で、ほかにはなにも出来ない。一切合財、母親がしてやらねばならないわけですが、赤ちゃんは、泣いたりむずかたり、アオアオと声をたてたり、足をバタつかせたりして、意思表示をします。要求を発します。

「よしよし、おむつがぬれてるのね。はいはい、換えてあげましょ。そう、気持が悪かったでしょ。ね、ごめんごめん。あらあら泣いてはだめよね。すこし、かぶれが出来たみたいねえ、痛いでしょう。一度暖かいお湯できれいに洗ったげましょ。はいはい、ごめんさい。さあ、もうこれでおしまいですよ。さあもうこれでさっぱりしましたか」

などと、母親は、赤ちゃんの要求を察するのに一生懸命で、要求にこたえてやることに全力をかたむけます。この時期は、赤ちゃんにとって、母親は、全面受容、つまり、ハイハイとな

んでも願いを受け入れてくれる、見事なイエス・マン (Yes Man) です。

かくて、赤ちゃんは、なんでもかでも自分のことにつくしてくる母親の存在を、何ものよりも先に認知する、識別すると言われます。心理学の実験で、生後数カ月の赤ちゃんが、何に對して一番早く敏感に反応するかを確かめると、赤ちゃんの目の前に、何をもっていてもあまり目立った反応を示さないのに、紙に、二つの目を描いたものを見せると、赤ちゃんの表情も体もさっとうれしそうに動いて反応した。赤ちゃんが一番早く、ほかのものより先に識別するのは、お母さんの目なのだ、といわれています。

赤ちゃんのためを思って献身する母親の存在は、赤ちゃんにとって第一の必須の存在であり、母親は、赤ちゃんを全面許容するものだ、といっているでしょう。

この時期に、お母さんが、赤ちゃんの発する信号によって、赤ちゃんの要求を、どの程度まで察知するか、というのが、赤ちゃんの発達にとっての第一の分れ目です。たとえば、この泣き声は何を要求しているかということを早熟的確に見抜いて、その要求に對して適切な処置をとってくれる方が、赤ちゃんの生理的安定は深まる。するとすべての面の発達を促す体内循環がスムーズに活発になります。

「泣く」という一事をとってみても、泣くことは、赤ちゃんの心の要求を知らせる大切な信号のひとつですが、要求の内容、種別によって、泣き方がいろいろに違う。慣れてくれば聞き分けられるといいますが、慣れないものにとっては、なかなかそれがわからない。自分の子で

も、第一子のときはとまどいばなし、緊張のしつぱなしだったが、第二子となると、もうそんなふうなうろたえてあれこれやってみることをしない。すると、第二子の方がずっと順調に育つということが多いものです。

赤ちゃんが泣いている。おむつを換えてほしいのか。ミルクがほしいのか。抱いてほしいのか。眠いのか。寒いのか、あついのか。体のどこが悪いのか。おびえているのか、何かを要求しているのか。それを母親が察知しなくてはならない。また、泣くという事には、何かの要求を訴えて泣くのと、心身のバランスを泣くことによって調整しなおしている場合と、その二種類があります。後者のほうであれば、親がうろたえて、こうしてやったら泣きやむか、ああしてやったら泣きやむかと、いろいろやってみることがむしろ逆効果。泣かせておくこと自体が赤ちゃんにとって必要、ということになります。赤ちゃんが泣きたいときに、泣きたいだけ泣かせておく、そして泣き止むのを待ってやる、という事の大切さが、ひとり母親だけでなく、家族の皆が正しく理解出来ていなければならぬ。このことだけでも、赤ちゃんの要求を充足させてやることの難しさが、わかってもらえぬと思います。

とにかく、お母さんが、赤ちゃんの要求を全面受容していかに見事なイエス・マンになるかが、赤ちゃんの発達における第一の分れ目だというのは、まあ、以上のような意味です。

ところが、赤ちゃんが少し成長し、少し自分で行動することが出来るようになってくると、母親と子どもの関係は、形として随分違ったものになって行きます。

母親は、ことごとくにああしてはいけない、こうしてもいけないと、うるさく何事も禁止せざるを得ない。もはや全面許容どころか、生後十カ月ぐらいからの子どもにとって、母親は全面拒否のオニだと思われるかも知れない。

そこを引っぱってはいけないとか、それを口にいれてはいけないとか、そっちへころがってはいけないとか、あっちへ行っってはいけないとか、それをさわってはいけないとか。ああしてはいかん、こうしてはいかん。赤ちゃんにしたら、せっかく自分で何か出来るようになった。そこで勇んでなにかしようとしたら、ことごとくにイチャモンをつけられる。このイヤな奴。憎たらしい奴。：禁止、制止、拒否、反対、叱責。

親の側からすれば、階段をふみはずすことや、赤々燃える石油ストーブに近づくことや、ナフタリンをかじることや、机の角で頭を打つことや、ひもで首をくくることが、のどをつまらせることや、電気の差し込みで感電することからの防衛ではあっても、何の体験もない赤ちゃんにとってみたら、母親の拒否や禁止は故なき妨害。わが自由をはばむ権力の壁です。

そのとき、赤ちゃんの側からすれば、母親は、決定的にいわばノー・マンであるわけです。全面的なイエス・マンがガラリと一八〇度変って、全面的なノー・マンになってしまっている。この人生最初の二律背反。

ここに、人間関係の原初があります。

## 基本の情緒を共有し得るか否か

お母ちゃんは、好きか嫌いか。

好きだけれど嫌いだ。嫌いだけれど、好きだ。……これがすべての赤ちゃんにとっての、必然的な気持でしょう。一番いてほしいけれど、一番いてほしくない。受容と拒否の合一体。矛盾そのもの。愛と憎しみの統合体……その原初形態としての母子関係。

わたしは、うちにいた中学生達のことを思い出します。

たとえば、タカオも、母子関係の崩れを少年期にまで持ち越して、自分自身の心の制御が思うようにいかぬために、わたしのところへ来る結果となったのです。タカオの母親は、家庭内のゴタゴタと忙しさにかまけて、タカオをその乳幼児期によくみてやることが出来ず、それがふびんだと言つては、タカオのだめなところをかばいつづけ、役に立たず効き目のない言い聞かせを続けながら、ついにはグループの尻馬に乗って非行を繰り返すタカオを、どうすることも出来ないのです。グループで百貨店の万引きなどで引っかけたは、児童相談所においてらる。

相談員が何を問うても、おとなしくうつむいて、完全に黙つてしまう。当人は特に悪くはないのだが、誘われるとみんなのあとについていってしまう。困ったものだ。親の力では非行を絶ち切れない。家庭からも、その非行グループからも離してみよう、という相談所の指導で、タカオはわたしのところへ来たのです。

わたしのところへ来てからも、よく事を起しました。大きな事ではないのですが、よその鳩を手なずけて持って帰って来てしまうことなどがよくありました。みんなが作った鳩小屋に、いろんな鳩が、いたりいなかったり、数がふえたりへったり。あのまだらのは友達のだと言ったり、首の白いのは交換したのだとかなんとかかとか。どんなに少年達にたぶらかされていたのか、今だに、わたしははつきりしない。まあそういう状況の中で、タカオの悪いところが発見されて、今日はタカオに注意を与えよう、叱ってやろう、厳しく自覚を求めようと考えながらわたしは、家に帰ります。帰って部屋を見ると、タカオがいない。みんなに、「タカオは？タカオ、どこへ行った？」

と尋ねると、だれかが、

「タカオか？あいつ、さっき、出ていったのと違うか」

と教えてくれる。探しに出てみると、玄関の向うの電柱のかげに、タカオがぼつんとうつむいて立っている。自分の持って来た大きなカバンを持って、家を出ていく構えです。

わたしはそれを見て、びっくりしてしまって、

「おい、タカオ、どうしたんや。そんなかつこうして」

と問うと、タカオは口ごもってぼそぼそと、うつむいたまま、目を少しこちらへ向け、「おこるんやろ？ええねん。オレ、帰るから。家へ帰れんでも、どこへでもいくから……」  
「ばかなことを言うな。まあ入れよ。叱りはせんからとにかく家に入れ」

と、わたしは、それ以上、強い厳しい態度がとれない。

厳しく叱れない。対立しあったとき、その対立を超えていくまでの関係が作れない。これはダメだなあ、と、幾度も無力感に、わたしの方がうちひしがれたものです。

普通に出て来た親子関係なら、子どものダメな行動をとがめて、親は腹の底から叱ることが出来ます。親が厳しくすることが逃げかくれなしに子どもの心に食い込んで効き目があるのは、乳幼児期に、すでにそれだけの関係を作っているからです。

わたしは少年達と一緒に過ごしていて、厳しく出来る関係というものが、普通の親子のようには成立しないことの残念さを、骨身に沁みる思いで感じつくしました。

厳しさもやさしさも、受容も拒否も、なにかもひっくりかえすため、相対する二者の関係から、どちらも逃げない。逃げて、よそに、それにかわる関係はない。その覚悟が、人間関係を深める契機であり続けるものです。

二、三才の幼児が、母親に叱られて、火がついたようにおんおん泣いて、

「おかあちゃんなんか、死んでしまえ、バカ、バカ」

と言いながら、反射的にどこへ駆け込んでいくか。噛みつくように自分を叱り飛ばし、自分も口ぎたなくのしった、当の相手、お母さんの膝元へ、助けを求めてかじりついていく。

お母ちゃんなんか死んでしまえ、とわめいて泣きながら、お母さんの胸元へべりついていて、抱きすくめてもらって、涙もかわかぬうちに、平安の眠り顔。

あの時期にこそ、親の厳しさもやさしさも、子どもの心に食い込んで、ひそかに、心のもつて行き方というものを悟らせてしまうものです。都合がよければつきあう、都合が悪くなったらよその人間関係へと逃げていく、という性格構造は、どんな人間関係をも、結局は深めていくことが出来ない。まだ幼くて、ほかへ逃げていきようのない乳幼児期の親子関係の中で、子どもは、相手の心と、自分の心のつなげ方の基礎トレーニングをすることが出来る。母親がまゆをひそめたら、子どもの心もかげりにおおわれる。母親が喜びに輝やくと、子どもの心も天に向かつて開いていく。人間同士の情緒の共有が、そこから始まるのです。

親が、子どもの乳幼児期に、イエス(yes)と言うべきときにどれだけはっきりイエスといって、深々とした受容の態度を示せるか。ノー(no)と言うべきときにどれだけ厳然とノーといって、容赦のない拒絶を示せるか。そして、また、わからない(I don't know)といわざるを得ないときに、どれだけ自分に誠実に、卒直に、わたしはわからない、と子どもの前で表現出来るか。その程度と型の違いによって、乳幼児期の子ども達の生理と情緒の型がきまってしまうのだとわたしは思うのです。

人びとの付和雷同性の淵源は、子どもの乳幼児期の時の、親の不決断にある、といったたら、多くの人は、もっともらしいことを独断的に言うものだなあ、とお思いかも知れません。

わたしの主張は、わたし自身の感覚に従っています。

さまざまの互いに相反する事例を見聞きしたり、実際に遭遇して、わたしなりにそれらを統



合し、判断した結果、そう考えるわけです。

さて、ここで「決断」というのは、決断出来ないことならば、はっきりと「決断出来ない」と表現することを含みます。

幼児が、おばあちゃんの死に顔を見ての帰り、目を大きく見開いて、  
「どうして、ニンゲンって死ぬの？」  
と聞けば、

「それは、わたしにもわからない」

と、自分の思いの深さそのままに、丁度自問自答と同じ静かさで答えることは、人間というもの  
の確かさと不確かさを限りなく共感しあう出発点を作る、ひとつの大きな「決断」です。  
子どもと親と、両方を大きくつつむなにかしらの広がりの実感が、そんな時にあふれるもの  
だと、思いもします。そこにある情緒というもの……。そうです。親は子へ、すべての思考と  
行動の基底となる、ひとそれぞれ固有の「情緒」を、そんな時、知らず知らずの内に伝えてい  
るのです。

乳幼児期の親子関係の大切さは、学校のカリキュラムや教科書や授業の技術などというよう  
な次元で伝え得ないものだし、育児書の原則論などで表わせるものではないのだと思います。

親の情緒のあり方に影響されて、子どもは、人間の基本としての形が、就学までに、すでに  
ほとんど出来上ってしまします。

## 第九章 「よく育つ」ということの意味

どのように育ってほしいか

子どもはどのように育ってほしいか。わたしはどう考えるかを、この章に書きます。

わたしは、性格のよい子どもに育ってほしい。どんな性格が、よい性格と言えるのか。わたしはどう思っているか。それを書きます。

手もとにある子どもの学校からもらって来た通知簿を、試しに出してみました。

わたしは神戸市内に居住しているので、これは神戸市の教育委員会が作ったものだと思いますが、この通知簿に、《行動及び性格の記録》という欄があります。十項目のいわば《徳目》について、A B Cの三段階評価がなされるようになっていきます。この十項目の内容は、別に神戸市だけ特別ではなくて、ごく一般に、「よく育った子」とみなされるための目安が、こんな項目による評価の総合なのであろう、なるほど、と思わせられるものです。

ここにその十項目をあげてみます。

- ① 健康・安全の習慣（健康に気をつけ、安全に心がけるなど）
- ② 礼儀（服装、言語、動作を適切にし、まごころで人に接するなど）
- ③ 自主性（正しいと信ずるところに従って意見を述べたり行動するなど）
- ④ 責任感（自分の言動に責任をもち役目をよく果たすなど）
- ⑤ 根気強さ（さいごまでしんぼう強くやりとおすなど）
- ⑥ 創意工夫（進んで新しい考えや方法を生みだし、生活のくふうをするなど）
- ⑦ 情緒の安定（感情の変化のあらわれがはげしくないなど）
- ⑧ 協力性（人の気持ちや立場を理解し、力をあわせて仕事をするなど）
- ⑨ 公正さ（正を愛し、誘惑に負けないで行動したり、公平にやるようなど）
- ⑩ 公共心（きまりを守り、みんなのものをたいせつにするなど）

この十項目のそれぞれをABCの三段階に評価する。例えば、協力性（人の気持ちや立場を理解し、力をあわせて仕事をするなど）に、Aをつけ、公共心（きまりを守り、みんなのものをたいせつにするなど）にBをつける。ひとりひとりの子どもの評価をさだめていく。評価する方も大変でしょう。

わたしは、教師になるのがこわかった。なりたい気もあつた。なろうと思う気持ち半分、なれないと思う気持ち半分で長いこと迷ったあげく、やっぱり教師になろうと決心して勉強をし直したけれど、結局横道にそれて、教師にならなかった。教師になれなかった理由のひとつに

は、こんな大変な評価判定を、先生になればしなければならぬ。それがちょっと堪えられなかった。四十人の生徒一人びとりに、ABCABBBCABとか、ABBACCAACCとかとつけていく時の気持ちを思うと、やっぱり教師というものにならなかつたことがよかつたと思います。いや、別に、神戸市の小学校の先生になる、というつもりではなかつた。だから、必ずしもこの十項目をつけなくてよいのかも知れないけれど、どうせ先生というものは、性格や成績の評価というものと関係なしにはおれません。教師とは、辛い職業だと思えます。

礼儀はAだが自主性はCだとか、創意工夫はAで情緒の安定はBだとか、いろいろあるのでしようが、しかし、考えてみると、この十項目全部がA、という子どもはどんな子だろうか。点数や段階による評価で決めるのなら、もちろん最高点を取ったものが最高によい、ということになるでしょう。しかし、人間の良し悪しを、完全無欠が最高によいという風に決めてもいいのでしょうか。わたしにはどうもそうは思えないのです。

実は、うちの子どもが小学校へあがつてこの通知簿をもって帰ってくるようになって以来、毎学期この欄を眺めるとき、どうもきまって妙な気持ちになります。

たとえば、礼儀がCになっていたら、それを見たその子の親は、ああ、うちの子にもっと礼儀を仕込まなければ、と思いはしなないでしょうか。

そして、毎日ことごとくに、

「これ、ちゃんとあいさつしなさい」

「ああ、また自分の出ていったあとの戸をしめない、だめじゃないの」

「食事をしながら話をしてはいかん！」

などと、ガミガミ言うことになりはしないでしょうか。子どもの行動を、規範どおりの型にはめ込んで、生きた気持ちを殺してしまい、子どもを退屈な性格に仕立てあげてしまわないか。わたしは、礼儀、というときまって、ある日見た路上の光景を思い出すのです。

三、四人の幼稚園児が、先生に引率されて帰っていくところでした。一人づつ送ってまわり、それぞれの家の前に来ると、その家の子はくると皆の方を向いて、あいさつをします。それをちようど目撃したのが忘れられないのです。

「センセー、さようなら」

と言いながら機械的に腰を折り、

「みなさん、さようなら」

と続けてもう一度腰を折ります。すると、それを受けて先生と残りの子どもが、

「カツオくん、さようなら」

と、その子の名を入れて返して、同じくいつせいに腰を折ります。米つきバッタという言葉思い出しました。その機械的、慣性的な絵空ごとなしぐさの、無感動さ、無意味さ。あれで、別れのあいさつを覚えたとして、もしもどこかで誰かとの別れの際に、これらの子どもたちがたったひとりだけで、これと同じ別れのあいさつを自発的にするでしょうか。そんな不自然な



ことが出来るわけがありません。一斉朗読のようなあの間のびのしたフシをつけてあいさつなんかやれるものではない。

あとで聞くとところによると、ああいう風にひとりびひとり家へ帰って行って、最後のひとりになった時、その最後のひとりも、先生の方を向いて、同じく、

「センセーさようなら、みなさんさようなら」

と二度頭を下げる。「みなさん」と言っただけで、もうみなさんは先に帰ってしまったのですから、言っても相手がないわけですが、みんなにあいさつというものを平等にしつけるのですから、最後の子も同じあいさつを身につけるべきだ、と考えている先生がいるのだそうです。

#### 十項目は一つにつながつて

心のこもらないあいさつ。型どおりのあいさつ。目の光りが死んでいて、相手と気持を通じあわずにおれないという願いや配慮とは全く無縁なあいさつの習慣。それがいきつくところ、外形だけ重んじて中味を軽んずる風潮を成り立たすのでしょうか。ポリエチレンだかビニールだかの青い葉っぱに巻いた桜餅や柏餅が平気で横行するのも当然だと思えます。

本質を忘れて、形だけにとらわれるような人間に育ってしまう。こわいことです。

礼儀と言え、もう一つ対照的に思い出すことがあります。

市内で最もガラの良くないといわれる地域の、傾いた古い長屋の一軒で、最もガラの良くな

いといわれる種類の神戸弁に接しているわけなのに、聞いていて少しも気持が悪くない。むしろ、気持が良かった体験です。

「しゃあからなア、まあエエやんかテ言うてやったんや。けどや、あれももう年頃になりよつてんさかいになア。そうも言うたらねへんねけどオ。ウチもやア、だいぶ元気になってきたんやシィ、まあなんとかやっていけんネやろと思てんのやでエ」

もしも地声を出しっ放して投げやりの調子だったらこれはまさに神戸弁の汚さまる出しです。この女性は、文字で書けばこの通りの言葉を使う。ところがその耳にひびくやさしい明るさがなんとも気持がよいのです。

礼儀を重んじ、言葉の正しさを重んずる人にすれば、これはもちろん落第でしょう。でも、自分のことを「ウチ」でなくて「わたし」と言うべきだとか、「…言うてやったんや」でなくて「言っただげたんです」程度に言いなおせとかいう細部の形の改変などにはどうにも関係のない、この女性のもとの心根のあふれるやさしさが、この野卑な言葉づらの奥に、すでに自然にあったと思います。

礼儀の型をしつければ、思いやりが育つでしょうか。いや逆に、思いやりの心が内であればこそ、礼儀の型も生きるのではないのでしょうか。型がなくとも、まず心です。型だけで色わけをしてしまい、奥の心のあり方がわからないということほど淋しく貧しいことはありません。「そうは言っても、礼儀とはまず型をしつけるものだ、それはそれで体験上、効果があったと



断言する！」

という反論もあると思います。

しかし、もし、しつけてうまくいくのなら、その場合は、しつけ方に心がこもっていたから、うまくしつけられたのでしょう。型を伝える時、型を伝える以上に、その礼儀を行えば心が安らかになる、その安らかさを、身についた態度で、知らず知らずに伝えていたのでしょうか。教えられる者が、型をのみ込む以上に、教える側の態度を見て、相手をなごんだ思いにさせなければならぬという気持ちをもみ込んだのでしょうか。

なににしても、先にあげた通知簿の項目のような徳目は、ひとつひとつ形で与えたり、与えられるものでなく、その奥のこころのあり方が基本として、もっともたいせつなことでしょう。公共心というものを育てようとして、一斉に公園の紙くずひろいを正課の教科内容として何度かやってみても、それで公共心がつくわけではない。

こうすべきだ、ああすべきだと、あれこれと努力させ強制し、その結果、礼儀もA、責任感もA、先の十項目全部Aになった子どもがいたら、それは怪物だと思うのです。もしも、一日二十四時間、責任感を持ち続け、一日二十四時間、礼儀正しい、ということが、このAという評価の概念規定になっていて、その通り、全部Aの子がいたとしたら、それは怪物です。どこかでおつりが出るでしょう。かくされたウラというものがなければ、とても人間の子ではない。そう思うのです。……と思う一方、それならこんな徳目はどうでもいいと思うかと問われたら、

とんでもない、とわたしは答えます。

ただこう言うことが言えると思うのです。

つまり、礼儀なら礼儀だけをよくしつけ、礼儀だけがAとなっても、公共心がCというのであれば、礼儀のAはウソのAだと。その意味では、この十項目は全部つながって、結局はひとつのものなのです。

公共心につながる礼儀などはないはずだし、礼儀の心のない人間が他人への協力性は、発揮出来ません。人に協力出来るのは、また、その人の自主性のあらわれでなくてなんでしょうか。しかも、その自主性を支えるのは、責任感です。責任をあくまで果たす意欲が、つまり根気強さであり、根気強さというのは、本当は内心の創意工夫によって強め得るものなのに違いありません。そして創意工夫のない健康と安全の習慣は、せいぜい薬害のえじきになるか、町角の信号をこれ以上やすかに役立ただけであって、それもこれもみな、根本的には自らの心身をシンから統括する自律作用として働くべき情緒の安定があるか否かに、かかってくるのではないでしょうか。

つまり先の十項目は、情緒の安定が基本にあってこそ、芽づる式に内側からみんな備わっていくものだと思います。

「完全」がよいのではない

それなら十項目みんなAというのは、やっぱり最高によいということになるのではないかと  
いわれると、そこが大事です。考えを深く持たねばならぬ大事の要点はここです。

わたしは評価としてのAをもらうことなど気味が悪いと思うのです。どうということかという  
と、どこかでハメをはずさない常に礼儀がAであるという子どもは、オバケです。

健康と安全に心がけてばかりで、Aをもらうと、手が汚れるから、服をよごすから、けがを  
するから、などと気づかかってばかりで、ふつう子どものしていることの半分も出来ないことにな  
ってしまうでしょう。

公正だと信じていることだけをいつも言ったり行ったりするのなら、この世俗にまみれては一日  
も生きていけない。他人の不正を追求することがやめられず、すると、この国、この世界にあ  
る不正のなんと宏大無辺なこと、それにぶちあたっていくのは、まるで特攻隊なみの自滅が待  
っているだけです。

責任感がすぐれて強いひとは、世の中のやっかい事がその一人の肩に全部かかり、やがて圧  
し殺されてしまいます。その人ひとりが押し殺されて他のみんなは痛くもかゆくもない。

根気強いといっても、いつまでも無理頑張りをして、流動する人間関係に無関心でいたら、  
馬鹿とわられます。

創意工夫をしたいようにしたいだけさせてくれるところなど、この地上のどこにもありません

ん。純粹な創意というものは、たいていなかなか世間の評価を得ないものです。

協力性といっても、人のことをあんまり手伝いすぎてはいけない筈です。そういうのは時として人の責任まで盗んでしまう責任泥棒になりかねないわけです。

公正さというものが果たしてどこまで世間の大人に通用するのでしょうか。

公共心というもののだけを純粹に培うことは出来ません。子どもに身につけさせていても、おとなになつたら、おとな同士ではがし合いをしてしまいます。

そして、今の世の中の騒々しさは、人びとの情緒の不安定を決定的に表わしているのであって、子どもひとりだけの情緒の安定を、徳目として仕込める道理はないのです。

この世の中のもの、完全である、ということが、まづは出来ない相談だと思ふべきだと思います。完全だけを目ざしては、自滅あるいは独善の道しか歩めないように思う。自他の対応、そのバランス。開かれた平衡感覚。それはつまり、情緒の成熟……。情緒の安定と、その成熟が、最も大事だと思ふのです。

わたしは、あるところでは礼儀がAであり、半面どこかで礼儀Cというところもあるのが、人間のどうしようもない姿であり、いやむしろ、あらゆる時、あらゆる場合、あらゆる人間関係を大事にしたいと思う以上、そうであらざるを得ないのであって、例えば、だれか人と対峙合っていて、その相手が、こちらを判定しかねてしまう。礼儀Aだな、いや、あんなことをいって、礼儀Cかな、いや、ちゃんと見事にもとに戻って礼儀やっぱりAだ、いやBかな。Aと

いうべきか、Cというべきか、でもとにかく気持ちが悪くない。お互いによく心の動きが了解しあえた。この人とだったら今後なんとかつきあっていけそう。というような、矛盾をいっばい含んでいて、しかも、認め合いのきっかけらしきものに満ちあふれてもいる。そういうものであればいいと思うわけです。

ここと思うところでしょうか。気が抜けていっばいダメなところがあってもいいのではないか、と思います。でも、ここと思うところでちゃんとやれて、ほかではダメというところ、なんだかカゲヒナタのあることを奨励しているみたいで、ちゃんとしたひとから叱られそうですが、しかし、臨機応変ということも、生き方としては美徳のうちです。臨機応変とカゲヒナタとは、どのように見分けるべきでしょうか。その境いはどこにあるのでしょうか。人生の途上、いつなん時、パツとある事が展開して、それに処する自分の態度として、こうすることが実はカゲヒナタのあることだと批難されるのか、あるいは臨機応変だと評価されることなのか、さあ、どっちかわからない、という迷いに行くわすことがあるかも知れない。その時は、突嗟に、自分の感覚できめなくてはならない。そこで事をきめるのは、その時までには作られてきたその人の平衡感覚、バランス感覚です。情緒の方向といってもいい。それが、本人の無意識のうちにかチンと動いて、とるべき方向を示す。そのあたりのバランスを測る機能というものが心の中に発達成熟していかないといけないわけです。それが情緒のあり方によっていわば決定づけられていて、その情緒というものの基本が、また、前章で述べたように、0才の時の母子関

係にかかっている。わたしはそう思うのです。

臨機応変はいい事とされ、カゲヒナタがあるのは悪いとされる。しかし、実際のところどれが臨機応変で、どこからカゲヒナタか、その境界が判然としない。そこを間違いながら、しくじりながら自分で判断し見分けをつけていく。そこが生きることのおもしろさにつながるのだと、考えたいのです。

自分のことを言うのは、言えば新しいわづらしさがある生みだされるようで、気はずかしいし、嫌なのですが、いちばん手っとり早い現実例として出してみると、うちのムスメなどときに礼儀なんてメチャクチャ。オヤジ、つまりわたしと、パンツの抜がせっこをしてころげまわるし、親子で悪口雑言のつき放題。言いたい放題。……といっても、積み重ねた自然の呼吸で、相手を軽蔑し合ったままで終る会話はしない。それに、わたしの方で仕事や来客があれば、ムスメは全くわたしのことには無関心。入って来て邪魔する、しゃしゃり出る、干渉するということはありません。そのへんはもうなんの意識もない位に以心伝心です。逆にムスメの方がなかに夢中になっているときには、今度はこちらが全然干渉しない。知らん顔で、わたしが横を通りかかっても妨げはしないという、向うに安心があります。

どちらかが何かに懸命になっているときは、チラリと思いがけなく通りがけに視線が合っても、互いに他人の目つきをしてそれで当り前、という感じですよ。

お互いに交しあうことばのやりとりなんか、時々、ひどいものです。この間もわたしが、出

張して三日ぶりに帰って玄関をあけたら、気配でバタツと立って来て、バァーッとふすまを開け、なんの表情もみせずに、台所の妻に向かって、無雑作に伝えるのに、

「なんのヤクにもたたんオトコが帰ってきよったでエ、おかあさん」

それに対応して、わたしが、

「ふん。このガキヤあ、まだこのうちにのさばっとるのかい。ほらどっこいしょ」

これが出張帰りの親と小学生のムスメのあいさつというわけで、にもかかわらず、通知簿の例の十項目の中の礼儀の項に、たまたまAがついていて、ムスメは、

「礼儀のAはいやですよん。実際との差があんまりありすぎるのよー」

とって笑いころげています。ひとにはいやらしい親子だとも、気楽ないい親子だとも言われそう。どちらもあたっていると思うわけです。親子で、緩急自在に呼吸をあわしていく訓練だけは、こうして不断に続いています。

文字で表わした表現からはこぼれてしまうけれど、どんな対応の型であるにしても、その場にいる人々に共通の情緒があり、生きたみずみずしい対人関係の緊張が流動する限り、人間の関係も個人の内面も、強まり深まっていくものだと思います。

### だれともうまくやっけていける条件

対人関係に必要なのは、お互いの情緒のひろがり、言いかえれば了解範囲の限界を、察知し

合う感受力であり、ここまでのことは言える、これ以上は、言うとは誤解やずれが起りそう、というその限界を確かめ確かめ、そのひろがりをもう少し拡げる、もうすこし深める、その努力とか意欲を常に快いものとして認め合う事です。そしてその事の基本のトレーニングを、ひとは0才からの親子関係の中において、知らず知らずそれなりに履修してしまっているはずだと思ふのです。

他人が迷惑していることに気づかないこと。

集中する愉しさが味わえないこと。

利欲、それも当面だけの利欲に緊張してしまふこと。

自他の区別が出来ないこと。

逆に、常に自他をへだてすぎてしまふこと。

能力が発揮出来ない、伸ばしきれないこと。

美しいものに魅かれる動機を持たぬこと。

いつも不満のかたまりで不幸感にとらわれること。

以上のようなのを貧しい人格というのだと思えますが、頭のひらめき、つまり知力、数学的な頭というものまでも含めて、人の性格と能力のすべての土台を作るのが、乳幼児期に作られた情緒の、その人なりのあり方だ、と思ふのです。

ムスメが二年生のとき、一年下の男の子を連れてわたしの友人がやって来て言うのに、



「うちのキヨシはだれとも長く遊べないのや。ひとりっ子の宿命かなあ」

と、大げさなことを言う。

うちのもひとりっ子です。ひとりっ子の宿命なんて、そんなきめつけは困ります。

その日、そのキヨシくんと、うちのムスメ、マサコが、むこうでいつまでも仲よく遊んで、こちらへ一度も来ないのでした。

それでキヨシくんのお父さんは、大人の歓談からひとり抜けて、子ども二人の遊びをかたわらで眺めて、半時間もしてから、こちらに帰って来て言うのです。

「まあなんと、あれやったらいつまでもうまく遊べるはずや」

遊びの様子を、次のように彼は話しました。

「マサコちゃんが、スゴロクをしようと言いだしたんや。すると、うちのキヨシが『どこにあるの?』と聞きよる。見ているぼくも、さてスゴロクの用意は、と自分で心積りをはじめている。せっかくやろうと言いだして、その用意がなかったら、子ども達はごねるだろう、早手まわしに用意をしてやっておかねば、と、つい、親の方が考えてしまうわけよね。」

ところが、マサコちゃんが、『そんなもの、ないのよ。これから作るのよ』と、平気ですまして言ったので、なるほど、と、ぼくも思ったね。そして黙って見てたわけ。

パッパッと、新聞の折り込みの広告をウラにして机にひろげ、『ホラこうして順番に書いていくのよ』と言いいい、たちまちお手製のスゴロクなるものを作りはじめた。うまくいくのか

知らん、と見ていてハラハラよ。

⊙は一回休み、⊙はふりだしへ、なんて、勝手放題にマサコちゃんを書いていきよる。ときどきキヨシに、『ここも一回休みにしようか』なんて、同意を求めるから、キヨシはわからないなりに、なんかわくわく、共同の思いきった企みごとの気配が二人に充滿して、『ウン、ウン、そうしよう。じゃあ、ここはどうする？』などと、わかつたらしい言葉をかわして、エライ調子づいてるわ」

キヨシくんのお父さんも、おもしろくて、体を乗りだして、でも、手を出さずに、成り行きを見守っていたそうです。

「もうスゴロクの盤が出来上りそうやと思うと、横で見ていたぼくは、次には、サイコロがほしいと言いだしよるぞ、と気になりだした。さて、サイコロ、サイコロと、二人を見ながら、しきりに心積りをしはじめる。せっかくここまで事が進んだのに、スゴロクで遊ぶにはサイコロがいる。サイコロがないーっといって泣かれたら、それこそかなわないなあ、と気にしている、マサコちゃんが、『さあこれで出来たわ。次はサイコロよ。サイコロはこうして作ったらええやないの』といって、さっさと画用紙を持ち出して来た。なんとまあ、気楽なもんや。子どもがそんな簡単に作って、どんなサイコロが出来るやろ。あきれてぼくは見てたわけ。



無雑作に引いたユガミチャンコの線を気にもせず、おぼつかない立方体の展開図らしいものを考え考え書きあげて、ハサミ、ハサミと促すと、キヨシは上官の命を受けた伝令のように、

敏速にパッと立って、ホイ、ハサミ、ハサミ、ハサミ、と言いいい向うからハサミをとってきて、マサコちゃんに差出す。マサコちゃんは手許も見ずにハサミを受けて、図をにらみにらみ、シャキシャキと切り抜いて、折りまげて、立方体らしき形のものを作り、のりしろのいるところを、セロテープで、ぎこちなく雑に張りあわせて、六面それぞれに一から六までのチヨボを、マジックで画き込み、またたく間にマサコちゃんのサイコロが出来てしまったよ」

「ホラ、出来たっというって彼女がそれをころがすと、ガタガタあっちゃこっちゃゆがんでその大きな紙製のサイコロがころがって、四の目が出た。それをうっとり眺めていたキヨシが、休めた手先を、ハッと我に返って忙しくたどしく動かす。……実は、マサコちゃんの手元をうらやましげに見ていたキヨシは、そのうちに、ぼくも作ろう、と勇み立って、マサコちゃんの間を見い見い、画用紙に線をひき、マサコちゃんの手元をまねて、シャキシャキとハサミでそれを切り抜いていった。それが、六面体の展開図になつていなかったもので、ぼくは、あれ、ここで暗礁に乗りあげるかな、と思つてどきどきしてしまふ。あんなものでサイコロが作れるかいな。と、ぼくは思わず手を出そうとした。キヨシは人がやれることで、自分がやれない時には、すぐそのあたりに、しかけたものを放り出して、みんなの気分を妨げてしまうので、それをとめなきや、と思つたわけ。でも、いつもと、この場面は少し様子が違う。見ておいてやれと思つて、気持を押しとどめた。キヨシはまだ自分のしくじりに気づいていない。そして、ハサミを動かしながら、『ぼくのサイコロ作りよるねん。ちょっと待っててな』と、意

気揚々としている」

「キヨシの作った展開図は、マサコちゃんのをまねたものやけれど、六面体にならない。つまり横の二面がない。たてに四面が帯状にのびただけの長方形の展開図。したがって、折ってハシをセロテープでとめたら、両側面はスケスケで、一から四まで四面しかないわけや。

さてあんなものではサイコロではないのや。マサコちゃん、困りよるやろな。それではサイコロじゃないよ、ダメよ、と宣告されると、キヨシ泣くやろな、どうするか、とぼくはハラハラしてたら、なんと、マサコちゃんがこう言っただけ。『アラ、あなたのサイコロは四までのね。アラアラ、それじゃ五と六はヤメってことなのね』と、いったと思うとねえ、さっき作ったスゴロク盤の、との指示箇所を全部、順々に消して行って、一から四までで遊べるゲームに変えてしまったんやでえ。『さあ、あなたのサイコロでやろうよ』と、マサコちゃんが言うて、キヨシが、生き生きと『ウン、やろう！』

まあなんと、二人の熱中。あれなら、けんかには、ならんわなあ」

……でたらめです。いいかげんです。でも思いやり、という以上に共感の中でことが展開しています。機転、柔軟。興味や関心がつぎつぎに転移する、生きた動きにさらわれない。遊びのリズムの自然な流れ。お互いの気持の共鳴、ひびき合い。相手の動きを批難しない、否定しない、妨げない。次々と行為を進める動機の連鎖的芽生え。熱中。集中。喜び。型にはまらぬ思いつき。型から発しない。現実の事態から発する思いつき。創造。情緒の共有。子ども達の

生きた世界の一例です。

どうせ、うちのムスメは、親がこんなに、過剰な評価をして、彼女のことを書いたのを読めば、もう今は小学五年になりましたが、おそらくわたしに軽蔑の目を向け、

「あんたはオーバーやなあ。いつでもちよつとべたべたしすぎるわあ」

と一言、言い捨てるでしょう。

でも、それに対する応答として、わたしは、

「そういうなよ。確かに、口に出したらウソになる。でも口に出さなきゃ、やっぱり黙ってられない。言いたいところって、ここなんやもの。でもやっぱりなあ、口に出したらウソになつたぜ、ハイペービー」

とか、なんとか、道化師風に手上げ足上げ、台所のテーブルの脇でひとおどりでもして、ムスメに、もっとやれ、おっちょこオヤジなんて励まされて、その場のがれのケリをつけよう。

子どもの育ちの土台は、乳幼児期に作る。もう小学生となれば、その土台の上に、子どもは子ども自身の力でなにやら建造していく。その時、親は、身近かな傍観者でしかない。うちのムスメは、育ったなあ、と思う。ムスメについて、妻とわたしは根本的に心配がないと、いつもいつも話しあう。そして、話しあいながら、二人は暗い。暗い。

思うのです。わたし達が、過去に中学生達と暮した、あの頃の数々の失敗。わたし達の非力。彼等を犠牲にして、わが子ひとりではなくとか育てられたね。よかったね”

と、どこかで声がする。冷水を浴びた沈黙あるのみです。

ヒロシが、わたしの中で叫んでいます。

「イトーさん！オレらみたいなもの、もうみてやるなや、な！同じみてやるんやったらなあ！  
自分の赤んぼでもええ！ひとの赤んぼでもええ！赤ちゃんの時からみてやれや！な！」

## 終章 生きづらい、誰もみな……

### 自己規制して狭くかたい子育て

自分の子どもが生まれたのは昭和四十一年で、その年にわたしは、家庭養護促進協会という神戸と大阪で里親運動を続けている小さな民間福祉機関で事務局長として働くことになりました。

それからまる九年間、同協会を昭和五十年に辞めるまでに、種々さまざま人々の生き方、生きざまに接してきました。いろんな子ども、いろんな親、いろんな里親家庭。そして、いろんな世間というものの様子。この本では全くそれらに触れる余地はありませんでしたが……。

その仕事を続けている間中、「子どもを育てることの意味の重さ」について、感じつづけ、考え続けざるを得ませんでした。「親」が「子ども」を育てる。親がどのように自分の子どもを育てようと、それは親の勝手だ、ということをよく世間で言うけれども、見聞した結果の、わたしの思いは、逆に、少しも親が自分の思うままに子どもを育てていない、ということでは

た。

勝手どころか、みんな、なにかしらにあまりにもとらわれている。無意識に作られた心のワク。無意味さや害の大きさを再吟味して気づくことなしに平気で従っている習慣のワク。世間というものの正体をもひとつ高みから眺めてみないがゆえに、むやみと恐しくわずらわしい世間の目。

あれからもこれから、ワクづけされ規制され、ちぢこまって、親が子に対している。目に見えるカベ、見えないカベに狭く狭くとざされて、こうでなきゃならんと、考えもせず、頭から信じ込んで、いわば潜在意識という名の専横の権力者の、盲従の手下になりつくしている。

子どもはみんな不自由にいいじいと深呼吸ひとつ出来ないで、ちぢこまったままで子ども時代をすごして大人になる。わたしは里親運動という範囲内で起っていること、いわば、世間一般から見ると、普通ではない状況下の親と子の姿が、特に違った事情のために、変った形になっていく様子を見ていて、むしろ、これは世間のゆがみを映したカガミの中の映像のようなものだと考えるようになっていきました。ゆがみはカガミの中にあるのではなくて、世間全体にあるのだ、と痛烈に感じ続けてきました。

同時に、わたし自身も、自分の潜在意識のかたくなな専横ぶりに、挑みつけ、敗れつづけてきたのも事実です。自分のゆがみ傾いた姿を直視することは、辛いことですし、見るだけでも辛いのに、そのゆがみ傾きをたてなおそうとしてたてなおせない徒労のあとのくたびれば、



とてもたまらない。「三つ子の魂百まで」ということばの、意味の重さは、まだまだ明らかにされていません。わたしは、自分なりにそれを、自分の痛みとしてより明らかにしていきたい。自分を変え、世の中を基本から変えていくためのヒントが、そこにかくされていると、思いません。

「三つ子の魂百まで」の意味の重さを明らかにしていくことは、もちろんこれから生まれてくる赤ちゃんを、小さい乳幼児期のうちから間違つて育てないために役立つのですが、しかし、これから生まれてくる赤ちゃんだけに役立つのではない。いまずでにちよつと大きくなつた子どもにも、そして、もちろんどんな大人にも役立つと思うのです。つまり、「三つ子の魂百まで」の意味するところは、小さいうちによく育てなければ、一生がダメになる、ということですが、すでにダメになりつくして、ダメなままの一生を過ごしている大人が、乳幼児期から人間をダメにしていくからくりを知つたら、ますます絶望でしかないか、というと、決してそうではない。そのカラクリを知つたら、意外と、自分のダメさ加減を、つきはなして、客観視して、眺めてみることが出来るようになるのだと思うのです。

自分の弱点を、意地の悪いほどの冷静さで、子細に眺めることが出来ない限りは、そのダメさ加減とがなじがらめにからみあつたままのあわれな道行きから脱する手だてはほかにないでしょう。

わたしは里親運動から退いて、昭和五十年の夏から、自分ひとりのささやかな研究室を運営

することにしました。まだ一年たらずの間にそこで痛感させられるのは、まさに、ますますひどくなるばかりの世間の親子関係のゆがみです。

研究室といっても、大それたものでなく、単にわたしの仕事場、というところですよ。「神戸心療親子研究室」という名前をかかげました。ここで細々とでも、自分の納得のいく勉強を続けようと思います。「世間の、すべての人間関係、社会関係のゆがみの原型は、人びとの乳幼児期の親子関係の中にある」というテーマを追求してみよう、というのですから、中世の欲に狂った錬金術師さながらの単なる夢想家の、一人合点の夢想に終るしかないのかも知れません。そうでないように、そうでないようにと、自分は願っているけれども、つまるところは、現実の中に、どんな視点から、なにを見ることが出来るか、の問題なのでしょう。

人間関係の相談をはじめました、という、わたしの呼びかけを、二、三の新聞が紹介してくれ、この数カ月の間に、いろいろな人々がわたしの小さな仕事場に訪ねて来てくれました。

子どもの育ちの問題。自分の性格の問題。老後の淋しさと虚無の思い。思春期の思い悩み。結婚のこと。離婚のこと。アルコール中毒のこと。進学。浪人生活。学業の問題。夫の性格の問題、妻の性格の問題。親のこと。子どものこと。姑や老いた親との暮らしの問題。

子どもをかわいがれなくて子どもの性格に問題がある。子どもをかわいがりすぎてダメにしてしまった。などなど。わたしの非力をもってしては、役に立つことはほんとは少ない。

わたしは医師ではないので、診療も治療も、医学的なことはなにもしない。来てくれた人々

と話し合うだけです。わたしはこれを、「面接相談の助力」といっています。

親が子どものことを心配してやって来て、問題の子どもは、とうていわたしのところまで来そうにない、という時、わたしは夜中にでも、そのそと、その家に訪ねて行きます。

人と知り合うことの難しさ。安心して語り合える関係を、他人と作りだすことの難しさ。この「難しさ」が、わたしの当面の攻撃目標（ドンキホーテの場合の「風車」でしかないのかも知れない）なのです。

中学、高校生の子どもが問題で、親が心配しつくしている場合、その様子をみてみると、施設収容された子どもが、ともすればあらわしがちの、ホスピタリズム（施設病）の状態と、ある点で酷似しています。わたしは前に、ホスピタリズムを問題にするなら、一方で、ファミリアリズムというか、家族の人間関係が生み出す問題も、大変なものだと書きました。（「親とはなにか」中公新書版）いままさにそのファミリアリズムを直視する仕事をはじめたわけですから、経済状態の安定した家庭内で、親子がみごとにズレて、かみあわしうがなくなっている。

子どもの性格のゆがみが、実に変な状態になっている。なんとということなく暮らしてきて、世間なみに子どもを育てて来たつもりで、ある程度大きくなったとき、子どもの姿が、親の期待とあまりにも違っていることに気づき、親はガク然とする。驚き嘆いて、あせってどうにかしよう、なにをやってみても、やればやる程、親と子は噛み合わない。

そういう問題のいくつもいくつをも、わたしはこの一年の間に見聞しました。

### 親と子の、予期し得ぬ人間関係

そういう家庭にとつては、親と子の関係は、それこそまさに予期し得ぬ人間関係です。その予期し得ぬズレの淵源は、乳幼児期の関係にあったのだ、と、わたしは、持ち込まれたどの問題に接しても、例外なくそう確信できました。

乳幼児期の、親の曖昧な態度に影響されて、子どもは、自分自身の力で、自分の内心の葛藤が超えられず、人間関係を持続し展開することが出来なくなっているのです。もともと持っている自分の力を発揮出来ない。友達とうまくやっけていけない。家庭生活がいやになって、あるいは学校がいやになって、行動停止してしまう。家にすっこんでしまう。あるいはぐれてしまう。あるいは見通しのない男女関係へ乱れ込んでいく。あるいは自殺。……いろいろな逃げ場のない袋小路へ突っ込んでいくのを見てみると、もう何年も前に見たデイズニーの自然の動物の生態をえがいた映画で過剰増殖したなんとかいう名前の小動物の集団自殺の場面を思いうかべます。崖っぷちに大挙突進して、一斉に海に飛び込んで溺死するのです。

今の受験戦争で、惜し気もなく若い人達のエネルギーを知識の詰め込みに浪費させて、弱い性格の、思考力欠如した明日の世代をせっせと作り出しているのは、あの小動物群の集団自殺と同じ、自然の摂理のなさしむるところか、と、一瞬考えますが、そうではない。

心の大事なところを、戦争のどさくさで、ちゃんと育てられなかつた者がいま親になり、判断力総欠如のために、いま壮大な愚拳をやらかしているのです。

例えば、ノブヨシくんは、高校二年です。小さい時から親まかせ。欲の向き次第にいろんなものを買ってもらい、いろんな経験をさせてもらい（高一の夏、スイス旅行さえ、させてもらった）、せめて学校だけとは、勉強だけは手を代え品を代え強制させられた。英語、数学、理科はそれぞれ、家庭教師が来るのです。その結果、絶対に自分の勉強は自分でしない習慣だけが身につきました。高校に入ると、いよいよ勉強についていけなくなり、二年生になると、学業の完全拒否という形で、学校へ行かなくなりました。

両親は、せめて高校大学だけは、と、顔面蒼白で、生きたここちがない、という日々です。最近、エレクトーンを買ってくれたら、学期末の試験だけは出てやる、と親を脅迫しました。親は試験にさえ出してくれるなら、なにと引きかえにしても、とにかくありがたい、と考えて、エレクトーンを買うことを承知しました。三日後に試験をひかえ、子どもはすでに楽器店で機種を調べ、購買の手を打ってきており、親のとめるのをきかずに、試験前日に、搬入してしまいました。試験前に、エレクトーンの音ばかり響きわたらせています。

夜遅く「夜食を作れ」と母親に要求し、勉強にとりかかるのが遅いといって母親がちよつとなじる言い方をする。「気分をそこねた」と町のごろつきそっくりの言いがかりをつけて、「あしたの試験はおかけで行く気がなくなつた」といって、試験当日の朝、起きてきません。

父親がついに怒ってふとんをけとばすと、起きあがって組みついて、あたりのものはこわしまわる。大変な騒ぎになりました。とめに入った母親は背中をどやされて、肩に大きなあおあ

ざが出来ました。

親は、あれは鬼子だ。生れつきダメな子なのだといって、それでもなんとか世間の進学の列に、並ばせるのに、今も必死です。

似たりよったりの事例に、いくつもいくつも、今わたしは接しています。また、これほどひどくなくとも、世間の多くの親子関係は、今、非常にこの状態に似ています。

自分の人生を、自分でひっかぶらなくとも、誰かが、どこかの機関がひき受けてくれる。その引き受けてくれる、引き受け方がいい加減だといって、自分は、なにもせず親や、教育機関や、福祉機関に文句を言っておれば、それでとにかくなんとか暮らしていける。そんな調子です。

自分の感覚で、深い満足を探し求めることが人生なのだ。そのためには、それに伴ってくる面倒な事も、敢えてひっかぶらねば、生きたことにならない。そういう生き方は、もう、過去のものなのでしょうか。

いいえ、そういう生き方も、一方には、現実にはちゃんとある。

わたしは里親運動のなかで、とことんダメな形におち込んだ人々にも、数限りなく接してきましたが、多くのすばらしく人間的な人々と出会うこともできました。

多くの里親家庭の現実には、それを實際目の当りに見れば、人々は絶句するでしょう。わたしなんか、それにくらべれば人間としてチャチで情ない。全く修練のないなまくらにしか過ぎない

い。ほんとうに人々が知る必要のある人間事象は、語らぬ人々によって黙々と続けられている。時代の流行とは全く無縁のところ、脈々と生きている。わたしのような冗舌の徒が、それをわかつた風に見えるなら、たちまちうすつべらな感激物語におちてしまいます。

本当に、人間とは、意外な生き物です。この世の中はピンもキリも含み込んでいます。その両極端のどちらもが現実です。

全体を見渡す。ピンを見る。キリも見る。個別に見る。全部を見わたす。自分自身のバランス感覚を、目の前にとり出して自分の目で眺めて、世の中の幅の広さと、自分のバランス平衡器の卑少さを見くらべて、悄然と冷雨に打たれて、淋しい淋しい。今いるわたしのこの場所この地点にたたずむほかはないのです。

### 親子関係が自然に醸造される土壌

最後に、わたしがめぐり合えた里親家庭の様子を一例だけ述べて、人間が自然な暮らしのリズムによってこそ、影響され感化されて成長するものだとすることを、確認しておきたいと思えます。人間だって、植物と同じく大地に根をおろして安定するのではないかという事をです。

実は、わたしが知ったあちこちの里親家庭には、生きるための力と生きるための知恵が満ち満ちていました。それらを手つ取りばやく紹介しようとする、わたしなどの力ではほんとうにうすつべらな感激物語になってしまうので、この一冊の中に手早く書き込む勇氣はありません。

んが、しかし、それに全く触れないままでいる気にもなれません。

第一、わたしがいま、日に日に接している、弱く崩れた親子関係と対比してみると、あまりにも、日々の営みのあり方には違いがあります。舌たらずながら、わたしは、その違いのはるかさに触れずにはいられないのです。

人間の確かさ、親子関係の確かさというものは、わたしがあちこちの里親家庭で見聞したような無理のない生き方、そして、精いっぱいな人間らしい生き方の中で自然に発酵し醸造されるものではないかと思うのです。

出石の沢田さんは、自分の子ども三人と一緒に、同じ年頃の少年二人を、引き取って育てた。親のいない少年達が、児童福祉施設から沢田さんの家に引き取られたのは、もう十数年前のこととで、そのあたりの状況は、省略します。沢田一家だけが知る悲喜劇の十数年です。沢田夫妻は、子ども達を育てることで、逆に、随分と子育てによって人間的に育てられたことだと思えます。実子も里子もみんな成長して出ていってからも、夫妻は、また幼い子ども達を迎え入れて育てています。タツヤくんは、七年前に、沢田さん宅へ引き取られました。親の行方のわからない子どもです。心の落ちつかない幼児でした。小学生になっても、いろいろと心配ごとを引き起こし続けました。タツヤくんより年が一つ下のマユミちゃんを、すでにタツヤくんより一年前に引き取っていましたが、いまはタツヤくんのことを主に述べます。

兵庫県の出石郡但東町の小谷といえ、奥の奥の田舎で、町の子がそこで過ごす、見当違



いばかりを起こすのも、無理はないかも知れません。

タツヤくんの問題のひとつは、例えば、戸口にカギひとつかけたためしのない小部落のあちこちの家へ遊びに行つては、気楽になんでも持ち出してしまふ。置いてあつたお金も使つてしまふということでした。泥棒や空巢ねらいなどの被害にあつたためしのないこの小部落で、これは大きな事件となりました。

村の寄り合いで、沢田さんにみんなが詰問する。あんな子どもをいつたいうつもりで家に置いておくのか。かわいそうな子どもの面倒を見てやるのは結構なことだ。ほかの誰もが考えてもみようとさえしない立派なことを、あなたは実行する。あなたは偉い。それはなかなか出来ないことだ。あなたが苦労して、里親だかなんだかの名譽を得て、広く社会に認められるのは、そりゃあ立派なことだ。しかし、それがひとの迷惑になつていないかということ、部落中に迷惑をかけていないかということを考えてくれないと、困るではないか。この部落で、家の中のものが無くなるなどということは、まずあつたためしが無い。縁も戸口もなにもかもあけつぱなしにして人は野良に出る。そのあとで、金やらいろいろなものもがたびたび無くなつたんじや、これは村中の大問題。第一、そんなことが、他の子ども達にどんな悪い影響を与えるかは、考えただけでもぞつとずする。一度だけか、二度だけか。今度でおしまいかと、あなたの努力を思うから今まで猶予を与えたが、もう、これはほうつておけない。あの子はもはや、部落全体の今後のことを思うと、神戸の方へ返すべきだと思ふが、どうだろうか。

沢田夫妻がどんなに言つて聞かしても、へらへらした態度で、夫妻の悲しみや苦しみが理解出来ず、タツヤくんのくせはなおらなかつた。あの家からも、この家からも、被害の訴えが続く。沢田さんは頭がおかしくなる程の心痛に沈み込んでしまいました。

策に窮して寝ずに考えた末、沢田さんは、まず部落の一軒一軒に、手紙を届けてまわりました。ザラ紙一枚のガリ版ずりの手紙でした。内容は、「タツヤは、小谷に来るように生まれついたので思つて、みなさん、もう少し許して下さい。だんだん聞きわけのある子どもになつてくる。それを信じてやつて下さい。わたしの努力で必ずよくしてみせます。それを約束します」というようなことが書いてあつた。最後は、

「どうかわたしに、三カ月という時間を与えて下さい。部落のみなさん、お願いします。」と結ばれていました。部落の人々は沈黙しました。

でも、その手紙をくばり終らぬうちに、あちこちからお金がまたもやなくなつたという訴えです。

豊岡の児童相談所で一時保護して、問題の診断と習癖の改善をはかつてもらうのがよいという提案が関係者から出されました。夫妻は残念でたまらぬけれども自分の力ではもはや及ばぬ、専門機関に治療をお願いするべきだと判断しました。

豊岡市は閑散な田舎町です。兵庫県は、南に神戸を中心とする大阪からのつながりの大都市圏と、繁栄する山陽路の東端にあたる姫路が中心の播磨地域と、山陰の風情をもつた北兵庫地



域と、そして淡路島という、いわば、際立って違う四つの顔をもった大県で、豊岡は北兵庫の中心ながら山陰らしい人影の少ない小都市です。その児童相談所も、従って、一時保護児童が常時三十人という年中喧騒のうちにある神戸の同所などとはうって変って、いつもしんと静かな人の気配の少ないところです。

タツヤくんが保護收容されたとき、ほかに收容されている児童はいない、という状況でした。所内のみんなに声をかけてもらい、相談員が訪問調査などに出かけるときには、自動車の運転席の隣に乗って一緒に連れていってもらい、昼の休みには一緒に遊んでもらうという、ごく気安いのんびりとした保護收容のあり方の中で、タツヤくんはいかにものびのびと屈託のない様子です。特に問題のある子とは思えないなあ、と所内でみんなが話し合っていると、十日目に、所員の机の引き出しのお金が無くなりました。彼のしわざでした。

所外へ勝手に出てはいけなと言いつけ聞かせてあるものの、閉じ込めているわけではなく、ほしいものを思いつくと、どこからでもお金を持ち出して、所員の目をぬすんで買い食いに行ってしまう。小学二年のまだ幼い子どもを、所内にたった一人置いておくのも不自然で、この習癖が直らない以上は、一般家庭での生活が無理であり、早く施設收容に切り替えるべきだという意見も出たようでした。

沢田夫妻は、児童相談所にいさせてさえ、習癖が出ていると聞いて、すっかり落胆してしまいました。保護の予定期間の一カ月も過ぎて、判断しかねた相談所からの意見打診に対して、沢田

さんは、タツヤくんに一度会わせてほしい、と希望しました。も一度会って、様子を確かめた  
い。以前と同じ状態ならば、自分の家に連れ戻ってみても、近隣に迷惑を掛けないという見通  
しはどうてい持てない。残念ながら、養護施設へお願いするしかないのだろうか……。

夫妻は児童相談所へ出向き、一カ月ぶりにタツヤくんと顔を合わせた。その刹那に、夫人は  
連れて帰ろう！という即断が出来たと、あとで語ってくれるのです。即断の根拠は、直截なも  
のでした。タツヤくんは、夫妻の顔を見た途端、目をいっぱいに見開き、その両眼にたちまち  
のうちに涙があふれ、頬にポロりと大粒のしずくが落ちた。夫人は胸がおどつてしまい、

「タツちゃん！元氣やったかいや」

と、叫ぶような声をあげた。ご主人もあとで語ってくれました。

「なんも、ほかには理由はないで。連れて帰れば、相変らずひとの家のものを取りよるかはわ  
からん。ええさ、それでも。わたらの顔みてあいつ涙こぼしよつた。いくら遠い道でも、この  
道は必ずいつか開ける。そう思うたですがな」

神戸から連れて帰って一年余。考えてみれば、子どもらしく無邪気に飛びまわっていたよう  
でも、ひとりであわずつたような日々の振舞い。シンに落ちついたものがなかった、というこ  
とに、その大粒の涙の玉をみた時に、気づいたというのです。タツちゃんの様子が変つた。タ  
ツヤがわたしらを引きよせた、というのです。

それから二カ月ほどして、沢田さんからわたし達のところへ手紙が届きました。

「タツヤがよくなりました。すなおに元気よく、嬉しい子どもになりました。もうよその家のものをとったりしなくなりました。部落のみなさんとしたわたしの約束が果たせました」

そのタツヤくんが、翌年の秋の、運動会を目前にひかえたある朝、学校で倒れたのです。ただの貧血にしてはどうもおかしい。タツヤくんは豊岡の病院に入院することになった。そして、白血病と診断されたのです。青天のへきれきでした。長くて半年程のいのちだということです。

ひとの子もわれも自然につつまれて……

それからは急速な悪化でした。体のあちこちに紫斑があらわれて、そこから出血しはじめました。自分の生命のつきる日の近いの知らぬタツヤくんを、不安におとし入れないようにと夫人はつきつきりで笑顔を見せて励ましながら、自分自身食事がのどを通らないのでした。

予想よりも早く発病してひと月、タツヤくんは沢田一家に見守られて息をひきとりました。

失踪して手がかりのつかめない母親が残り残した当時の住所を手づるに、児童相談所が調べたところでは、タツヤくんの母親は、終戦の二年前に広島で生まれた、となっています。二才のとき、広島の大原の死の灰をあげたのでしょうか。その影響が、タツヤくんに突如表出しました。原爆被災二代目の突然の悲惨でしょうか。一度犯した時代のあやまちの、果しのないひろがり。無残な現実がここにもあるのです。

告別の式は、秋の村祭りの前日にあたりました。部落では緊急に、村の祭りをもう一日延期

することに、祭りの準備を中断し、タツヤくんの野辺の送りに村中が集まりました。小学校は遠足の日にあたっていました。遠足を中止してクラスみんなで、学校から歩いて小一時間の道のりを、沢田家の式に参列しました。

この土地のやり方通りに、紙や布や木で出来たさまざまの葬列の作り物が陽に光り風になびき、棺を運ぶ長い列が裏山の墓地まで続きました。

担任の若い女性のK先生は棺が土に埋もれていく前で号泣しました。タツヤくんのあの習癖や、集中力のない性格を、なんとかして直さなくてはと努めて、学年が変わってもタツヤくんの持ち上がりを強く希望した。ようやく最近のタツヤくんの落ち着きを、人一倍喜んでいたK先生は、教諭としての自分の可能性をタツヤくんの成長に賭けていた。深く激しい動哭でした。

後日、沢田家にクラス全員のタツヤくんを思う作文が届けられました。

「タツちゃん雲の上の天国で、いまなにをしていますか。ひとりでなにをして遊んでいますか。雲の上からキヨちゃんやハルちゃんやぼくが遊んでいるのが見えますか」

どの子の作文にも、タツヤくんがあけつびろげな明るさで、生きていました。

タツヤくんはこの小谷の土地にうつさされて三年。もうすでに深く根づいていたのでした。

あれからはや三年余が過ぎました。

沢田さんのうちには、タツヤくんが一緒にころげまわって遊んだマユミちゃんと、タツヤくん亡きあとにまたまた引き取ったテツちゃんとが、いま、元気に育っています。沢田夫妻の子

どもらにそそぐ若々しいエネルギーは涸れることがないように見えます。

わたしはマユミちゃんとタツヤくんが、それぞれ神戸の施設から沢田家に引き取られる時点で、里親運動の関係者の一員として、その場に立ち会ったものです。ときどきに沢田家を訪れました。神戸から片道三、四時間もかかるので、何度も伺うことは出来ませんでした。行くたびに、大地自然のふところに抱かれて息づく人々の暮らしに接して、思いもかけぬ深さで心に安らぎを感じるのでした。

去年、里親のしごとから退いたわたしは、沢田家にはすっかりごぶさたしてしまったので、久しぶりに手紙を書いた。

「みなみな様にはおかわりございませんか。もうタツヤくんが天上界にいかれてから、三年になるのですね。ご夫妻の深い愛情とご苦労のおかげで、タツヤくんの短かくとも得がたい一生の道筋の、輝やかなしいものであったことを、今もまた、思っています。

小谷にはまたまた深い秋が訪れたことでしょう。

マユミちゃんたちの成長もひとしお感慨深くお眺めになつてのことでしょうね。わたしがりヨウタという青年を連れて伺ったのは、タツヤくんの百カ日の頃でした。殊の外のもてなしで、朝早くからの心づくしのモチツキを、りヨウタはいつまでも忘れないと思います。彼も早くから両親を亡くし、人生一人歩きの身の上で、土に根をおろした人達の暮らしをみにいこうと誘えば、わたしについて行ったのでした。



タツヤくんのお墓のまわりの草花が、露をいっぱい背負っていました。

わたしも仕事を変え、里親のみなみな様のご心苦をひとよりは少し余計に知っているつもりでも、力及ばぬふがいなさ。いまは私設の相談室を開いてがんばっています。

大きく言ってしましましょう。子どもを育てることは、自分たちの、この世界を育てることです。子育ての乱れは世界の乱れです。里親運動の仕事からはずれても、子どもを育てることの大事さは、いよいよ主張しつづけようと思います。

十月一日、タツヤくんのお葬式のある日がめぐつてくると、沢田さんご一家のことが思われなくなりません。みなさま、お元気で」

沢田さんからの返事は、次のようでした。

「先日はご丁寧なお手紙ありがとうございます。

タツヤの事をいつまでも忘れずに思つて下さる、それはごく少数の人ですが、タツヤは喜んでると思います。今年は三回忌で、お墓に石碑を建ててやりました。

サルスベリの樹を植えたので、ピンクの花が長い間咲きました。お墓の前にわたしの畠があり、栗の木が大きくなって、栗が今年もたくさんなりました。栗拾いに行くと、タツヤに会いさつが出来ます。

人生、忘却あり。忘れることに救いもある。厳しい、生きることの日々。人間を、いつの間にか経済合理主義に仕立て、温かさ豊かさを失わしめてしまう。平均して七十年の生涯ではな

いか。なぜもつと、貧しくとも真に心の豊かな暮しをひとびとは選ばないのか。

九月十五日に、長男に嫁を迎えました。〇〇で新家庭を築いています。長女は昨年〇〇に嫁し、一女が生まれました。次男は目下××大学に留学しています。うちで育つたあの二人も、なにかとっては帰ってきてくれます。みんな、わたしども夫婦の考え方、行動、里親としての生き方を肯定している。いろいろあつたけれども、今はそれがはつきりしました。タツヤが死んだとき、みんなで共に涙を流した。あれからもう三年たった。

秋が深まり、黄金色の田んぼも、一枚一枚刈り取られていきます。わが家も半分ほど済みました。十月に入り、一日おきに雨が降って困っています。

十日は村の秋祭りで一日を楽しみました。餅まきがあり、マユミも九コも拾いました。ウラに一等から五等までの数字が書いてあり、景品がもらえる。神社の森は一瞬喚声がこだまする。世話係が交替で、忙しいので廃止の声もありますが、是非続けろと、続けています。

今日、日曜日。また朝から雨降りでも何も出来ず休んでいます。秋は紅葉、冬は雪、春は花、夏の緑。わが里は山里なれど、四季毎に美しく谷川には清流が流れています。

多くの期待と信頼のなか、新しい仕事に入られた先生の、新分野でのご活躍をお祈りします。どうかタツヤの墓参りにおいで下さい。彼は待っています。先生はなぜ来てくれないかと。

豊岡病院へ入院直後に来て下さって、豊岡駅までまだあの時は先生を、皆して車で送っていた。さよならと手を振った。それが今生の別離であつた。いつでも先生のお手すきに、いや

手をすけて、まいつてやって下さい。お願いします。

健康にくれぐれもご留意、ご健勝お祈りします。家内からくれぐれもよろしくとの事です」

……わたしは、なぜ、沢田さん夫妻のような人々が、つまり、ひとの子もわれも共に自然に  
つまれて生きてしまえる人々が、この世に現実に存在するのか、そして、圧倒的多数の世間  
の人々はその存在を知りもしないでいるのか、そのことを思うのです。

たじろがないで見つめ続けられないか

こうして、わたしがめぐり合わせていただいた里親家庭の、一例でも語りはじめてみると、  
前章までに熱弁をふるったさかしらわたしの育児についての考察が、なんとも意識的すぎる  
ものであり、人工的すぎるものであると、感じないわけにはいかない。

自然に生まれであることほど確かな生き方はない、と思います。しかし、そうは言いなが  
ら、わたしは、だからみんな自然に戻れ、自然に戻れば問題はすべて解決だなどと、叫ぶつも  
りはありません。人間は自然な生きものとしてもと地上に存在したのだなどとわたしが考  
えるのは、わたしの意識がそれを考えさせるのです。

自然な生きものであるということと、頭でものを考える意識的な存在であるということが、  
もっともつと調和し合わねばならないと思うのです。

実際のところ、大地に根をおろしたような農村の自然な生き方は、そのウラにおそろしいよ

うな因習や偏見に固執する一面も、またあわせもっているのが通常の姿です。根太く根気よく子育てにいそしんでおられるある地方の里親家庭で、そのたくまぬ生きざまに感嘆しながらも、一方で、義理人情のあきらめに泣く「女の涙」とかの歌謡曲に感情移入して涙を流すひとびとの没我の姿に接して、しかも、心づくしに出してくれたおしんこの、毒々しいばかりの黄色を眺めながら、つき離された思いであった、ある日の情景などが、次々と思い出されます。

さまざまな生活、さまざまな人々にめぐり合つて、痛切な共感を抱き、その共感わたしの心のすみずみに響きわたったかに見えて、瞬後にどこかしらが早やさむざむしく冷えている。

希望に燃えきれず、絶望におちきれない。そのくせ希望は果てしなく強く、絶望の淵は底無しに深い。大それた言い方かも知れないけれど、その二律背反が、人間的だ、と思うのです。

第八章で、わたしは、乳幼児にとつて母親は、世界一憎らしくて世界一好きな存在だと書いた。そういう両極端の感情を持ちながら、子どもは母親との関係から逃げない。逃げないで、現実と向きあつていく基本訓練を、人々は乳幼児期に、それぞれなりに親と子の関係において履修してしまうのだ、というようなことを書きました。どこまでも逃げないか、どこかで逃げをかわしてしまうか。その程度の差、型の違いは、幼い時の親子の関係でその原型がきまるのだ、と述べました。

対立する二者の葛藤。それが生きていく限り、どこまでもついてまわるのだと思います。

この生き方がいい、あの生き方が悪い、と評定する資格はわたしにはありません。いや誰に

だつて無いと思ひます。ただいろいろな生き方を見れば見るほど、思ひはいろいろ深まります。広がります。

親子の關係についても、さまざまの成り行きがあります。ああいう形もあるのだな、こういう場合もあるのだな、と嬉しくなったり淋しくなったりします。いろんなものを知つても、それでどういふことでもない。希望が深まるかわりに、絶望も強くなるなんて、それでは、得にも損にもならないではないか、といわれると、そうだ、と思う。全体として得にも損にもならない。ただ、得だ得だと浮き足立つてよろこぶ愚かさからは自由になると思ひのです。また損だ損だと思ひつめて身も心もいためてしまふ自己拘束からは自由になると思ひのです。

そして、自由で柔軟な心で対していたら、親として、親子の關係が予期せぬどんな關係に進もうと、たじろがない平生のままの目で子の姿を見つめ続けられるでしょう。子として、親を見る目も、自分がどんなところで親に影響づけられようと、たじろがない平生の目を持ち続けられる。そして、親のあり方を超えた進み方を自分で自由に発見していけるでしょう。

親のことなんて、子どものことなんて、とわらつて、問題にしようとしな人、世間につばいいますが、ほんとうのところ、親のある人もない人も、心の中の親に向かつて、つまり自己の作りだしたイメージとしての親に向かつて、なにかを語り続けるものだとなつたしは思ひます。いま、こんなところを歩いている、と報告し続ける。現実の親が、その声を聞き届ける親であれば、と思ひます。つまり、親は、親子の關係がどんな予期せぬ關係へ展開していこ

うと、たじろがない存在であるべきだ、そうでありたい、と思うのです。

どうせ、こんな世の中です。柔らかな心を持つとうと考える限り、どの方向へ行こうと、生きづらいのです、誰もみな……。それを、おたがいに認めざるを得ないと思うのです。

最後まで一人勝手ない気な冗舌が過ぎました。さて、ここでペンを置こうとしたら、言葉にならないなにかが、胸を圧してくるようです。敢えて表現すれば、書くということの空しさともいうのでしょうか。それとも身のほど知らずな本を書こうとした浅ましさへの自己批判の嵐でしょうか。

花が咲いたのに、陽春とは言えない。今夜も底冷えがする。深夜、二時も過ぎました。表の道の車の音も、ほとんど絶えました。

## 《自己に問いつづける “人間の福祉”》

青木茂夫

世の中、何がよくて何がよくないか、どうもよくわからない。もうどうでもよいではないか、というところもある。しかし、よい人物に出会い、よい芸術作品に触れ、よい文章を読んでいると、改めてよいものはやはりよいなあと思うし、そこで勇気づけられもし、教えられもし、それではもうひとふん張り生きてみようか、と気を取り直してもみるのである。伊藤さんの人がらや、仕事や、文章は、その意味で疑いなく良質のもので、私はここ一、二年の間ずっと伊藤さんの仕事に力を与えられつづけてきた。

この本に収められた文章は、昭和四十九年八月から大阪都市協会の雑誌「大阪人」に「親と子を考える」と題して毎月書かれたもので、二年の予定で現在なお連載中の前半が、ひとまずここにまとめられたものである。これだけ全力で書き込まれるとは、私は当初予想しておらず、編集者としては望外の喜びであった。ばいぼ出版社によって一冊にまとめられたこともやはりうれしい。

伊藤さんの文章を読物として読まれるのも自由だし、子を持つ親の自己反省や、生活の再発見のために読まれるのもよいけれども、私は、この文章の奥に、どろりと淀む沼のようなところで夜昼なく鋭い眼光を放っている、伊藤友宣という人間を考えてみるのも、もう一つの重要な読み方だと思う。人間らしい人間として全力をあげて生き抜こうとしている一人の誠実な男がここに

あって、いろいろと教えられもし、考えさせられるからである。

伊藤さんと私は同年で、よく気心が合い、よくしゃべった。お互い年中あわただしい生活を背負っているが、その合間を縫って、大阪や神戸の裏町のおでん屋で串を横に引抜きながらしゃべり、安いすしを噛み、かつ飲みながらしゃべった。私は頭髮が割ほど白いが、伊藤さんは割ぐらい白。色黒で、少しふくれた感じの顔だち。笑うと白い歯が美しく現われ、健康的でじつにやさしいが、ふだんは、メガネの後ろの細い目が刺すようで激しい。

文章もまた激しい。世の中や人間や子どもや大人の生活の実態が、内側から、じつに生々しい手ざわりで描かれ、追いつめられている。私はその文脈の材質感に強く心ひかれながら、結局この「親と子を考える」は、一人の男の、夢や気負いや悲しみや、その中からいさぎよく立ちあがってくるところの息づかいであるらしいと気づくのである。伊藤さんの「親と子を考える」は、そこで人間不在の社会福祉を越え、きれいごとの通俗文化を越えて、世の悲劇的な親と子の前に、自己自身どう考え、どう生きたらよいのかという、基本の問題に踏み込んでゆくのである。本当の「親と子」はここからしか生まれまいし、本当の人間も、本当の社会性もここからしかはじまらないのではないかと、私は考えている。

現在、親子問題の相談業をしている伊藤さんが、時に楽しそうに見え、時に苦勞しているな、と見える。私はそのたびに、この人をもっと大切にせねばと思う。もっと自由によい仕事をしてもらわねば……。そうねがう私であり、また、そういう世の中を作らねばと思いつめているのである。伊藤さんよ、健在なれ。

(大阪都市協会編集部長)



## 伊藤友宣(いとう・ともりのり)

昭和9年、神戸市生まれ。昭和35年、阪大教育学科(教育心理学)在学中に里親運動にはいる。多くの実践を重ね、昭和41年から50年まで社団法人家庭養護促進協会の事務局長。現在、フリーの親子問題カウンセラーとして活躍している。神戸心療親子研究室主宰。既著「親とはなにか」(中公新書)他。

連絡先—神戸心療親子研究室  
〒652 神戸市兵庫区下三条町2-6  
電話 (078) 531-3860

## 親と子 —この予期せぬ人間関係—

定価 ¥920

1976年6月10日 初版発行

1983年3月1日 第7版発行

著 者 伊 藤 友 宣

発 行 者 山 本 林 太 郎

発 行 所 ぱいぼ出版株式会社

〒654 神戸市須磨区潮見台町1-3-5

振替 神戸47881 電話(078)575-0920

印刷・製本 株式会社南大阪印刷センター

© TOMONORI ITOH 1976

万一落丁乱丁がありましたら、お取替えいたします

ISBN4-89191-003-8 C0037 ¥920E

好評発売中

# 叱 る

—子どもが育つための100項目—

## 子どもの暮し

—教育と福祉の外で—

親が、教師が、しつかり叱れるのは、子どもとの関係が、どういう時か!? 「叱る」行為の再検討を通じて、現代の子育ての歪みを浮き彫りにし、問題のありかを探る。

定価  
1,000円

子育てを教育や福祉行政に頼ることばかりに熱心で、子どもの「暮し」を破壊してかえりみぬ風潮を批判し、真に豊かな親子関係をきざすための基本をしめす。

定価  
950円

伊藤友宣著

送料 各冊160円 (昭和55年8月現在)

